

美濃金山城跡主郭発掘調査報告書

2 0 2 1

岐阜県 可児市
滋賀県立大学

美濃金山城跡主郭発掘調査報告書

2 0 2 1

岐阜県 可児市
滋賀県立大学

例 言

1. 本書は可児市、滋賀県立大学が平成29年度～令和元年度に実施した可児市兼山字古城山に所在する国指定史跡美濃金山城跡の第6～9次の発掘調査報告書である。第6次の調査成果は『国史跡美濃金山城跡調査概報Ⅰ』、第7次の調査成果は『国史跡美濃金山城跡調査概報Ⅱ』に掲載をしているが、第6～9次調査までの成果を精査することにより概報刊行時とは異なる評価となっている部分もある。そのため、今回の報告書を主郭部分の本報告とする。なお、各概報に載せたトレンチ名や遺構名は本報告の整理の段階で名称等を一部変更している。

2. 調査期間及び調査組織・担当は下記のとおりである。

第6次調査	平成29年9月4日～10月27日	中井均（滋賀県立大学人間文化学部） 長江真和・長沼毅（可児市教育委員会）
第7次調査	平成30年8月9日～9月28日	中井均（滋賀県立大学人間文化学部） 長江真和・村上慶介（可児市教育委員会）
第8次調査	令和元年5月13日～11月15日	中井均（滋賀県立大学人間文化学部） 長江真和・村上慶介（可児市文化スポーツ部）
第9次調査	令和2年2月17日～3月13日	中井均（滋賀県立大学人間文化学部） 長江真和・村上慶介（可児市文化スポーツ部）

調査組織

平成29・30年度 可児市教育委員会

教育長	竈橋義朗
教育委員会事務局長	長瀬治義（H29） 村瀬雅也（H30）
文化財課長	川合俊

令和元年度 可児市文化スポーツ部

文化スポーツ部長	杉山徳明
文化財課長	川合俊

指導組織

美濃金山城跡整備委員会

中井均	滋賀県立大学	高瀬要一	琴ノ浦温山荘園
溝口正人	名古屋市立大学大学院	川合康司	日本地質学会
福島克彦	大山崎町歴史資料館	山村亜希	京都大学大学院
丹波隆政	可児市山城連絡協議会	飯田泰平	兼山地域審議会（H29・30）
鍵谷光長	兼山地区センター長（H31・R1）		
オブザーバー	文化庁、岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課		

3. 調査参加者は下記のとおりである。

井内南奈香、石野稜真、一井健之介、伊東涼太、岩崎心人、植田紘正、遠藤あゆむ、片岡啓、河合さくら、川崎あかね、河本愛輝、小林風雅、齊藤秀香、佐藤佑樹、S A I B E N J I A、柴田慎平、杉山佳奈、杉山友太、鈴木陸、瀬川真緒、高瀬裕太、高野航太郎、滝本時玄、戸田龍蔵、西川萌絵、西澤光希、野崎成二、野々口蒼太、松原草太、三木将弘、三瓶裕輔、向井悠里子、森田遥、吉田靖吾（以上滋賀県立大学学生）
黒田祐規子、多和田伴子、西田まゆみ、萩原さちこ、堀木彰、本田博志、武藤淳司
（以上可児市）

4. 調査写真は各担当が撮影し、遺物写真は長江、佐藤、一井が撮影した。遺構・遺物図版並びに整理作業については、長江、黒田、本田、西田遼子、滋賀県立大学学生が行った。

5. 本書は分担して執筆し、執筆者は目次及び文末に記した。編集は長江、中井、村上、佐藤、柴田、松原が行った。

6. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など特徴のわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。遺構の表記は、SB：建物 SK：土坑 SX：敷石状遺構 SV：石垣の記号を用いた。

7. 遺物の分類及び区分は以下の各文献に従った。

愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』

井川祥子 2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』高志書院

小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第2号

日本貿易陶磁研究会

乗岡実 2007「戦国時代の備前焼－編年と器種分化－」『東洋陶磁』VOL.46 東洋陶磁学会

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号

日本貿易陶磁研究会

山内伸浩2010「美濃窯（瓷器系）」『古陶の譜 中世のやきもの－六古窯とその周辺－』

8. 調査ならびに報告書作成の過程で下記の方々に多大なるご指導とご協力を賜った。

伊藤航貴、井川祥子、内堀信雄、大道和人、小澤一弘、小野木学、小野友記子、加藤理文、金宇大、小谷徳彦、小林晃太郎、島田章広、島田崇正、下高大輔、杉本和江、杉本圭祐、砂田普司、谷口哲也、田ノ下雄二、中畠茂、萩原さちこ、濱野浩美、松井一明、丸山組、溝口彰啓、三宅唯美、美濃金山城おまもりたい、森久子、山口誠司、吉田実華

（五十音順・敬称略）

9. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市文化財課で保管している。

目 次

例言

第1章 美濃金山城跡を取り巻く環境

第1節 地理的環境（村上）	1
第2節 歴史的環境（村上）	1
第3節 調査の経緯と経過（長江）	5

第2章 調査成果

第1節 I区（柴田）	8
第2節 II区（柴田）	20
第3節 III区（松原）	26
第4節 IV区（松原）	30
第5節 V区（佐藤）	32
第6節 石段部分（長江）	41

第3章 まとめ

第1節 検出された遺構について（佐藤・柴田・松原）	46
第2節 美濃金山城の石垣について（柴田）	49
第3節 「天守」の範囲復元試案（松原）	51
第4節 美濃金山城廃城に伴う破却行為（柴田）	57
第5節 遺物の出土状況からみた様相（長江・佐藤）	59

第4章 総括

第1節 各地区の関連性（長江）	66
第2節 総括（中井）	70

表 目 次

表1 I区遺物観察表1	18	表6 V区遺物観察表	40
表2 I区遺物観察表2	19	表7 主郭出土遺物計測表	60
表3 II区遺物観察表	25	表8 各地区の瓦出土状況	61
表4 III区遺物観察表	29	表9 各地区の変遷	66
表5 IV区遺物観察表	31		

図 版 目 次

図1 市内関連遺跡分布図	3	図3 主郭調査区位置図	7
図2 美濃金山城跡山上曲輪配置図	4	図4 I・II区平面図	9

図5	I区平面図	10	図45	c-c'土層図	31
図6	a-a'土層図	11・12	図46	IV区出土遺物	31
図7	SV1立面図及びb-b'土層図	11・12	図47	V区周辺遺構分布図	33
図8	c-c'土層図	11・12	図48	V区遺構平面図	34
図9	d-d'土層図	11・12	図49	5・6トレンチ堆積状況	34
図10	SV2立面図及びe-e'土層図	11・12	図50	a-a'土層図	35
図11	f-f'土層図	11・12	図51	b-b'土層図	35
図12	g-g'土層図	11・12	図52	c-c'土層図	35
図13	h-h'土層図	11・12	図53	V区出土遺物1	38
図14	i-i'土層図	11・12	図54	V区出土遺物2	39
図15	j-j'土層図	11・12	図55	南I（南腰曲輪）、枅形虎口平面図	42
図16	k-k'土層図	11・12	図56	枅形虎口（南面）立面・断面図	43
図17	l-l'土層図	11・12	図57	d-d'土層図	43
図18	m-m'土層図	11・12	図58	C4-B4土層図	43
図19	I区出土遺物1	15	図59	石段部分出土遺物	43
図20	I区出土遺物2	16	図60	二の丸 - 枅形虎口間 a-a' 石段断面図	45
図21	I区出土遺物3	17	図61	C2-C6土層図	45
図22	II区平面図	21	図62	二の丸 - 枅形虎口間 a'-b' 石段断面図	45
図23	n-n'土層図	23	図63	V区とSV17の関連図	48
図24	o-o'土層図	23	図64	豊臣城郭石垣の石垣面変遷	50
図25	p-p'土層図	23	図65	豊臣城郭石垣の築石接点変遷モデル	50
図26	q-q'土層図	23	図66	美濃金山城跡推定略図	51
図27	r-r'土層図	23	図67	断面位置図（第2期の遺構）	52
図28	s-s'土層図	23	図68	石垣断面①復元図	52
図29	SV3立面図及び土層図	23	図69	石垣断面②復元図	52
図30	II区出土遺物1	24	図70	石垣断面③復元図	52
図31	II区出土遺物2	25	図71	石垣断面④復元図	52
図32	III区平面図	26	図72	西II SV3・4	55
図33	SV4立面図及びa-a'土層図	27	図73	②断面 二段石垣復元	55
図34	b-b'土層図	27	図74	③断面 二段石垣復元	55
図35	SV5立面図及びc-c'土層図	27	図75	④断面 二段石垣復元	55
図36	d-d'土層図	27	図76	石垣上面幅平面復元図	55
図37	e-e'土層図	27	図77	石垣復元図（西より）	56
図38	f-f'土層図	27	図78	石垣復元図（南より）	56
図39	g-g'土層図	27	図79	破却行為の工程模式図	58
図40	h-h'土層図	27	図80	美濃金山城跡出土の軒・丸・平瓦	65
図41	III区出土遺物	29	図81	織豊期における他遺跡出土の桐文軒平瓦	65
図42	IV区平面図	30	図82	主郭変遷概念図	67
図43	a-a'土層図	31			
図44	b-b'土層図	31			

第1章 美濃金山城を取り巻く環境

第1節 地理的環境

本遺跡は木曽川中流左岸、可児市兼山字古城山一帯に立地する。古城山（標高約276m）は、東側を坊主山（標高約248m）、西側を高根山（標高約261m）と連なり、それらの山麓には木曽川の流路に沿って、集落（金山城下町遺跡）が帯状に東西約2.3kmに広がっている。兼山地区は、一般的に兼山段丘と呼ばれる木曽川が形成した狭斜な低位河岸段丘上にあり、東は加茂郡八百津町伊岐津志、西は可児郡御嵩町上恵土、木曽川をはさんで加茂郡八百津町上牧野と接している。南は古城山をはさんで御嵩町伏見へ緩やかに傾斜し、北は木曽川をはさんで八百津町和知と境界をなしている。兼山段丘は、チャートや砂岩、粘板岩といった火成岩で構成されている。また土壌は、木曽川による河岸堆積物が少なく、本遺跡内においても岩盤の一部が露頭している。

本遺跡がある兼山地区は、北に木曽川が流れ、南に東山道、近世中山道が通る交通の要衝である。そのため、後述のとおり戦国時代には本遺跡を中心とした城下町が形成され、斎藤氏、森氏の重要拠点となった。またこの頃から兼山は木曽川の湊町として商業においても発展を続けた。

第2節 歴史的環境

大通寺所有（戦国山城ミュージアム寄託）で県重要文化財の室町期青銅製燭台（2点のうち1点）と花瓶の底部には、それぞれ天文9年（1540）、弘治元年（1555）の「中井戸」の銘がある。また同館収蔵の貴船神社の棟札にも同様の記載があり、兼山を含む地域一帯はこの時期には中井戸と呼ばれていたと考えられる。

美濃金山城の前身となったと考えられる城郭は、『金山記全集大成』の記述より、天文6年（1537）に斎藤大納言（正義）が築城したと考えられてきた。同書は江戸期の編纂物であるため、その信憑性については議論があるが、美濃金山城とその周辺に関する記述が豊富であり、以前から参照されてきた。この斎藤大納言（正義）という人物は、近年になって『岐阜県史』史料編所収の「今枝古文書写」にみえる斎藤妙春と同一人物であることが指摘されており（横山2015）、従来説にみられる近衛家の庶子というよりは、斎藤持是院家に関係のある人物なのかもしれない。

美濃金山城は『金山記全集大成』の記述に従えば、斎藤大納言（正義）が築城した当初は烏峰城と呼ばれ、その後の地域の抗争によって可児地域の有力な土岐氏族であった久々利氏が所有していた時代もあったらしい。

永禄8年（1565）4月13日付の顔戸八幡神社棟札には、斎藤龍興家臣の長井隼人佐道利が明知荘代官職を担っていたという記載があり、その時点では道利が烏峰城主であり、顔戸一帯を含めて支配していたと考えられる（横山 2015）。

同年、織田信長による美濃侵攻の一環として家臣である森可成が烏峰城へ入城し、烏峰城を金山城と改名している。可成は元亀元年（1570）に宇佐山城（滋賀県大津市）を築くが、同年の志賀の陣において朝倉・浅井連合軍と応戦し、坂本（滋賀県大津市）周辺で討死する。

その後、可成の子 長可が金山城主となり、可成の菩提寺として、南東側の峰に可成寺を開山させたと伝わる。長可はその後伊勢長島一向一揆攻め、甲州征伐などで功を成し、天正10年（1582）3月に武田氏旧領である川中島四郡（更科、高井、水内、埴科）へ転封となり、海

津城（長野県長野市）に入城した。そのため弟 成利（乱丸）が金山城主を引き継ぐことになったが、同年6月に本能寺の変が起こり、成利（乱丸）をはじめ、力丸、坊丸が命を落とすこととなった。『金山記全集大成』の記述を元にその後の長可の動きを見てみると長可は遠征先の関山（新潟県妙高市）でその報を聞き、6月12日に一旦海津城へ戻り、6月18日には金山城へ向けて川中島を出立した。6月24日に帰城し、翌日には岐阜城へ弔意を示しに出向いている。そして再び金山城主となった長可は、金山城を拠点に東美濃平定に動く。7月2日の米田城（加茂郡川辺町）攻略を皮切りに、加治田城（加茂郡富加町）、大森城、上恵土城（可児郡御嵩町）を攻略し、根本砦（多治見市）は長可へ恭順の意を示し、本領安堵となった。翌年天正11年（1583）には高山城（土岐市）、妻木城（土岐市）も相次いで降伏し、久々利城を攻略、小里城（瑞浪市）も勢力下におきつつ、同年5月には苗木城（中津川市）を落とし領内の支配を固めていった。

天正12年（1584）3月6日には小牧長久手の戦いがはじまり、16日に長可は羽黒（愛知県犬山市）に着陣するがその後に徳川主力軍の急襲を受け、金山城への撤退を余儀なくされる。26日には家族に向けて遺言状（戦国山城ミュージアム蔵）をしたため、徳川本拠地である三河入りのため長久手方面へ出陣するが、翌月9日、仏ヶ根（愛知県長久手市）で討死にする。現在付近には長可の異名「鬼武蔵」に因んで祀られた武蔵塚が残る。

長可の死後、末弟の忠政が金山城主となり、金山を統治していく。忠政は兄 長可同様、豊臣秀吉に仕え豊臣姓を下賜され、「金山侍従」と称されたほか、桐文瓦の使用を許された。忠政は天正15年（1587）の九州征伐、小田原征伐、文禄・慶長の役で活躍し、慶長4年（1599）に川中島へ移封となり、奇しくも兄 長可の足跡を辿ることとなった。森氏が去った金山城は、犬山城主で木曾代官であった石川貞清（光吉）が支配を兼帯した。関ヶ原の合戦後、小笠原吉次が犬山城主となり、金山城が破却されたとされる。この際に、金山城の諸施設が犬山に移されたという「金山越」の伝承が、地元の兼山と犬山の双方に残されている。

明暦2年（1656）には、同じ尾張藩領であった金山（下呂市）との混同を避けるため、「兼山」と改称された。その後城山一帯は尾張藩のお留山、国有林へと変遷し、昭和28年に兼山町が払下げを受けた。

その後、金山城跡は兼山町時代に県指定を受け、平成17年に兼山町が可児市と合併し、平成25年に国指定の際、国名を冠した「美濃金山城跡」として指定を受けた。以後本市を代表する文化財、観光名所の一つとして保護・PRをする中、地域ボランティア団体「美濃金山城おまもりたい」も発足したことで、定期的な整備ボランティア活動により遺跡が良好な状態で見学できるようになっている。

（村上）

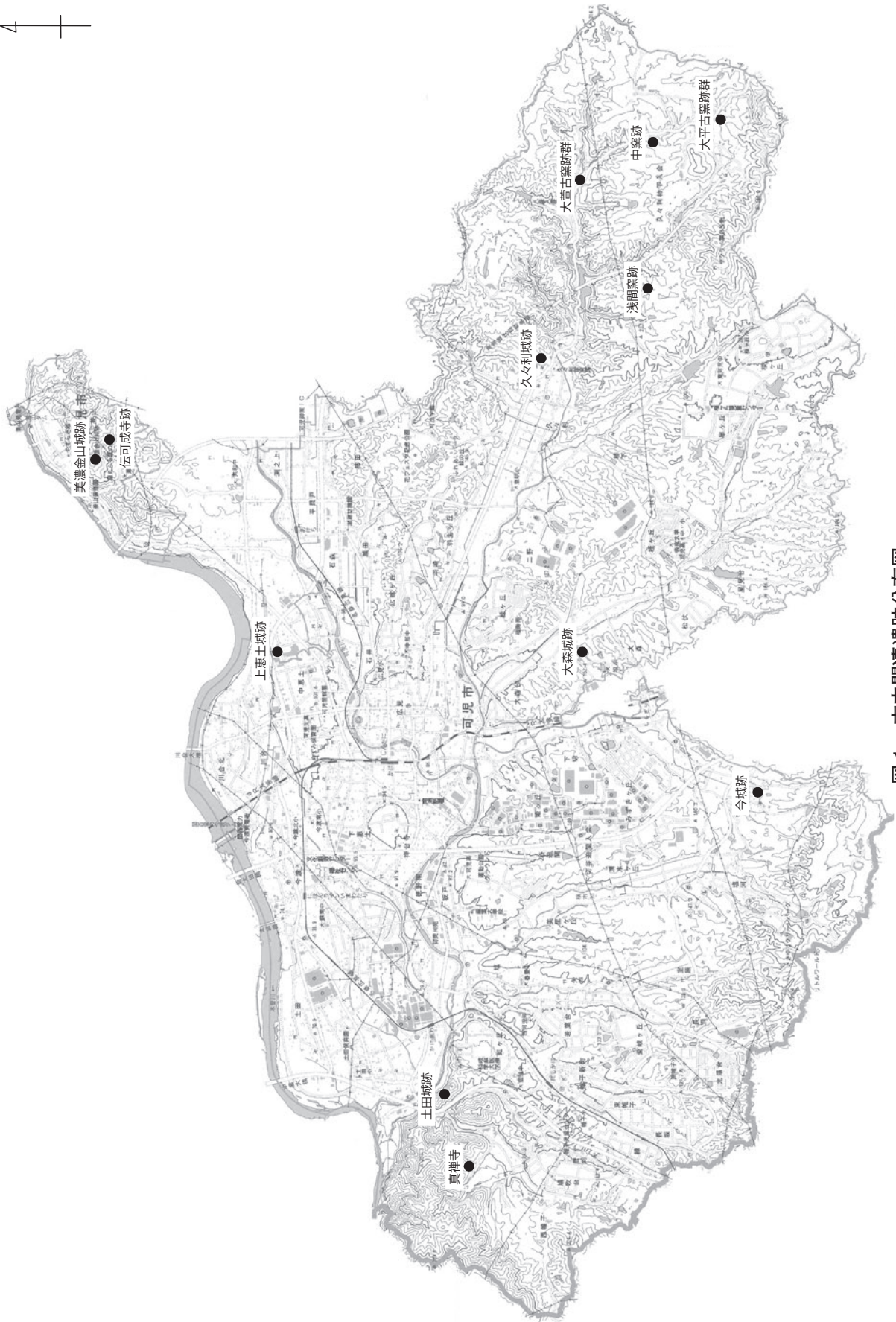


図 1 市内関連遺跡分布図



図2 美濃金山城跡山上曲輪配置図

第3節 調査の経緯と経過

美濃金山城跡は、平成18～22年度の第5次にわたる調査により各曲輪の内容及び城跡の範囲確認調査を行い、平成25年度に国史跡となった。その後、平成26～27年度に保存活用計画を、平成28年度には整備基本構想を平成29～30年度に整備基本計画を策定し、平成29年度より整備に向けて各曲輪の構成要素を明らかにするため、未調査部分を中心とした発掘調査を主郭部分から開始した。

現在の主郭は緩やかな平坦面であり、その平坦面には美濃金山城跡の最終時期の礎石が露頭し、四方には廃城の際の破却の痕跡を良好に残す石垣がみられる。その他、南西側の既設階段や石柱、説明看板、ベンチなど後世に設置されたものもみられるが、廃城後の状況をあまり改変が入ることなく現在に伝えているといえる。

整備基本計画に基づき、主郭部分（Ⅰ～Ⅴ区）について平成29～令和元年度まで調査を行った。過去の主郭の調査とともに、各年度の調査経過をみていく（図3）。

（1）昭和41年度

昭和29年に建てられた建物の北側及び北西側、虎口部分の発掘調査が行われている。主郭では礎石を確認し、北側では古瓦の破片や鏝、角釘、鎧通、一厘銭などが出土したようである。北西部分では炭塊の入った黒灰層が検出されたことから、その場所を屋敷地のゴミ捨て場と推定している。なお、この地点では陶器片は出土しているが、瓦は出土していないようである。主郭虎口部分は「穴蔵跡」という認識がされており、天守台より穴蔵跡に落下したといわれる土砂を除き、土台石が検出され、大きな発見として取り上げられている。

調査の成果による主郭の建物配置として、南側の張り出し部分に「櫓」、中央付近に「御殿」、建物が建っていた部分が「天守」という配置が検討されている。また、かわらけや瀬戸美濃産陶器、瓦など多くの遺物が見つかり、平成18年度以降の調査では出土していない良好な残りの遺物が多く出土している。

（2）平成18年度

主郭部分の建物跡や主郭に構築された石垣などの保存状況の確認を目的としている。主郭の現地表面にみられる礎石を基に平坦面に4箇所のトレンチを、北側の石垣屈曲部分に1箇所のトレンチを設定したほか、礎石と想定される部分に対し壺掘りを行った。また、礎石等が確認された場所に関しては一部拡張を行っている。主郭の四面にみられる石垣は堆積土が被り、目視できない状況であったため、堆積土の除去をし、石垣の残存状況の確認を行い、図化した。

調査は昭和41年の調査の再確認も含めた調査であり、主郭における礎石の位置等の確認を行った。現地表面に見られる礎石の約20cm下の深さから川原石の礎石が検出され、主郭中央付近の御殿は二時期あることが分かった。整地土から大窯第4段階前半の遺物が出ているため、現地表面に見られる礎石はそれ以降に据えられていることが想定される。この御殿には南側に現存長16.8mの雨だれ用の排水溝が確認されている。その他の遺構としては御殿の北側と南側で拳大の川原石を敷いた部分が検出された。遺物はかわらけや瀬戸美濃産陶器、中国陶磁、瓦などが出土し、瀬戸美濃産陶器は古瀬戸後Ⅳ新～大窯第4段階後半に収まる。

主郭の四方向に築かれた石垣は、南面は石材の面を揃えて精巧に築かれている様子であることが分かったほか、東側では積み直している様子もみられた。この時には虎口部分も表土除去等を行い、虎口部分の石段は一部積み直しが行われている。

(3) 平成29年度（第6次調査）

昭和29年に天守があったと想定される部分に建てられた建造物の撤去ができたため、天守想定部分を「Ⅰ区」、その北西部分を「Ⅱ区」に設定した。

Ⅰ区は天守が想定される部分の構造や規模の解明を目的とし、1～5トレンチを設定した。調査では内側に面を向けたSV1、SV2が検出され、その高さから穴蔵構造ではなく半地下構造の瓦葺建物であったことが明らかとなった。しかし、礎石や柱穴等は検出されなかったため、建物構造は把握できなかった。土層の状況からⅠ区では三時期に変遷していることも確認された。

Ⅱ区はSV3、北側と南側で石敷遺構（SX1、SX2）が確認された。SV3は階段状に並び全長約4.7mを測る。裏込めを確認する目的で10トレンチ（『概報Ⅰ』Aトレンチ）を設定したところ、10～20cm大の石を含んだ裏込土が確認された。SX2より西側では11トレンチ（『概報Ⅰ』Bトレンチ）より自然岩盤の上に整地を行い、礎石（SB3）を据えていることが分かった。整地の際には礎石より低いSX2を埋めていることが考えられ、Ⅱ区も二時期に変遷していることが想定される。

(4) 平成30年度（第7次調査）

平成30年度はⅠ区の追加調査と新たに主郭虎口部分に「Ⅲ区」、主郭の西側の凹み部分に「Ⅳ区」を設定して調査を行った。

Ⅰ区では半地下構造建物の北側の範囲を調べるために、6-1トレンチを設定した。6-1トレンチでは東側の石垣列（SV1）の続きが検出され、更に北側の石垣列の有無を確かめるため6-2、6-3トレンチを設定したが、北側では内側に面を向けた石垣列は検出されなかった。

Ⅲ区は全体を掘り下げ、岩盤部分と整地層、礎石を検出した。また、整地層の下からも礎石（5・6）が検出され、二時期に変遷していることが確認された。なお、昭和41年度に確認された土台石が確認できなかった他、南側の石段で残存しているのは一部であり、ほぼ後世の積み直しであることが再確認された。石垣の前後関係を確認するために設定した2トレンチにより、SV4とSV5は同時期に造られていることが分かった。

Ⅳ区は現地形で凹み、石組が見られる場所であり、Ⅰ区の半地下構造の瓦葺建物と反対に位置するため、虎口があるのではないかと想定された。結果、この場所は後世の攪乱が入り、造成も弱いことから虎口ではないことが明らかとなった。

(5) 令和元年度（第8次調査）

令和元年度の第8次調査は南Ⅱから枡形虎口へとあがる石段部分及びⅠ区の追加調査、北西の未調査部分に「Ⅴ区」を設定して調査を行った。

石段部分は石段を補修するための調査であり、美濃金山城当時の石段は確認されず、後世に積み直したものであることが明らかになった。石段部分は㈱イビソクに委託し、積み直し等を行った。

Ⅰ区の追加調査は、礎石等の建物の構造を検出にするため1・2トレンチより南側を面的に掘削した。結果、調査部分では礎石や柱穴は検出されなかった。

Ⅴ区は4箇所のトレンチを設定した。主郭の北側では地表面から約70cm下で被熱遺構が検出され、その遺構を埋めた整地面があり、Ⅴ区の北側部分も二時期に変遷していることが明らかとなった。また、それより上は近現代に造成されていることが確認された。主郭の中央付近

の盛り上がっている部分は礎石の上に盛土をしていることが分かり、二時期に変遷していることが確認された。

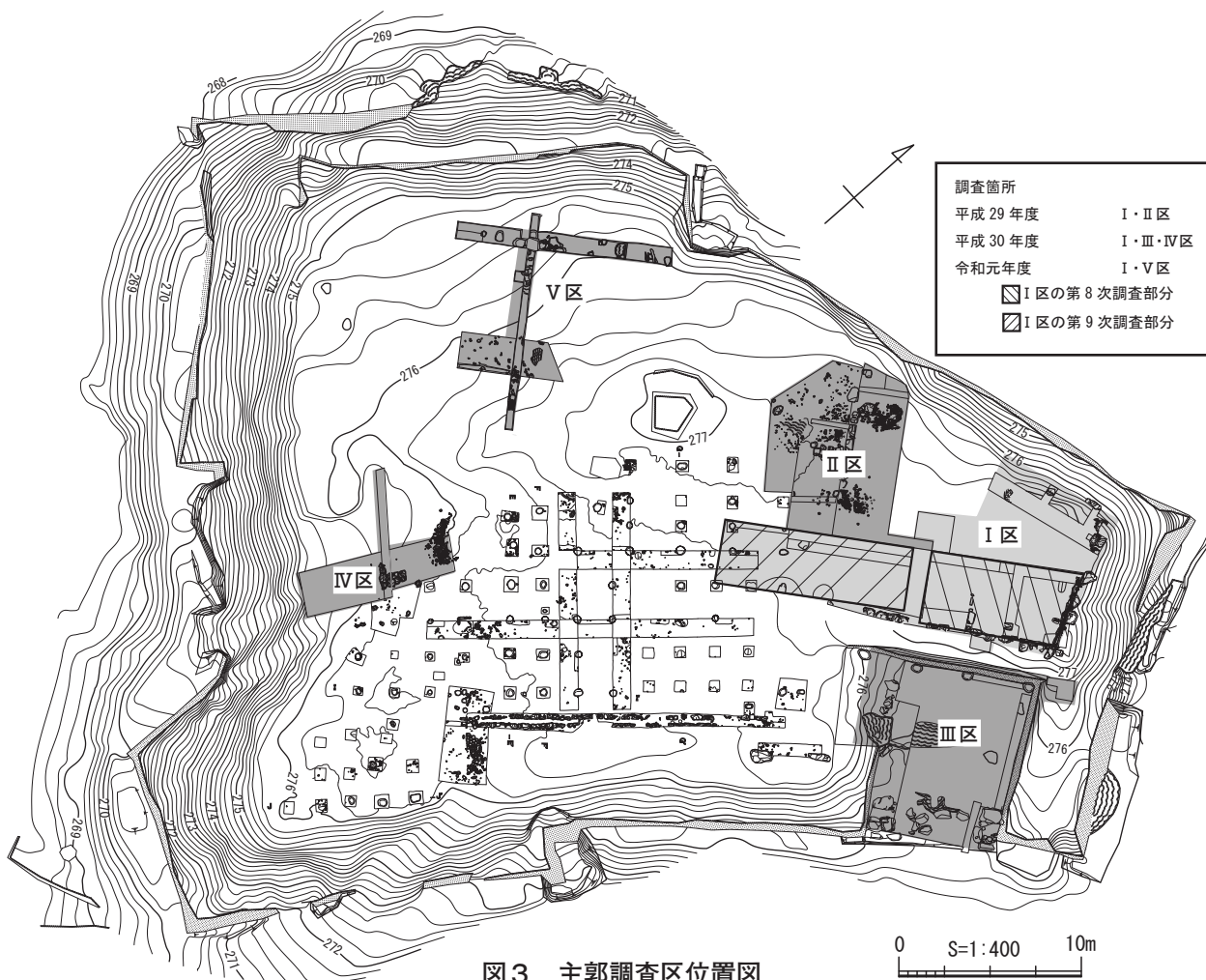
(6) 令和元年度（第9次調査）

第9次調査は、第8次調査のⅠ区部分で礎石が検出されなかったため、それより西側の御殿との間部分の調査を行った。Ⅴ区は礎敷が確認された部分の拡張を行った。

Ⅰ区西側部分では、川原石の礎石の下層からチャートの礎石が検出され、二時期に変遷していることが確認された。御殿までは礎石があり、天守想定部分には礎石及び柱穴がないことが再確認された。

Ⅴ区では、拡張を行ったが、礎敷は部分的であることが確認された。

（長江）



第2章 調査成果

第1節 I区 (図4～21)

I区全体を通して層序は大方共通しており、地山面からの堆積土の厚さは東で1.1m程度、西で50cm程度である。層序は近現代の遺物が混じる廃城後の造成土(2層)、旧表土(7層)、石垣及び整地面を覆い隠す礫層や造成土(13～16層)、整地面(21～25層)、整地面に伴う造成土(31層)、地山面(52層)という順である(図6)。地山面である52層上面には黒色の埋土を含む土坑(SK1)がみられる。なお、土坑(SK1)は保存のため、掘削を行っていない。また、8トレンチでは、地山を部分的に整地した50層に据えられた礎石(SB1)を検出した。

31層からは16世紀代の白磁皿や小坏(図19-8・12)、アカニシ貝が出土し、その上面の21層は石垣(SV1・SV2)を築く際の整地層と考えられる。この整地層に対応する層が8・9トレンチ(25層)やⅡ区(22～24層)においても確認され、第1次調査、第9次調査で検出された礎石建物(SB2)と同じタイミングで石垣が構築されたことが判明した。しかし、2・7トレンチでは21層に相当する層が確認されておらず(図5・15・16)、SV1・SV2の隅などでは31層のみで整地を行っている(図7・10)。これら整地面は城機能時以降の改変が入っている様子もみられないことから石垣構築において高さを一定に揃えるという意識はなかったようであり、整地層は最大で25cmの高低差がある。

1・2トレンチでは、石垣(SV1・SV2)を築く際の整地面から天守相当の建物に伴うと考えられる礎石ないし柱穴が検出されることが想定されたが、性格不明なSK2・SK3が検出されたのみであった。ただ、21層より上の層から瓦の小破片が複数出土するほか、整地層直上では瓦の小破片が点在して出土している。出土状況に規則性は見られないが、前述の状況を踏まえると、整地面にあった建物を破却する際に瓦の選別があり、小破片を廃棄したことを示唆している。また、主郭の礎石建物(SB2)の一部が検出された9トレンチでは、瀬戸美濃産陶器を中心に陶器や土器が多く出土したが、瓦は87点と少なく、逆に1・2トレンチでは瓦が1537点出土し、遺物の多くを占めた。現時点では、建物の規模など不確定な部分があるが、1・2トレンチ付近において石垣構築時の整地面の上に瓦葺の何らかの建物があったとみて間違いないだろう。

整地面の上には造成土(13・14層)がみられ、その上には礫層(12層)がみられる。ただ、造成土は1・2トレンチの調査範囲では、東西5.5m、南北は北側を未調査ではあるが2.2m以上の範囲に半球状に広がるように堆積し、石垣(SV1・SV2)隅にまで及んでいない。また、礫層も1トレンチを中心にみられ、2トレンチでは一部で確認されるのみである(図5)。あくまで部分的な堆積となるものの、造成土(14層)は強くしまった土が用いられ、礫層は石垣(SV1・SV2)を覆い隠すように堆積している。この造成土からは片側の面が良く焼けた炉壁片^(註1)が出土している。これらは城機能時のいずれかの段階で、I区付近に造成が加えられているとみることができよう。ただ、この礫層上面は後世の建物が建てられたことにより改変を受けている。礫層上面に遺構があった可能性もあるが、礫層に伴う遺物は大窯第4段階を上限とする瀬戸美濃産陶器(図19-1～4)や当該期の瓦であり、近世以降の遺物が見られないことから城機能時に埋めている可能性が高い。

こうしたトレンチの堆積状況により、地山を中心とした面、石垣を築いた整地面、石垣を埋めた礫層上面と三つの時期のあったことが明らかとなった。

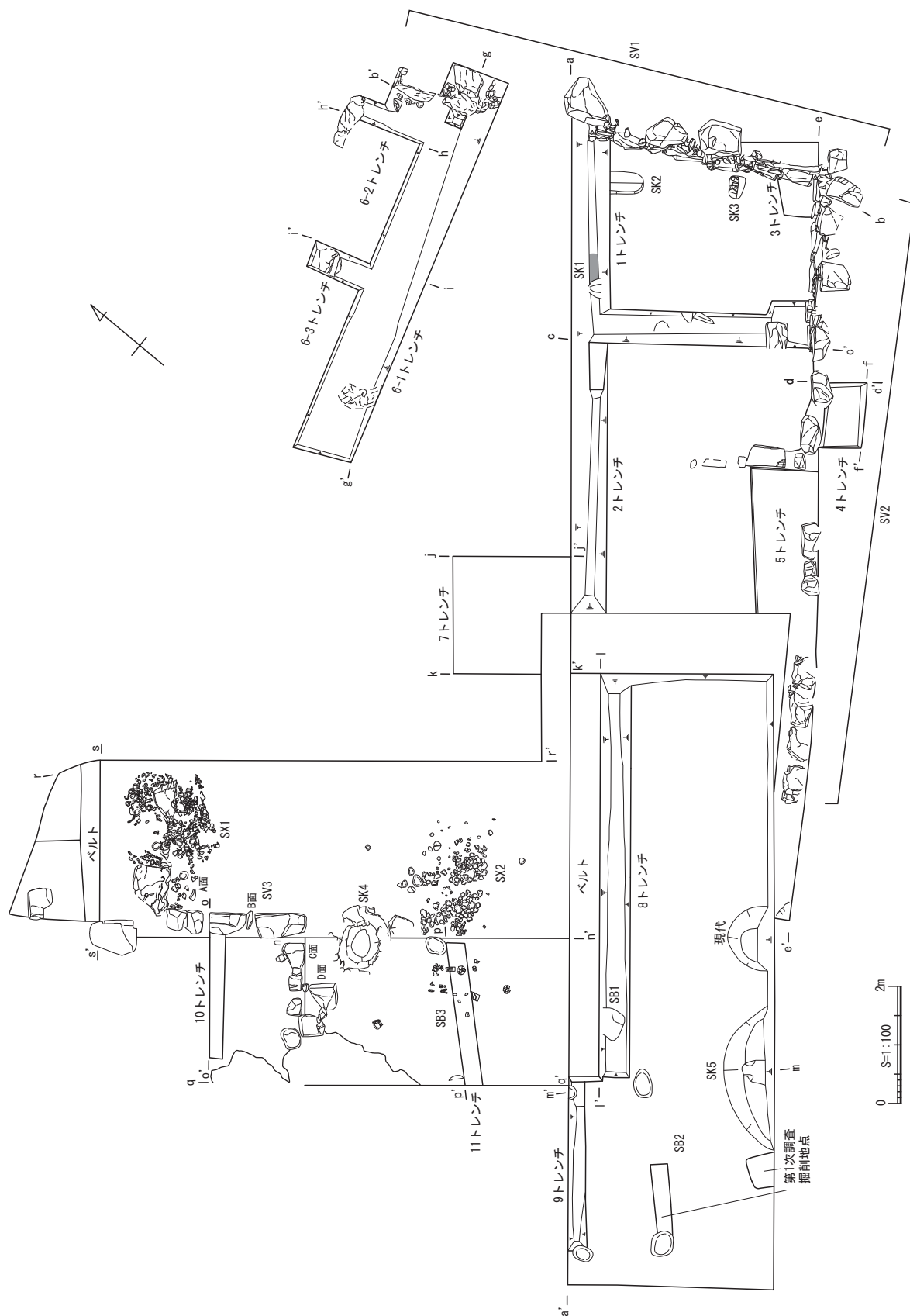
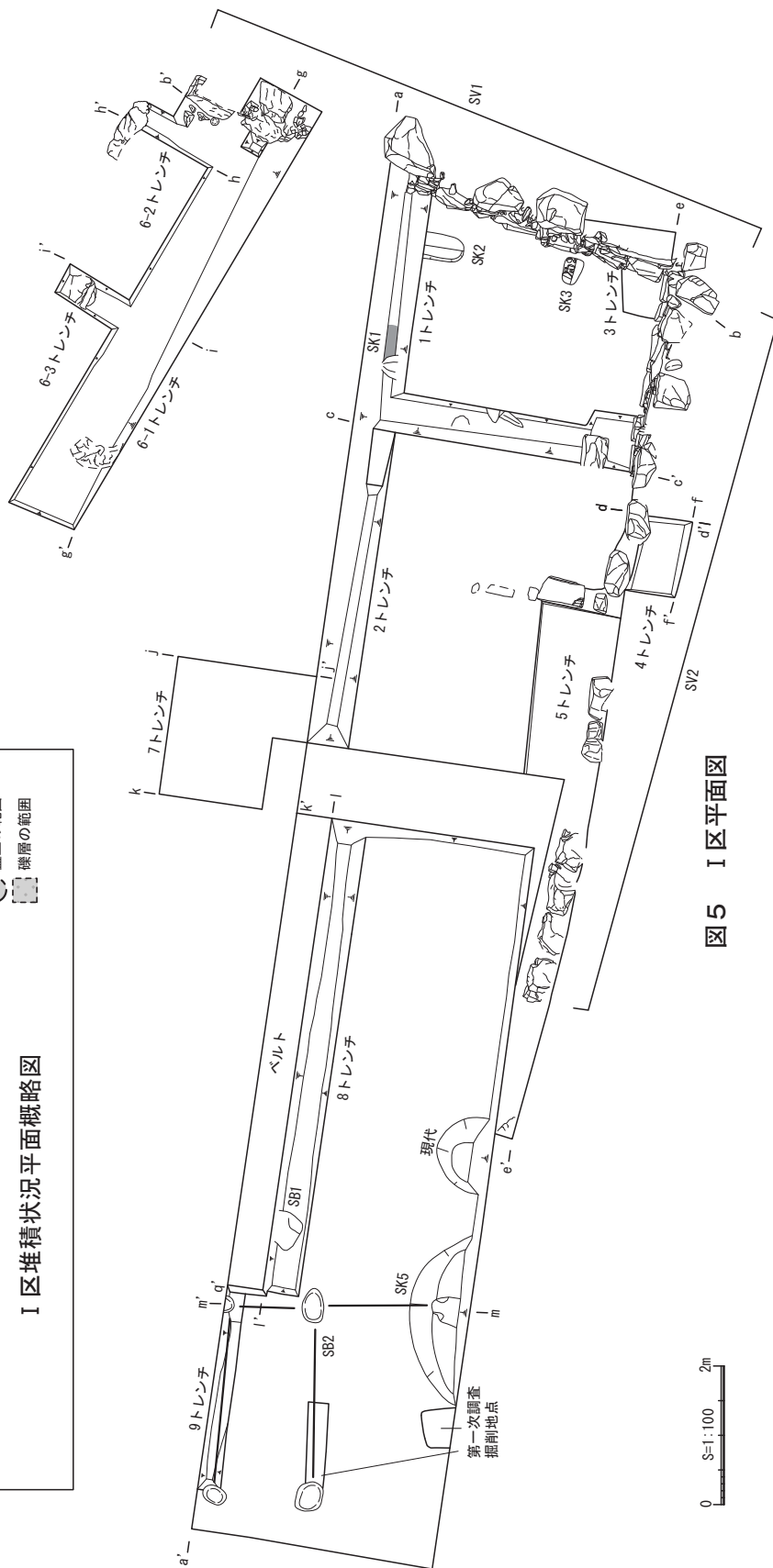
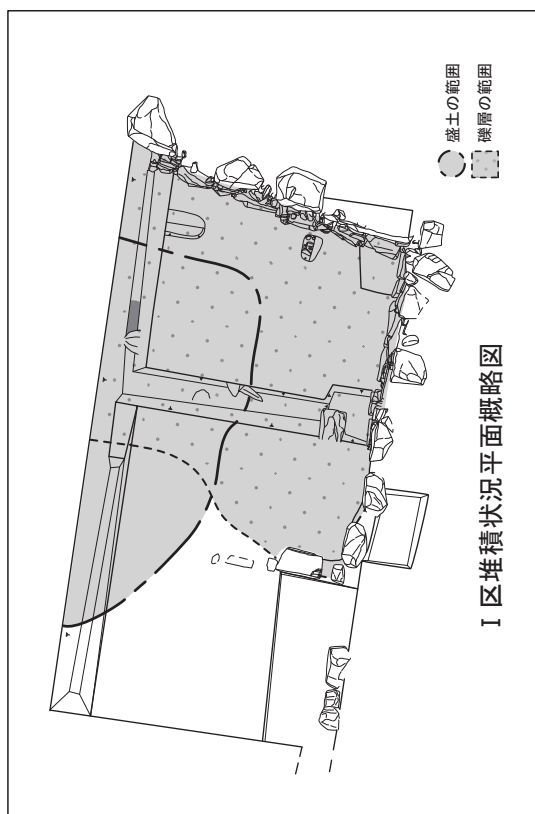


図4 I・II区平面図



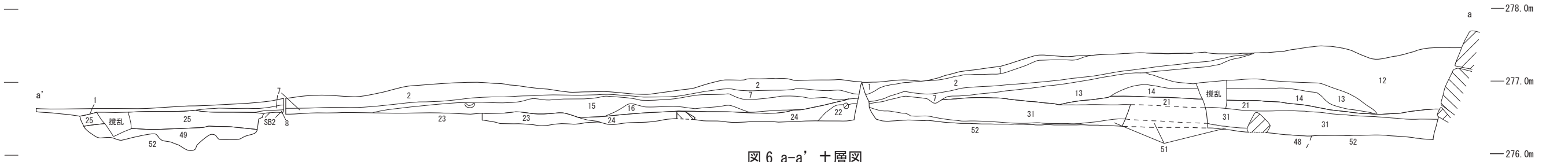


図 6 a-a' 土層図

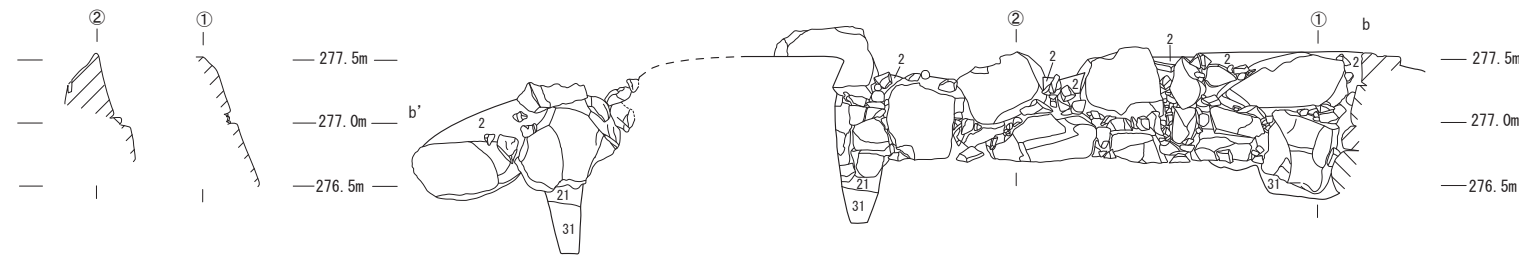


図 7 SV1 立面図及び b-b' 土層図

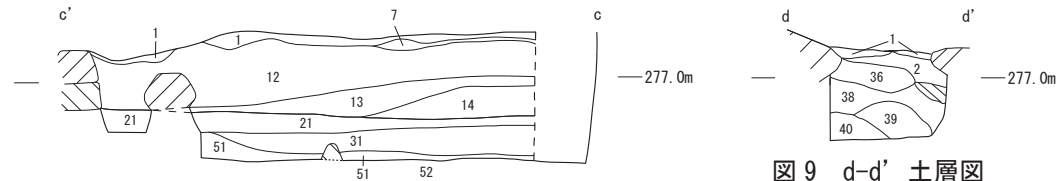


図 8 c-c' 土層図

図 9 d-d' 土層図

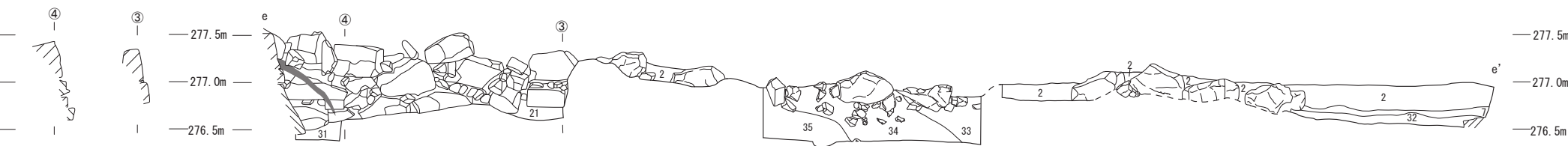


図 10 SV2 立面図及び e-e' 土層図

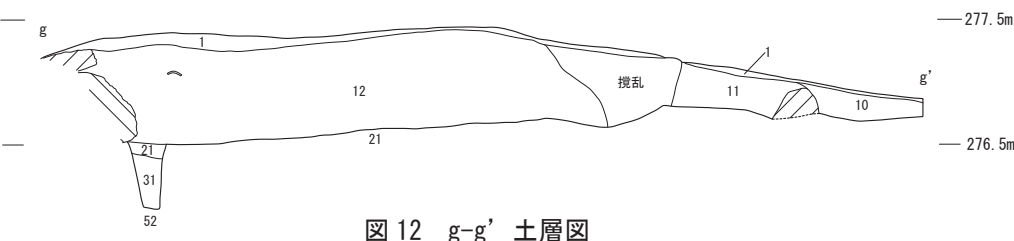


図 12 g-g' 土層図

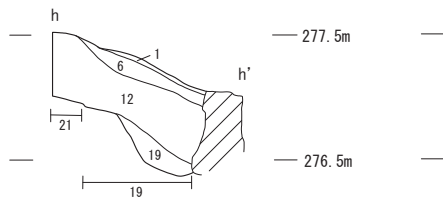


図 13 h-h' 土層図

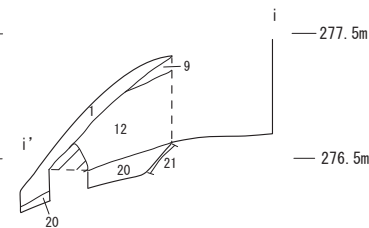


図 14 i-i' 土層図

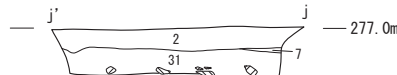


図 15 j-j' 土層図

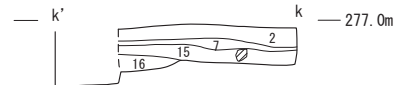


図 16 k-k' 土層図

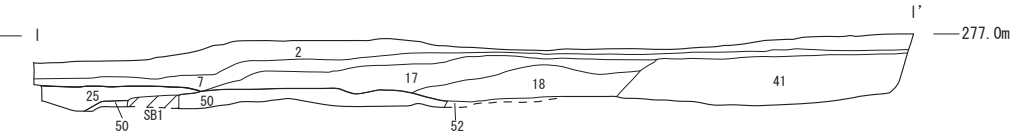


図 17 l-l' 土層図



図 18 m-m' 土層図



※調査の経緯から便宜的にⅠ・Ⅱ区と調査区を分けているが、
大方の層序は共通する。Ⅰ・Ⅱ区に共通する層は、同じ層序
番号をつけ、土層図に該当する層序の注記を記載する。

- | | | |
|------------------------------|---------|--------------------------|
| 1 腐葉土 | しまり弱い | 粘性弱い〔表土〕 |
| 2 にぶい黄橙色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔後世の造成土〕 |
| 6 明黄褐色土 | しまりやや強い | 粘性やや強い〔礫含む流土〕 |
| 7 褐灰色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔旧表土〕 |
| 8 灰白色土 | しまりやや弱い | 粘性弱い〔礫含む堆積土〕 |
| 10 明黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔堆積土〕 |
| 11 明赤褐色土 | しまりやや弱い | 粘性やや弱い〔石垣埋土が破城の際に形成された層〕 |
| 12 礫層〔φ20～150mmの礫を多く含む。石垣埋土〕 | | |
| 13 明黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔礫を多く含む整地面埋土〕 |
| 14 黄橙色土 | しまり強い | 粘性強い〔白色ブロック土混じる整地面埋土〕 |
| 15 黄褐色土 | しまり強い | 粘性強い〔整地面埋土〕 |
| 16 黄褐色土 | しまりやや強い | 粘性やや強い〔整地面埋土〕 |

- | | | |
|------------|---------|------------------------------|
| 17 黄橙色土 | しまり弱い | 粘性強い〔白色ブロック土混じり、瓦が出土する整地面埋土〕 |
| 18 橙色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔整地面埋土〕 |
| 19 橙色土 | しまりやや弱い | 粘性やや強い〔堆積土〕 |
| 20 にぶい褐色土 | しまりやや弱い | 粘性やや強い〔堆積土〕 |
| 21 灰白色粘質土 | しまり強い | 粘性強い〔赤褐色土混じる石垣構築時の整地土〕 |
| 22 赤褐色粘質土 | しまり強い | 粘性強い〔上面遺構構築時の整地土〕 |
| 23 にぶい黄褐色土 | しまり強い | 粘性強い〔上面遺構構築時の整地土〕 |
| 24 暗褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔上面遺構構築時の整地土〕 |
| 25 明褐色土 | しまり強い | 粘性強い〔黄褐色ブロック土混じる上面遺構構築時の整地土〕 |
| 31 暗赤褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔礫を含む石垣構築時の造成土〕 |
| 32 褐色土 | しまりやや弱い | 粘性やや強い〔石垣構築時の造成土〕 |
| 33 明褐色土 | しまりやや弱い | 粘性弱い〔石垣構築時の造成土〕 |

- | | | |
|------------|---------|-----------------------------|
| 34 橙色土 | しまりやや弱い | 粘性弱い〔石垣構築時の造成土〕 |
| 35 明黄褐色土 | しまりやや弱い | 粘性弱い〔石垣構築時の造成土〕 |
| 36 明褐色土 | しまり強い | 粘性弱い〔SV2の裏込土〕 |
| 37 暗褐色土 | しまり弱い | 粘性やや弱い〔根攪乱を受けるSV2の裏込土〕 |
| 38 にぶい赤褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔SV2の裏込土〕 |
| 39 明褐色土 | しまりやや強い | 粘性強い〔SV2の裏込土〕 |
| 40 にぶい赤褐色土 | しまりやや弱い | 粘性弱い〔SV2の裏込土〕 |
| 41 明褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔礫を多く含む石垣構築時の造成土〕 |
| 48 黒色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔SK1埋土〕 |
| 49 暗黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い〔部分的に炭化物混じる下面遺構構築地の整地土〕 |
| 50 橙色土 | しまり強い | 粘性弱い〔下面遺構構築時の整地土〕 |
| 51 赤褐色粘質土 | しまり強い | 粘性強い〔地山風化層〕 |
| 52 地山 | | |

SV1 (図5・7)

SV1は南端でSV2に接続し、北側は6-1・2トレンチにおいてSV1の続きを検出している。6-2トレンチで検出されたSV1の築石付近で、石垣(SV1・SV2)を築く際の整地層の端が確認され、この築石がSV1の北端を示している可能性が高い。6-2トレンチ(図13)にみられる石垣を埋めた層(12層)、それより北側にみられる石材は整地層(21層)よりずれて、原位置を保っていないが、北面の内向き石垣を構成した石材の可能性はある。6-3トレンチにおいても12層はみられるため、北面に内向き石垣があった場合にはこの辺りまで埋められている可能性があるが、これより西側では堆積層が薄く、12層の確認はできない。

SV1の残存している全長は約7.5mである。北側は部分的に根固めを入れた整地層(21層)の上に、南側は31層上に築かれる。曲輪の内側に面を持ち、主郭北東面の石垣(SV8)に対応する。1～4段の石材が残存し、北側から南側に向かって底石のレベルが若干上がっているものの、276.5mを底石の基準としているように見受けられる。残存高は最高で約1.0mである。石材はチャートと凝灰質砂岩、変成岩が用いられている。石材は自然石ないし粗割石で幅20cm～1.0mと大きさは不規則であるが、石材は比較的横長に用いられ、控えは短い。前面は平滑面を向けて据えられ、築石の隙間が空かないように間詰石が密に詰められている。

SV2 (図5・10)

SV2は、SV1から続く東西約15.0mを測る石垣である。曲輪の内側に面を持ち、主郭の南東面虎口石垣(SV4)と対応する。また、SV1とSV2の交点の状況から、石垣の構築順序はSV2を構築した後にSV1を築いている。

東側では4段が残るが西側では1～2段程度しか残存しておらず、西にいくにつれて底石のレベルが上がっていく状況である。東側は31層上に築かれているが、西側では整地層がみられず、33～35層のように斜めに堆積し、しまりがあまり強くない土の上に築かれている。石材はチャートと凝灰質砂岩、変成岩が用いられているものの、SV1よりやや小ぶりである。背面を断ち割った4トレンチでは、10～20cm大の裏込石が土の層と交互に造成されていることが確認できた(図9・10)。

SB1 (図5・17)

地山を部分的に整地した50層に据えられた礎石である。SB1は幅55cmの角礫で、8トレンチ内で他に対応する礎石はみられない。また、SB1の標高が約276.5mと主郭平坦面で露頭している他の礎石よりも低く、後述するSB2を据えた整地層(25層)によって埋められている。なお、SB1を据えた整地層である50層中から大窯第2～3段階の鉄釉丸皿(図19-33)が出土していることに鑑みると、SB1は地山面を中心に使用していた時期の遺構と想定される。

第1次調査のCトレンチでは、主郭で露頭している礎石の約20cm下から川原石の礎石が確認されているため、主郭において建物の建て替えが行なわれたと想定されている。このCトレンチの下の礎石とSB1が対応する可能性も考えられる。角礫を用いた礎石は、過去調査において枡形虎口内や東VI(左近屋敷)などでも確認されている。

SB2 (図5・6・18)

SB1を埋めている整地層(25層)に据えられた礎石を5つ検出した。そのうち2つは、第1次調査において既に確認されている礎石である。礎石は直径約30cmの川原石であり、それぞれ

東西、南北方向に並び、標高が約276.6m とほぼ一定である。礎石の間隔は東西方向に2.8m (9尺3寸)、南北方向に北から1.4m (4尺6寸)、1.3m (4尺3寸) となり、第1次調査で検出された建物跡の礎石列と寸法が近似している。礎石を据えた整地層(25層)からは大窯第4段階前半の天目茶碗が出土していることもあり(図20-44)、SB2は第1次調査で検出された御殿と想定される礎石建物の一部と捉えるのが妥当であろう。

なお、9トレンチ南側で検出された礎石は主郭虎口側へ傾いて検出されている(図18)。古代の宮都関連遺跡や寺院の例によれば、寺院地を畑地などに再利用する際、開墾の邪魔にならないように礎石周りの整地土の一部を掘削して横にずらすといった行為が行われる場合があるという。傾いた礎石は前述に挙げた行為が基で生じたと考えられ、奈良県奈良市平城京跡(奈良国立文化財研究所1991)や滋賀県大津市穴太廃寺(滋賀県教育委員会2001)などにおいても検出されている。美濃金山城において同様の行為が行われたかどうかは定かではないが、検出状況をみると軸線がずれてしまうほど礎石が移動したような形跡は見受けられない。廃城時ないし廃城後の多少の移動は考慮しなければならないものの、現段階では城機能時の礎石の1つとして捉えても良いのではないだろうか。

遺物(図19～21)

I 区の調査では土器・陶器と瓦を合計して2178点の遺物が出土している。遺物は遺構面埋土や後世の造成土からの出土が大半であったが、今回は遺物の残存状況と出土位置などを重視し、62点を図化掲載した。

土器・陶器は280点出土している。1は大窯第2段階の灰釉丸皿、2は大窯第1段階の播鉢、3は大窯第4段階の鉄釉大皿で、高台の内外面にトチンの痕が残る。5は常滑の甕と考えられるが、底部のみの残存であり断言できない。6は青花の皿で、高台畳付部分の釉はカキ落とされ、内面見込みに二重の界線、高台内面に花文があしらわれる。8は白磁皿で、口縁端部内面の釉が一部カキとられる。10は大窯第4段階の錆釉の桶で、体部に刻み目が施される。12は白磁の小坏であり、16世紀代の所産と考えられる。15は大窯第3段階の灰釉皿類であり、高台は削り込み高台で、高台内面に釉溜まりがみられる。16は古瀬戸段階の灰釉四耳壺と考えられ、耳の貼り付け部分のみ残存している。17・18はロクロ成形のかわらけで、口縁部の内外面にタール痕が残る。19～21は非ロクロ成形のかわらけで、井川分類のC2類に相当する。25は大窯第1段階の緑釉小皿で、内面は全面、外面は口縁部に鉄釉が施釉される。28は大窯第4段階後半の瀬戸黒茶碗であり、外面に火ばさみの痕がみられる。30・31は白磁皿で、共に16世紀代の所産である。なお、31の高台は貼り付け高台である。32は大窯第4段階前半の建水または水指と考えられ、発色は不良だが黄瀬戸であろうと思われる。34は井川分類C類の非ロクロ成形のかわらけで、内面に強いナデの痕がみられる。36は土鈴である。昭和40年代の過去採集遺物の中に、同様の製品が存在する。38・39は播鉢である。それぞれの復元口径を出すと37.8、43.4cm となり、一般的な瀬戸美濃産播鉢と比較しても大型の製品となると考えられる。40はロクロ成形のかわらけ、41は井川分類B2類の非ロクロ成形のかわらけである。42は生田2号窯式期の灰釉系陶器であり、15世紀後葉頃の所産である。43は丸碗と考えられるが、焼成不良で全体的に赤褐色を呈している。45は井川分類B2類の非ロクロ成形のかわらけであるが、内外面全体にユビオサエの痕が残る。

瓦は1897点出土し、軒丸瓦10点、軒平瓦4点、丸瓦200点、平瓦1578点、輪違い瓦1点、飾瓦2点、不明102点である。なお、全て破片での出土であり、完形品は出土していない。

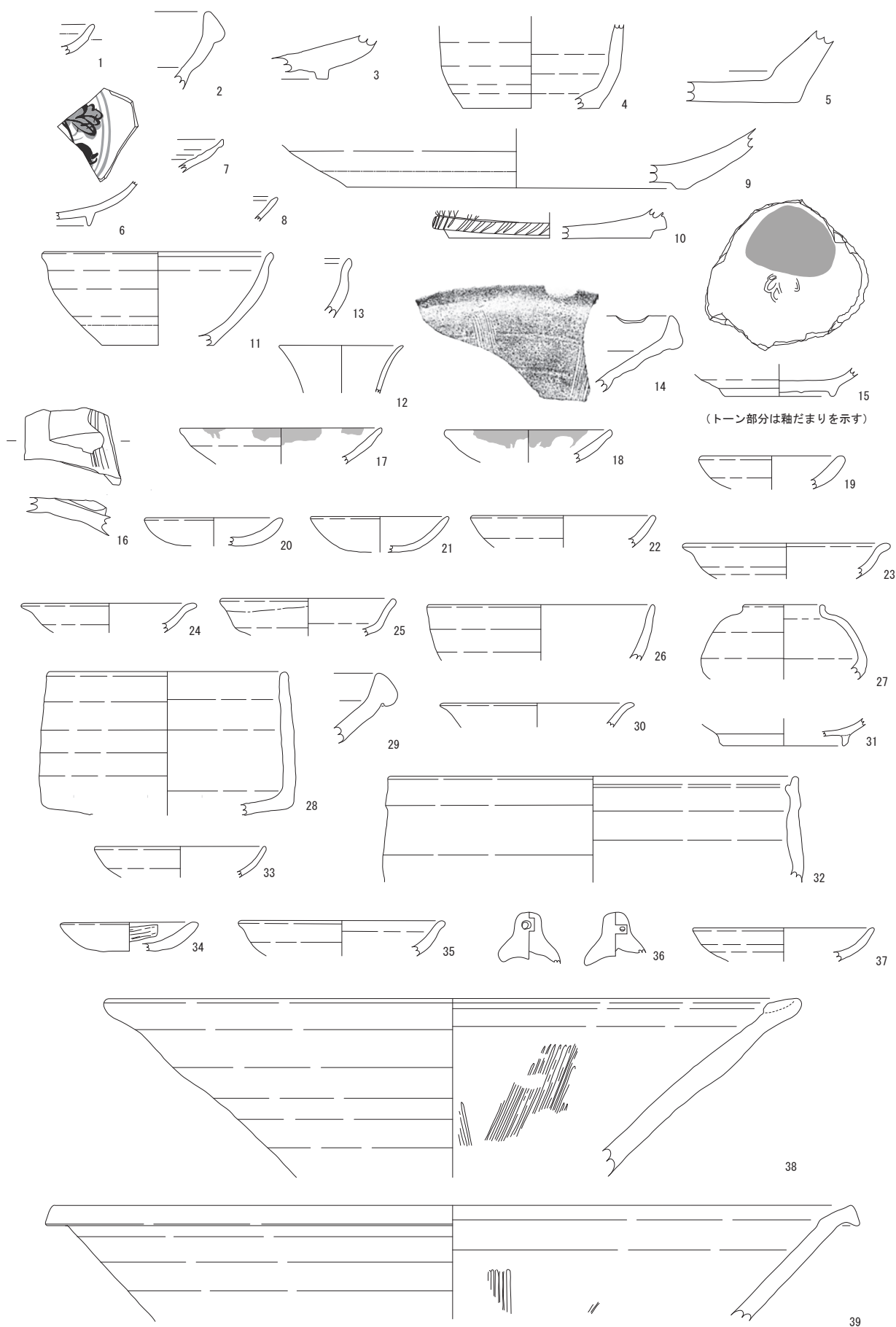


図19 I区出土遺物1

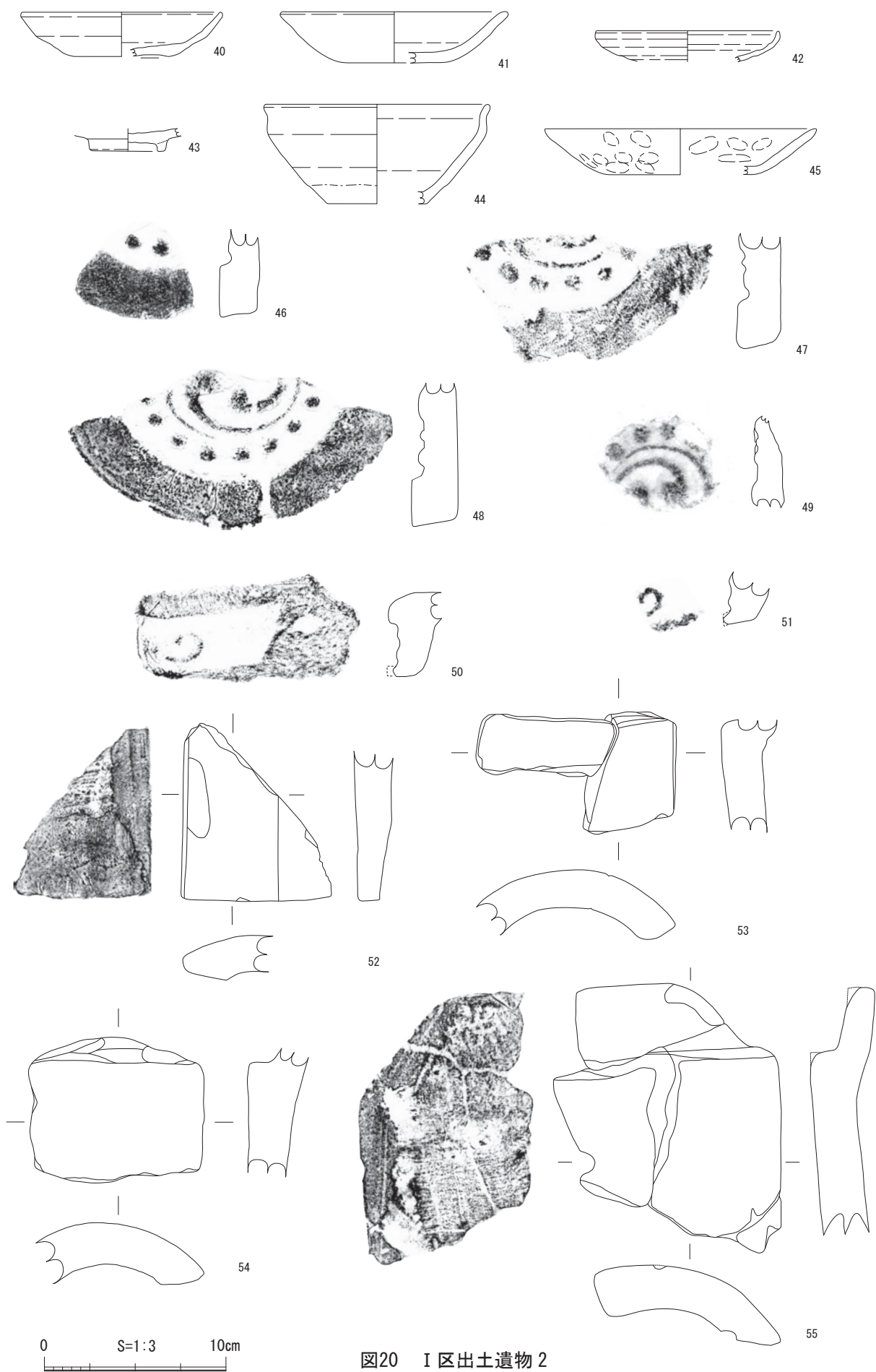


图20 I 区出土遗物 2

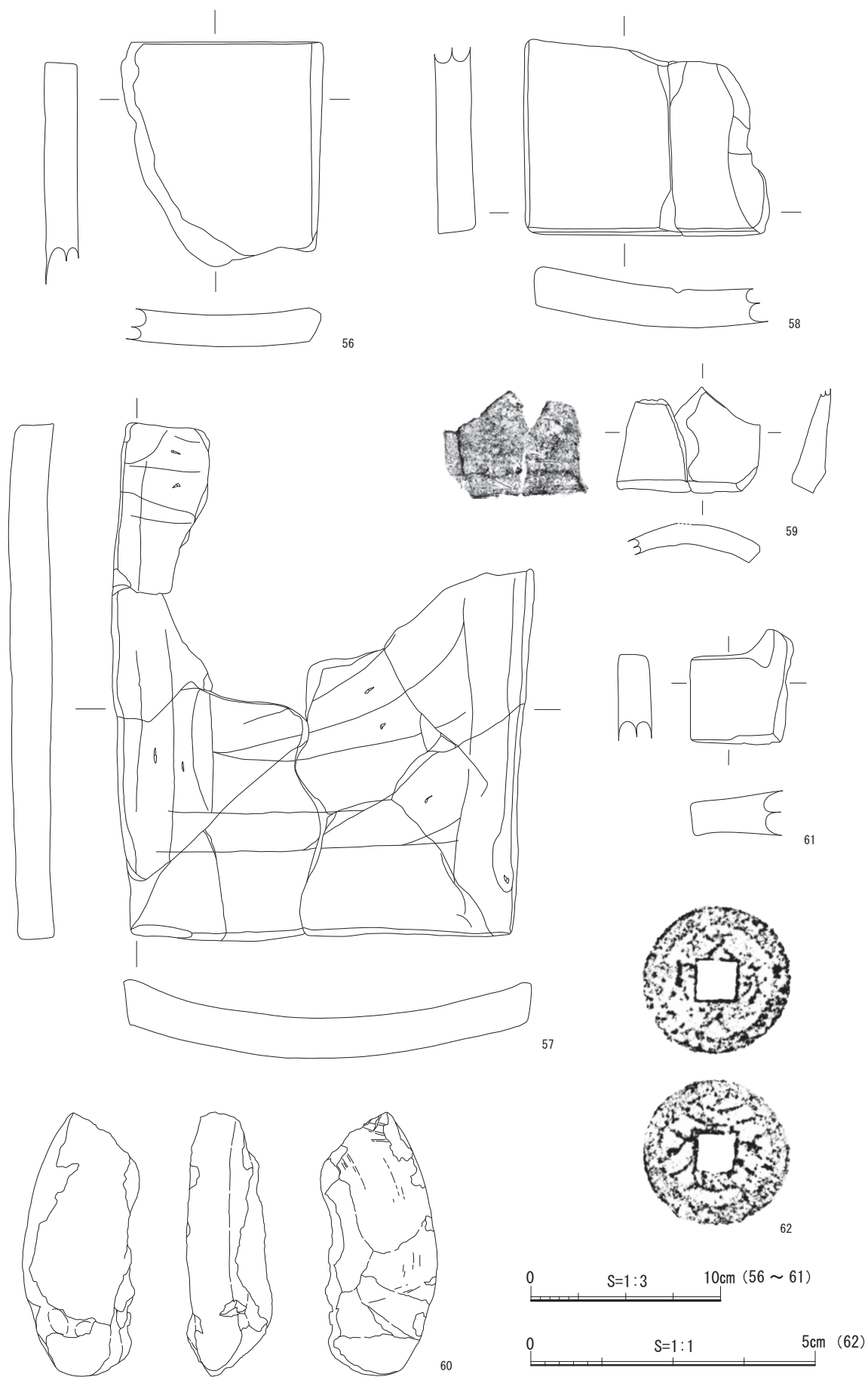


图21 I 区出土遗物 3

46～49は軒丸瓦である。47～49は全て巴が左巻きである。また、いずれも瓦当表面の周縁部をヘラケズリ、瓦当裏面の周縁に沿った部分をナデで調整している。50・51は軒平瓦である。いずれも中心飾りは不明であるが、2反転唐草文と思われる。52～55は丸瓦である。丸瓦はいずれもコビキ B であると考えられ、55はツリヒモ痕が残存している。56～58は平瓦である。いずれも凹面をナデで調整しており、コビキ痕が残っていない。また、側面はヘラケズリで調整されている。59は輪違い瓦である。第6～9次調査のうち、輪違い瓦だと考えられるものはこの1点のみである。凹面側の端部と側面が面取りされている。60は飾瓦であると考えられるが、器種は不明である。全体的に剥離している部分が多いが、裏面はヘラケズリで調整されている。62は銭貨で、幕末に鑄造された「文久永宝」である。

(柴田)

(註1) 炉壁は I 区の14層以外にも平成18年度に行った御殿部分の調査からも1点が出土している。2点ともに本来は建物があった場所で出土している。大道和人氏のご教授によると、出土位置で炉が営まれた場合には多くの炉壁片が出土するはずであるため、このように離れた位置で1点ずつ出ることからも出土位置とは異なる位置で炉が営まれた可能性がある。その他、主郭では V 区で被熱遺構が確認されたほか、三の丸では羽口が出ていることから城内で鑄造等が行われている可能性があるが、炉壁を伴う遺構は確認されていない。

図版	種別	器種	出土位置	口径	器高	底・高台径	その他	釉薬	時期・分類	備考
1	瀬戸美濃	丸皿	1T12層	—	(1.6)	—		灰釉	大2	
2	瀬戸美濃	播鉢	1T12層	—	(4.1)	—		錆釉	大1	
3	瀬戸美濃	大皿	1T12層	—	(2.1)	—		鉄釉	大4	底部外面・見込みにトチン痕
4	瀬戸美濃	徳利	1T12層	—	(4.5)	(7.4)		灰釉	大4	
5	常滑	甕か	1T12層	—	(3.9)	—				
6	青花	皿	1T12層	—	(2.3)	—		透明釉	16C	釉のカキオトシ、見込みに二重の界線と花文
7	瀬戸美濃	灯明皿	1T13層	—	(1.9)	—			大2後	
8	白磁	皿	1T31層	—	(1.3)	—		白磁釉	16C	口縁内面端部の釉がカキとられる
9	瀬戸美濃	大皿	2T2層	—	(3.1)	(18.6)		錆釉	大4	削り込み高台
10	瀬戸美濃	桶	2T2層	—	(1.4)	11.0		錆釉	大4	
11	瀬戸美濃	天目茶碗	2T7層	(12.5)	(5.1)	—		鉄釉	大3後	
12	白磁	小坏	2T31層	(6.8)	(2.6)	—		白磁釉	16C	
13	瀬戸美濃	天目茶碗	7T7層	—	(3.2)	—		鉄釉	大3	
14	瀬戸美濃	播鉢	7T2層	—	(4.1)	—		錆釉	大2	櫛目は1単位13本
15	瀬戸美濃	皿	7T2層	—	(1.7)	5.9		灰釉	大3	削り出し高台、見込みに釉だまり
16	瀬戸美濃	四耳壺?	7T31層	—	—	—		灰釉	古瀬戸	耳の貼り付け部分のみ残存
17	土師器	かわらけ	8・9T2層	(10.9)	(1.8)	—				ロクロ成形、口縁部にタール付着
18	土師器	かわらけ	8・9T2層	(8.9)	(1.6)	—				ロクロ成形、口縁部にタール付着
19	土師器	かわらけ	8・9T2層	(7.5)	(1.7)	—			C2類	非ロクロ成形
20	土師器	かわらけ	8・9T2層	(7.5)	(1.6)	—			C2類	非ロクロ成形
21	土師器	かわらけ	8・9T2層	(7.4)	(1.9)	—			C2類	非ロクロ成形
22	瀬戸美濃	丸皿	8・9T2層	(9.9)	(1.8)	—		灰釉	大2か3	
23	瀬戸美濃	端反皿	8・9T2層	(10.8)	(2.0)	—		灰釉	大2前	
24	瀬戸美濃	端反皿	8・9T2層	(9.3)	(1.5)	—		灰釉	大2前	
25	瀬戸美濃	縁釉小皿	8・9T2層	(9.3)	(2.0)	—		鉄釉	大1	内面は全面、外面は口縁部に施釉
26	瀬戸美濃	丸碗	8・9T2層	(12.2)	(3.1)	—		鉄釉	大3	
27	瀬戸美濃	茶入	8・9T2層	(4.2)	(4.1)	—		鉄釉	大4か	胴部径 (9.0)、底部付近は露胎
28	瀬戸美濃	瀬戸黒茶碗	8・9T2層	(12.8)	(7.8)	—		鉄釉	大4後	外面に火ばさみの痕あり
29	瀬戸美濃	播鉢	8・9T2層	—	(3.8)	—		錆釉	大1?	
30	白磁	皿	8・9T2層	(10.1)	(1.3)	—		白磁釉	16C	貼り付け高台
31	白磁	皿	8・9T2層	—	(1.5)	(6.6)		白磁釉	16C	
32	瀬戸美濃	水指、建水	8・9T17層	(22.1)	(5.8)	—		灰釉	大4前	発色不良だが、黄瀬戸か
33	瀬戸美濃	丸皿	8T50層	(9.2)	(1.7)	—		鉄釉	大2か3	
34	土師器	かわらけ	9T1層	(7.3)	(1.6)	—			C 類	非ロクロ成形
35	瀬戸美濃	端反皿	9T1層	(10.9)	(1.9)	—		鉄釉	大3後	
36	土製品	土鈴	9T1層	(3.4) × (2.9)						
37	瀬戸美濃	丸皿	9T7層	(9.7)	(1.8)	—		灰釉	大4前	
38	瀬戸美濃	播鉢	9T 攪乱	(37.6)	(9.7)	—		錆釉	大2後	櫛目は1単位15本
39	瀬戸美濃	播鉢	9T1層	(43.4)	(6.3)	—		錆釉	不明	櫛目は1単位6本以上
40	土師器	かわらけ	9T25層	(11.1)	2.5	(5.4)				ロクロ成形。二次被熱により黒く焼ける
41	土師器	かわらけ	9T25層	(12.4)	2.8	(5.8)			B2類	非ロクロ成形
42	灰釉系陶器	碗	9T25層	(10.0)	(1.7)	—			生田2	
43	瀬戸美濃	丸碗	9T25層	—	(1.2)	(3.7)			大3後	高台のみ、焼成不良で赤褐色を呈す
44	瀬戸美濃	天目茶碗	9T25層	(12.2)	(5.5)	—		鉄釉・錆釉	大4前	
45	土師器	かわらけ	9T49層	(14.8)	2.5	(8.1)			B2類	非ロクロ成形

表 1 I 区遺物観察表 1

軒丸瓦

図版	種別	器種	出土位置	直径	文様区幅	内区径	外区径	珠数	珠径	周縁幅	周縁高	厚さ	備考
46	瓦	軒丸瓦	1T13層	—	—	—	—	(2)	0.9	2.8	0.6	2.8	
47	瓦	軒丸瓦	1T12層	(15.4)	(8.4)	(6.8)	(4.4)	(6)	0.8	2.8	0.8	2.8	
48	瓦	軒丸瓦	1T21層上面	(16.2)	(10.4)	(7.5)	(5.0)	(9)	1.1	2.6	0.7	2.6	
49	瓦	軒丸瓦	8・9T17層	—	—	—	—	(4)	0.6	—	—	(1.9)	

軒平瓦

図版	種別	器種	出土位置	弧深	文様区幅 (縦)	外区幅 (上)	外区幅 (下)	脇区幅	周縁高	顎下幅	顎上幅	顎高	備考
50	瓦	軒平瓦	1T12層	—	2.6	0.8	0.5	2.0	0.4	1.5	2.6	2.8	
51	瓦	軒平瓦	1T13層	—	(2.3)	—	(0.7)	—	(0.4)	(2.1)	—	(2.9)	

丸瓦

図版	種別	器種	出土位置	コビキ	筒部長	玉縁長	筒部幅	高さ	備考
52	瓦	丸瓦	1T13層	B	(9.6)	—	(8.2)	—	
53	瓦	丸瓦	1T13層	B	(6.2)	—	(10.9)	—	
54	瓦	丸瓦	1T13層	B	(6.5)	(1.3)	(9.7)	—	
55	瓦	丸瓦	1T12層	B	(10.5)	(3.6)	(12.4)		ツリヒモ痕

平瓦

図版	種別	器種	出土位置	コビキ	長さ	幅	厚さ	谷深	備考
56	瓦	平瓦	1T13層	—	(11.8)	(10.6)	1.7	—	
57	瓦	平瓦	2T7層	—	27.1	21.6	2.1	2.1	
58	瓦	平瓦	2T13層	—	(10.3)	(12.8)	2.1	—	

輪違い瓦

図版	種別	器種	出土位置	コビキ	筒部長	筒部幅	高さ	備考
59	瓦	輪違	1T13層	—	(5.3)	(7.1)	—	

飾瓦

図版	種別	器種	出土位置	幅	厚み	高さ	備考
60	瓦	飾瓦	9T 攪乱	(5.7)	(4.3)	(13.9)	裏面はヘラケズリ調整

不明瓦

図版	種別	器種	出土位置	厚さ	備考
61	瓦	不明	1T13層	(1.7)	

銅製品

図版	種別	器種	出土位置	法量	備考
62	銅製品	銭貨	2T2層	直径2.6、厚さ0.1	文久永宝（19C 中頃）

表2 I 区遺物観察表2

第2節 II区 (図6・22～31)

II区は概ね平坦であり、現代の建物跡地から主郭中心部方面に向かうに従って緩やかに傾斜している。現地表面から遺構面までの堆積土の厚さは南側で40cm程度、北側で60cm程度であり、上から近現代の遺物を含む攪乱層、近現代段階の造成土(2～5層)、SB3、SV3、SK4が構築される際の整地層(22～24、26～30層)、SX1、SX2が構築される地山という層序である(図6-25～27)。

地山面上に築かれたSX2直上から大窯第3段階後半の天目茶碗が2点(図30-23・24)出土していることから、地山面を中心とした段階は大窯第3段階後半以前と想定することができる。SX2を5cm程度埋めた整地面(23・26・27・30層)上には、礎石が2個(SB3)検出され、直上で完形に近いかわらけ(図30-2～4)や瓦(図31-25・26)等が出土している。また、24層はI区で検出された石垣(SV1・SV2)を築く際の整地面(21層)の続きであると考えられ、II区の上面遺構とI区の石垣が同じタイミングで構築されたことが明らかとなった。

整地面(22～24層)の上には、造成土(15・16層)がみられ、上面遺構を覆い隠すように堆積している(図6)。15層中からは大窯第4段階を下限とした瀬戸美濃産陶器(図30-12～21)が出土しているため、城機能時のいずれかの段階で堆積したものと考えられる。断言することはできないが、I区の石垣埋土(13・14層)または礫層(12層)と同じ時期の可能性がある。

II区北側部分、SX1と主郭北面石垣の間にはチャートが主体となる礫層(62層)がみられ、礫の中からは貝類遺体が出土している(図28)。また、62層からは瓦やかかわらけが出土することから、城機能時のいずれかの段階で造成が行なわれている可能性が高い。後述するV区においても現地表面より約1.0m下の面で被熱遺構などが検出され、それを埋める形で大窯第4段階前半以降の時期に機能していたと想定される整地面が築かれている。II区北側部分もそれと同時期に造成された可能性も想定される。

II区で検出された上下の遺構面は、I区1・8・9トレンチの状況も踏まえると、上面がI区SV1・SV2や礎石建物が築かれる際の整地面(大窯第4段階以降)、下面はSV1・SV2が築かれる以前の地山を中心とした面(大窯第3段階後半以前)と位置付けるのが妥当であろう。

SX1 (図22)

直径10～20cmの川原石を中心に用いた敷石遺構である。南北約1.5m×東西約2.5mの範囲で緩斜面上に貼られ、部分的に80cm程度の比較的大型の石材がみられる。南側の敷石(SX2)に比べて川原石の割石が多く、積み重なるように広がっている。SX1に伴う遺物が出土していないため構築時期は不明であるが、土層の堆積状況をみると上下の遺構面を通して存続していた可能性が高い。

SX2 (図22)

直径10～20cm程度の川原石を用いた敷石遺構である。南北約2.0m×東西約2.0mの範囲で分布している。石材が集中している部分と点在している部分がみられ、西端では5つの川原石を直線的に並べている。北側の敷石遺構(SX1)に比べて割石は少なく、石同士の重なりも少なく平面的に広がっている。川原石直上でかわらけや大窯第3段階後半の天目茶碗が2点出土している(図30-23・24)。通路等の可能性が推測されるが、検出された範囲より広がっている状況はみられず、部分的である。

SB3 (図22・23・25)

Ⅱ区内において2個の礎石を検出した。この礎石はSX2より5cm程度岩盤に盛土をした整地面に据えられる(図23・25)。礎石は直径約30cmの川原石であり、東西方向に並び、標高が約276.7mでほぼ一定である。礎石の間隔は2.3m(7尺6寸)であり、この面には他の礎石が見られないため規模は不明ながら、Ⅰ区9トレンチで検出された礎石建物(SB2)との関連が推測される。なお、礎石が据えられている整地面直上でほぼ完形のかかわり3個体(図30-2~4)とかかわり片、瓦などが出土している。

遺物(図30・31)

Ⅱ区の調査では土器・陶器と瓦を合計して774点の遺物が出土している。遺物は遺構面埋土や後世の造成土からの出土が大半であったが、今回は遺物の残存状況と出土位置などを重視し、26点を図化掲載した。

土器・陶器・磁器は592点出土している。1~3はロクロ成形のかかわりで、いずれも底部に回転糸切痕が残る。1・2は高台部と体部の境目が明瞭なのに対して、3はやや不明瞭である。また、3はロクロ目をナデによってキレイに消しているのが特徴である。4は非ロクロ成形のかかわりであり、内面見込みに圈線が巡る。また、内面には京都産土師器皿に通有の調整である「2の字ナデ」を確認することができる。全体の形状からみても、京都産か京都産を忠実に模倣した製品と考えても良いだろう。4のようなかわりけは第6~9次調査全体でもこの1点しか出土していない。5・6は大窯第2段階、大窯第4段階前半の揃鉢である。また、7も揃鉢であると考えられるが、櫛目は確認することができない。8は黄瀬戸の鉦鉢である。見込み部分には線刻で葉が描かれ、過去採集されたものと接合することができる。9は匣鉢である。匣鉢は第1次調査においても出土し、窯場に近いという立地の影響も考えられる。10は16世紀後葉の漳州窯産の皿で、口縁部内面に界線、高台内面に捺花文様があしらわれる。11は備前産の徳利で、16世紀代の所産であると考えられる。12は大窯第4段階の建水である。16は大窯第3段階の灯明皿で、底部に回転糸切痕が見られる。21は大窯段階の祖母懷壺で、底部をヘラ起こししている。22は16世紀中葉以降の青花碗と考えられ、外面は無文、口縁部内面に2本の界線が施される。

瓦は182点出土し、軒丸瓦4点、軒平瓦1点、丸瓦21点、平瓦154点、道具瓦1点、不明1点である。なお、全て破片での出土であり、完形品は出土していない。また、瓦の出土状況であるが(表8)、上面遺構構築時の整地面(23層)直上ないし上の層から出土しているものや、整地面埋土(15・16層)、旧表土(7層)、後世の造成土(2層)、攪乱層からの出土がその大半を占める。Ⅰ区8・9トレンチ同様に瓦よりも土器や陶器の方が出土量が多い傾向にある。

25は平瓦である。凹面をナデで調整し、コビキ痕が残っていない。また、側面はヘラケズリで調整されている。26は道具瓦で、表面に1単位5本の刻み目が5つ残存している。その形態から、雨蓋瓦の可能性がある。

(柴田)

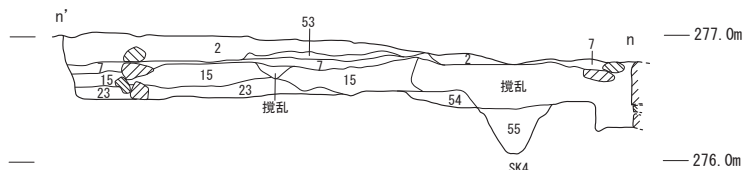


図 23 n-n' 土層図

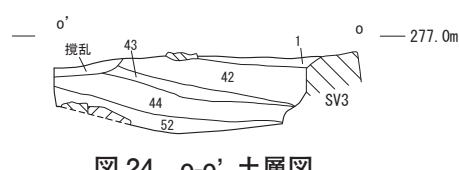


図 24 o-o' 土層図

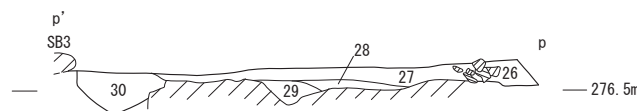


図 25 p-p' 土層図

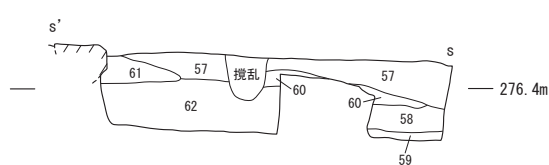


図 28 s-s' 土層図



図 26 q-q' 土層図

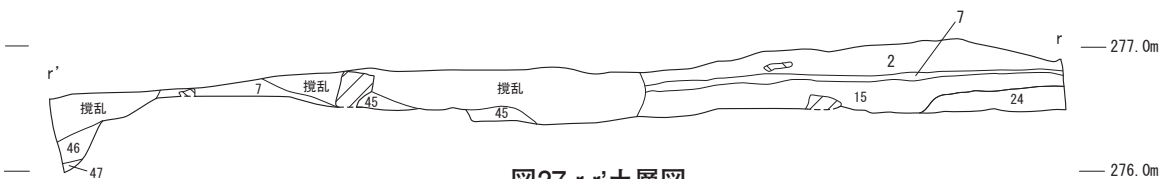


図 27 r-r' 土層図



図 29 SV3 立面図及び土層図

2	にぶい黄褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔後世の造成土〕	46	暗褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔平坦面拡張のための充填土〕
3	褐色土	しまりあり	粘性あり〔後世の造成土、現代の遺物を含む〕	47	暗褐色土	しまりやや弱い	粘性弱い〔平坦面拡張のための充填土〕
4	灰黄褐色土	しまりあり	粘性強い〔後世の造成土〕	52	地山		
5	にぶい黄褐色土	しまりあり	粘性強い〔後世の造成土〕	53	明黄褐色土	しまり強い	粘性あり〔礫を含む堆積土〕
7	褐灰色土	しまり弱い	粘性弱い〔旧表土〕	54	褐色土	しまり弱い	粘性やや弱い〔整地土〕
15	黄褐色土	しまり強い	粘性強い〔整地面埋土〕	55	暗褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔礫を含むSK2埋土〕
23	にぶい黄褐色土	しまり強い	粘性強い〔上面遺構構築時の整地土〕	56	黄褐色土	しまりあり	粘性弱い〔石垣の間に入れた充填土か。表込めとともに後世の土が混じった可能性あり〕
24	暗褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔上面遺構構築時の整地土〕	57	黒褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔現代遺物を含む攪乱〕
26	明黄褐色土	しまり強い	粘性弱い〔上面遺構構築時の整地土〕	58	暗褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔遺物を含む充填土〕
27	褐色土	しまり強い	粘性強い〔炭を含む上面遺構構築時の整地土〕	59	暗褐色礫層	しまり弱い	粘性強い〔φ5～80mmの礫を多く含むSK2の充填土〕
28	橙色土	しまり強い	粘性弱い〔上面遺構構築時の整地土〕	60	にぶい黄褐色土	しまりあり	粘性弱い〔礫の上の整地層か〕
29	黄褐色土	しまり強い	粘性強い〔上面遺構構築時の整地土〕	61	明褐色土	しまり強い	粘性強い〔φ5～100mmの礫を多く含む裏込土。57のカクラン層で削られている〕
30	黄褐色土	しまり強い	粘性強い〔上面遺構構築時の整地土〕	62	にぶい黄褐色礫層	しまり弱い	粘性弱い〔φ5～200mmの礫を多く含む平坦面拡張のための充填された礫層。瓦、かわらけ、貝が入る〕
42	明褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔SV3の裏込土〕				
43	黄褐色土	しまり強い	粘性弱い〔SV3の裏込土〕				
44	明褐色土	しまり弱い	粘性弱い〔上面遺構構築時の整地土〕				
45	明褐色土	しまり強い	粘性やや強い〔堆積土〕				

※調査の経緯から便宜的にⅠ・Ⅱ区と調査区を分けているが、大方の層序は共通する。Ⅰ・Ⅱ区に共通する層は、同じ層序番号をつけ、土層図に該当する層序の注記を記載する。

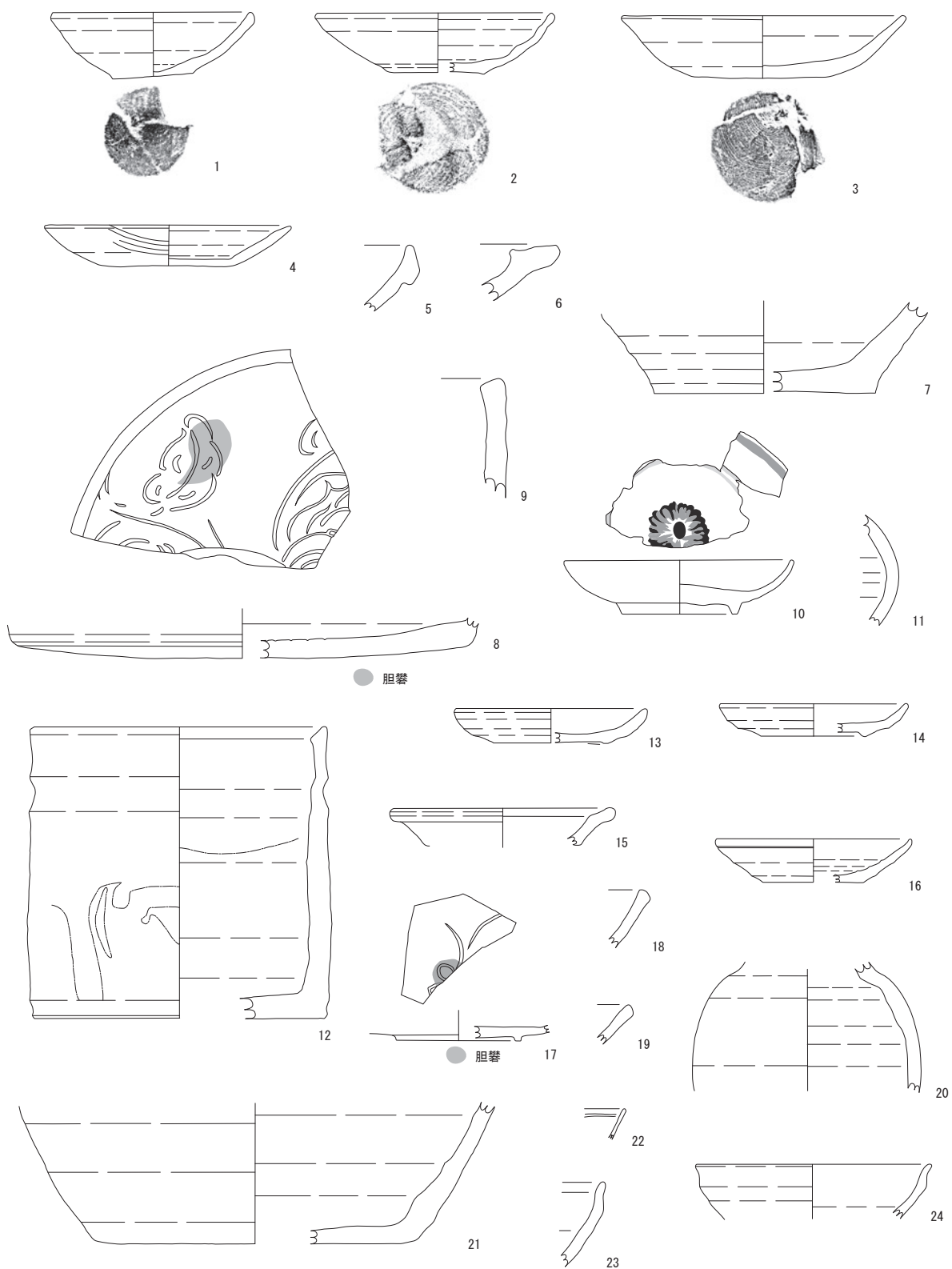


图30 II区出土遺物1

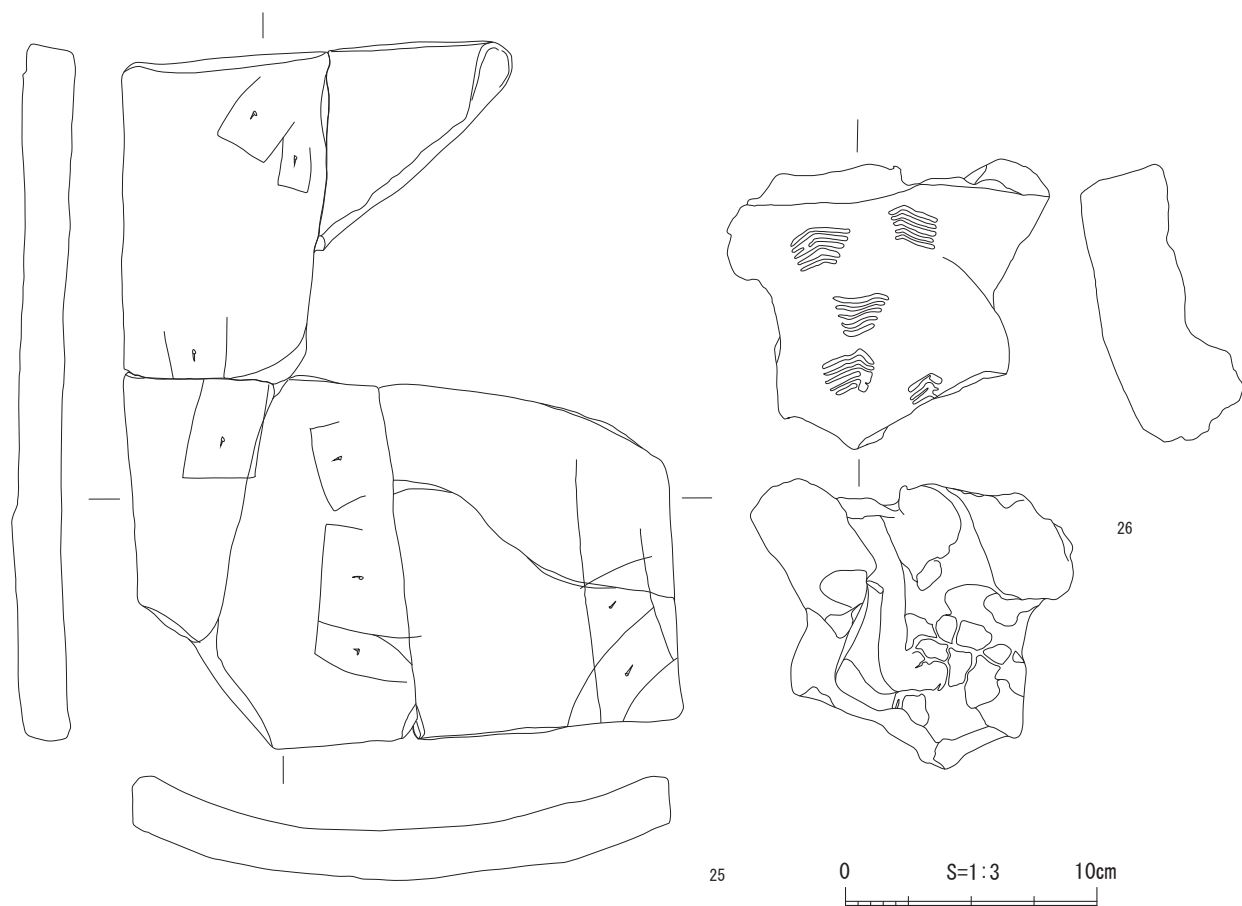


図 31 II 区出土遺物 2

図版	種別	器種	出土位置	口径	器高	底・高台径	その他	釉薬	時期・分類	備考
1	土師器	かわらけ	15層	9.8	3.3	4.0				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕
2	土師器	かわらけ	上面遺構直上	11.7	3.0	5.0				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕
3	土師器	かわらけ	上面遺構直上	(14.0)	3.1	7.2				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕
4	土師器	かわらけ	上面遺構直上	12.1	2.1	6.6			A類	非ロクロ成形。2の字ナデアゲ、京都産の可能性
5	瀬戸美濃	擂鉢	攪乱層	—	(3.3)	—		錆釉	大2	
6	瀬戸美濃	擂鉢	攪乱層	—	(2.5)	—		錆釉	大4前	
7	瀬戸美濃	擂鉢	攪乱層	—	(4.5)	(11.0)		錆釉	大4	
8	瀬戸美濃	鉦鉢	攪乱層	—	—	(22.4)		灰釉		
9	瀬戸美濃	匣鉢	攪乱層	—	(6.0)	—			大窯	
10	青花	皿	攪乱層	(11.3)	(2.7)	(5.8)		透明釉	16C後葉	漳州窯産。口縁部内面に界線、高台内面に捻花文
11	備前	德利	攪乱層	—	(5.5)	—	胴部 (8.4)		16C代	
12	瀬戸美濃	建水	2層	(14.5)	14.5	(14.4)			大4	底部外面回転糸切痕
13	瀬戸美濃	丸皿	15層	(9.5)	1.7	(5.7)		灰釉	大4後	底部外面回転糸切痕。トチ痕あり
14	瀬戸美濃	丸皿	15層	(9.4)	1.6	(5.2)		灰釉	大3後	削り込み高台
15	瀬戸美濃	折縁皿	15層	(11.2)	(1.8)	—		灰釉		
16	瀬戸美濃	灯明皿	15層	(9.8)	2.2	(5.0)				底部外面回転糸切痕
17	瀬戸美濃	向付	15層	—	(0.8)	(6.2)		灰釉	大4	付高台
18	瀬戸美濃	大皿	15層	—	(2.9)	—		鉄釉	大4	
19	瀬戸美濃	大皿	15層	—	(2.0)	—		鉄釉	大4	
20	瀬戸美濃	德利	15層	—	(6.5)	—	胴部 (11.4)	灰釉	大4	
21	瀬戸美濃	祖母懷壺	15層	—	(7.1)	(7.0)			大窯	底部ヘラ起こしか
22	青花	碗	15層	—	(1.5)	—		透明釉	16C中葉以降	外面無文、口縁部内面に界線
23	瀬戸美濃	天目茶碗	SX2直上	—	(6.2)	—		鉄釉、錆釉	大3後	
24	瀬戸美濃	天目茶碗	SX2直上	(11.7)	(2.7)	—		鉄釉、錆釉	大3後	
平瓦と道具瓦										
図版	種別	器種	出土位置	コビキ	長さ	幅	厚さ	谷深	備考	
25	瓦	平瓦	15層	—	27.5	21.5	1.9	2.1		
26	瓦	道具瓦	15層	—	(11.1) × (12.9) × 6.3			1単位5本の刻み目が5つ残存		

表 3 II 区遺物観察表

第3節 Ⅲ区 (図32～41)

主郭の虎口 (図32) は第1次調査で北、東、西の三方向の石垣 (順に SV4、SV5、SV6) と SV4下の川原石を使用した礎石列 (SB4、それぞれ東より順に礎石1～4とする) が確認されている。

第7次調査では虎口内部の調査のため1トレンチを設定した。さらに、既に確認されている石垣と礎石列の確認のために1-1トレンチ、虎口内部に構築されている石段の性格を確認するため、1-2・3トレンチをそれぞれ設定した。また、2トレンチはSV4とSV5の構築時期の前後関係を確認するため、設定した。

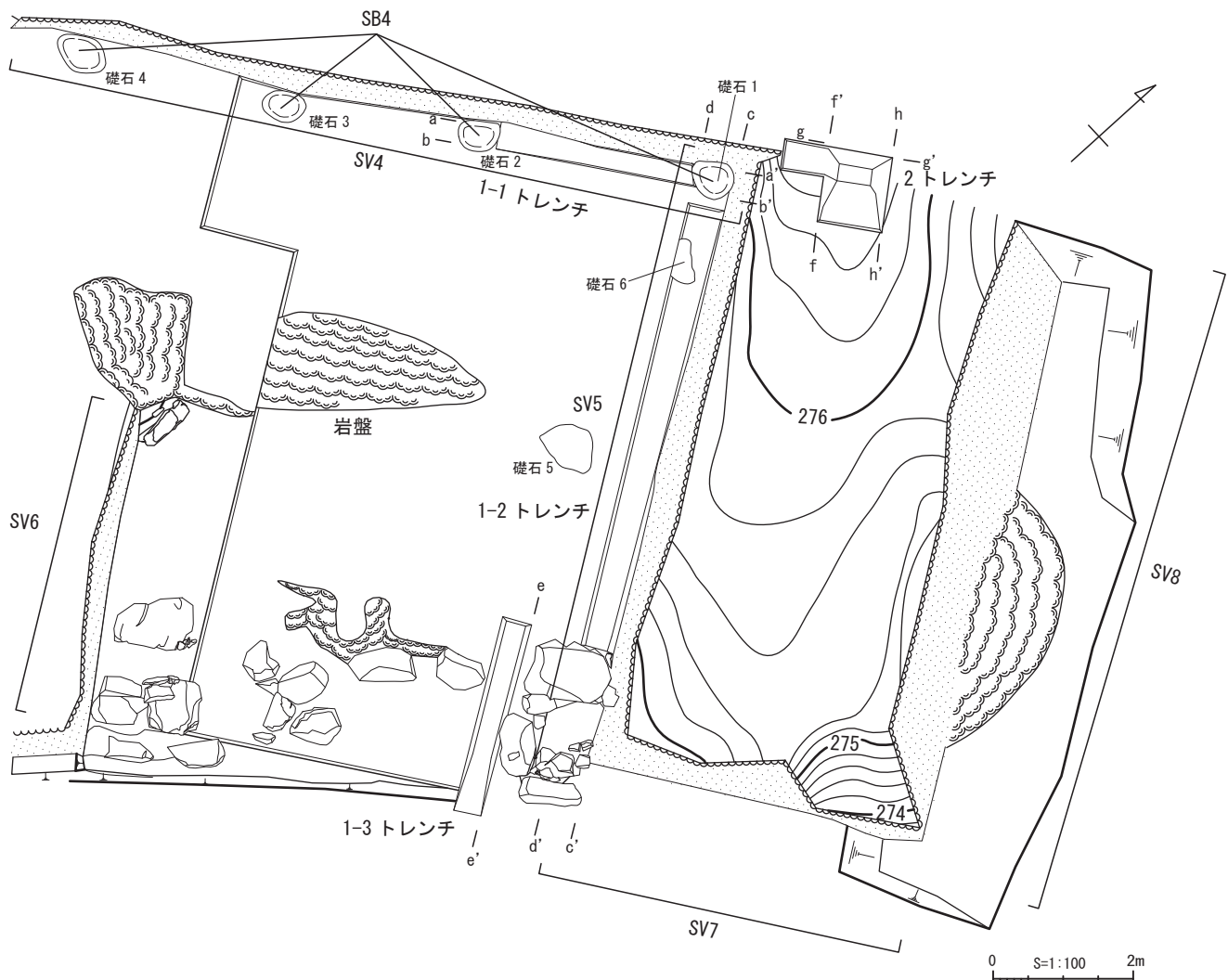


図32 Ⅲ区平面図

1 トレンチ (図32～37)

1 トレンチでは虎口空間の表土を除去した段階で、虎口中央部より自然岩盤を検出し、東側部分からは上部に平坦面を持つ幅80cm 程の角石 (礎石5) を検出した。岩盤以北は地山を整

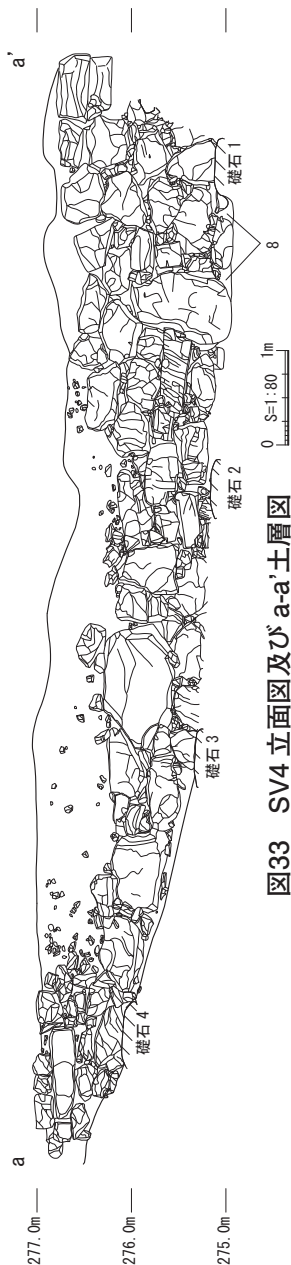


図33 SV4 立面図及び a-a' 土層図

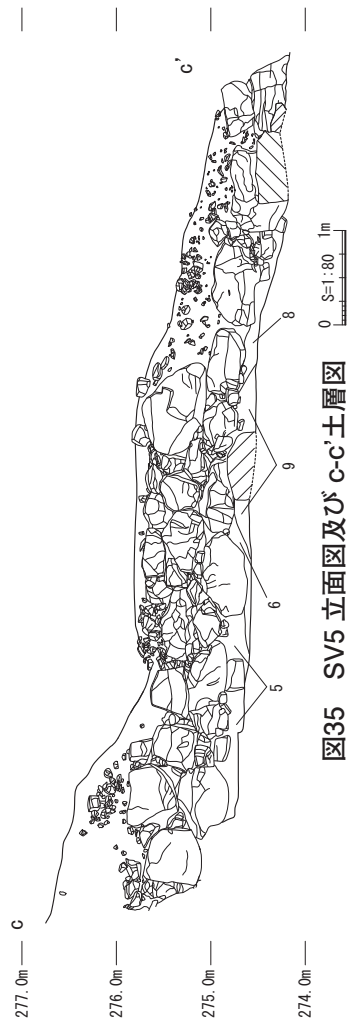


図35 SV5 立面図及び c-c' 土層図

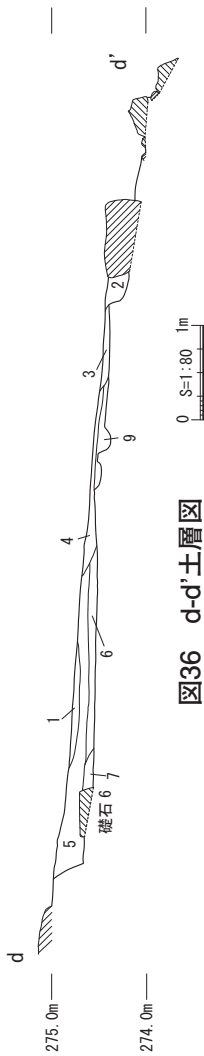


図36 d-d' 土層図

1 褐色土	しまり弱い	粘性弱い	(φ5~20mmの礫を少量含む)	〔後世の堆積土〕
2 褐色土	しまりかなり強い	粘性あり	(φ10~20mmの礫を含む)	〔後世の石段裏込め〕
3 黄褐色土	しまり弱い	粘性あり	(φ5~20mmの礫をわずかに含む)	〔後世の堆積土〕
4 黄褐色土	しまり弱い	粘性弱い	(φ5~20mmの礫を含む)	〔後世の堆積土〕
5 棕色土	しまり強い	粘性弱い	(φ50mm程度の礫を多く含む)	〔後世の堆積土〕
6 明赤褐色土	しまり強い	粘性あり	(φ5~15mmの礫を含む)	〔礫石6埋土、SB4・SV4・SV5据え付け面〕
7 棕色土	しまりあり	粘性弱い	(φ5~10mmの礫をわずかに含む)	〔礫石6埋土〕
8 明褐色土	しまりあり	粘性あり	(φ5~40mmの礫を少量含む)	〔城機能時の層、時期不明〕
9 明褐色土	しまりあり	粘性あり	(φ5~20mmの礫をわずかに含む)	〔整地土〕
10 地山	〔表土〕			
11 腐葉土	しまり弱い	粘性やや弱い	(φ20~100mmの礫を含む)	〔流土〕
12 黄褐色土	しまり弱い	粘性やや弱い	(φ60~200mmの礫を多く含む)	〔裏込め〕
13 礫層				

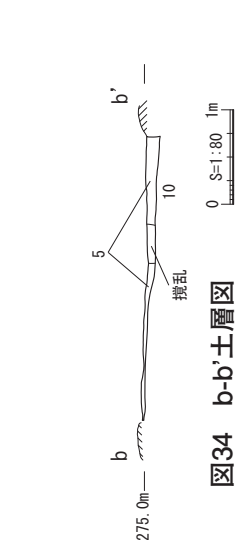


図34 b-b' 土層図

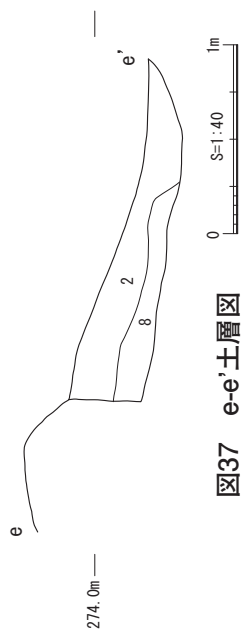


図37 e-e' 土層図

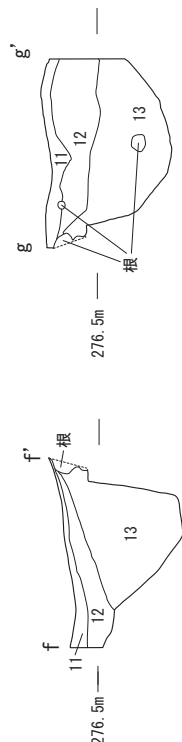


図38 f-f' 土層図

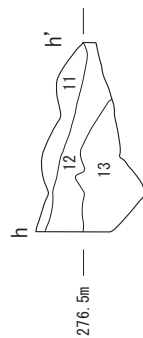


図39 g-g' 土層図

図40 h-h' 土層図

地した面がみられ、岩盤以南は一部攪乱されていたものの、かなりしまりの強い面がある（5・6層）。礎石5は地山面を掘り込むように据えられ、周囲には10～15cm ほどの礫が根固めとして充填されている。礎石5と岩盤の上面はおおむね同一の高さであるが、虎口内は全体的に東へやや傾斜している。また、1トレンチ西側部の主郭へ上がる石段は、石下より腐葉土を検出したことから、近年の整備により設置されたものである。

1-1トレンチ（図33・34）

1-1トレンチはSB4のうち礎石1と礎石2の間を調査し、SV4の構築面およびSB4の据え付け面を確認した。SV4は地山及び地山に8層を充填した面で構築され、SB4は地山面及び地山の上に5層を盛った面の上に据えられている。SB4はⅠ区（6～9次調査）の構築物に伴うものと推測される。

1-2トレンチ（図35・36）

1-2トレンチの北東部からは上面が平坦な幅60cm 程の角石（礎石6）を検出した。礎石6は地山面に据えられ、周囲にはわずかに礫を含む7層が充填されている。SV5は5、6、8、9層の上に構築されている。5層は礎石6を埋めたSV5の整地に伴う層であり、6層は礎石6に伴う整地層である。なお、この整地層は1、3、4層のように一部攪乱を受けている。8層は城機能時の層ではあるが、どの時期に形成されたかは不明である。また、8層はSV4・SV5のどちらの下部にも堆積しており、SV4とSV5の構築時に使用されたとみられる。9層はしまりのある土で整地層とみられるが、掘り込み埋土の可能性もある。6層は1トレンチで検出した地山を整地した面とおおよそ同一レベルであり、同時期と推測できる。

礎石5と礎石6はともに川原石を用いず、同じ地山を整地してある面に据えられていることから同時期のものと推測される。しかし、礎石上面の高さは礎石5よりも礎石6がわずかに高いため、同じ構築物に使用されたかは定かではない。また、川原石ではない礎石を埋めて整地し、川原石の礎石を据える過程は、Ⅰ区でも確認されている。このことから、枡形虎口でも角石である礎石5・6を使用した時期（6・7層で整地した時期）と川原石である礎石1～4を使用した時期（5層で整地した時期）の二時期が想定できる。虎口内の石垣（SV4・SV5）は、川原石の礎石を使用した時期と同時期のものとみられる。

1-3トレンチ（図37）

1-3トレンチでは、石段の下から石を安定させるための土嚢がみつきり、後世に積まれていることが分かった。2層は石段の後世の整地土として機能している。

2トレンチ（図38～40）

2トレンチではSV3の裏込めである13層を検出した。13層は礫と土の混じる裏込めで、宝篋印塔の破片が出土している。12層はしまりが弱く、北側からの流土とみられる。また、SV4とSV5の接続部の確認を行ったが、先に構築したとみられるSV4の延長とみられる石材は確認できなかった。SV4とSV5は同一の整地層に据えられ、SV4の北東方向への延長部が確認されなかったことから、同時期に築かれたものと想定される。また、SV7はSV5に連続して築かれていることから、SV4・5と同時期に築かれたと想定できる。

遺物（図41）

Ⅲ区では計30点の遺物が出土し、瓦12点、かわらけ3点、陶器9点、磁器5点、石造物片1点である。そのほとんどが破片であるが、11点を図化した。瓦は13点出土したが瓦当が残るものは無く、上面の整地層（5層）から表土までの層で出土している。陶器類は瀬戸美濃産がほとんどである。出土した土器・陶器類は残存部が少なく、時期が推定できるものは3点（3・5・6）であった。1・2はかわらけであり、2は非ロクロ成形で口縁部内面にススが付着している。3は白磁の皿である。高台は畳付付近のみ露胎し、やや内傾ぎみであり、16世紀頃のものと思われる。4は瀬戸美濃産の襷皿であり、口縁部の一部が内湾し、襷を形成する。5は灰釉系陶器の碗である。器壁が薄く腰部が直線的であることから、東濃型の生田2号窯式であり、15世紀頃のものとして推定できる。6は瀬戸美濃産の播鉢である。口縁部が丸みを帯び、下方に垂れることから大窯第2～3段階のものと考えられる。櫛目が3本残存している。7・8はそれぞれ鉢類、桶とみられるが残存状態は悪い。9の匣鉢は底部外面に回転糸切痕が確認できる。10は砂岩製の宝篋印塔の破片であり、裏込め用の石材として使用されたとみられる。

（松原）

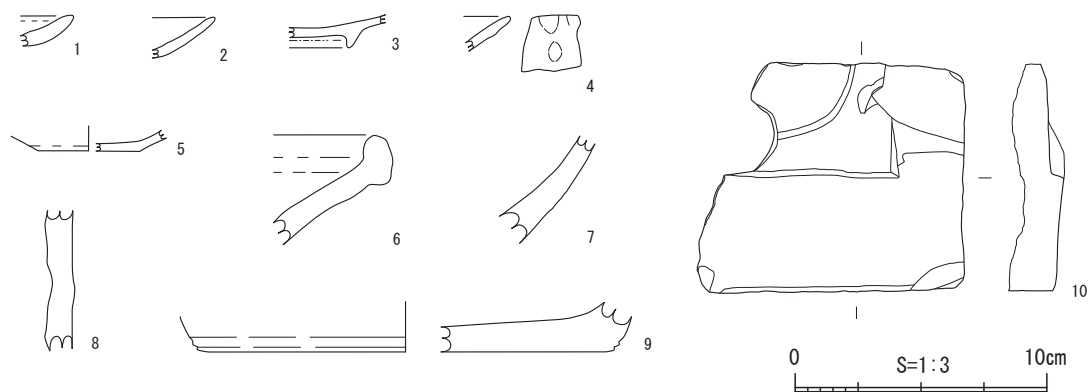


図41 Ⅲ区出土遺物

図版	種別	器種	出土位置	口径	器高	底・台径	その他	釉薬	時期・分類	備考
1	土師器	かわらけ	1T3層	—	(1.2)	—				
2	土師器	かわらけ	1T3層	—	(1.6)	—				非ロクロ成形。スス付着
3	白磁	皿	1T3層	—	(1.3)	—		透明釉	16C	
4	瀬戸美濃	襷皿	1T3層	—	(1.5)	—		灰釉		
5	灰釉系陶器	碗	1-2T5層	—	(0.8)	(4.0)			生田2	底部外面回転糸切痕
6	瀬戸美濃	播鉢	表採	—	(4.3)	—		錆釉	大2～3	櫛目3本残存
7	瀬戸美濃	鉢類	1T3層	—	(4.3)	—		錆釉		
8	瀬戸美濃	桶	1T3層	—	(5.6)	—		錆釉		
9	瀬戸美濃	匣鉢	表採	—	(2.0)	(16.0)		鉄釉		底部外面回転糸切痕
10	石造物	宝篋印塔	2T13層		(10.7) × (9.1)					

表4 Ⅲ区遺物観察表

第4節 IV区 (図42~46)

IV区は南I曲輪に位置する枡形虎口から主郭南西部への斜面を經由する動線が考えられたため、主郭南西部の窪んだ地形に虎口を想定し調査区を設定した。

地山面から現地表面までの堆積土(1・4層)の厚さは南側で30cm程度、北側で40cm程度、西側で10cm程度であった(図44)。調査区中央の石列は地表面に露頭しているが、攪乱層の上に積まれていたため、城が機能した時期の遺構ではない。また、第1次調査で調査されている調査区北端に露出している石の集積部分付近は規則的な配置や組んでいる様子はみられない。堆積土が薄く、遺物が出土しないため時期は不明である。

調査の結果からIV区では城が機能した時期の遺構は確認できなかった。

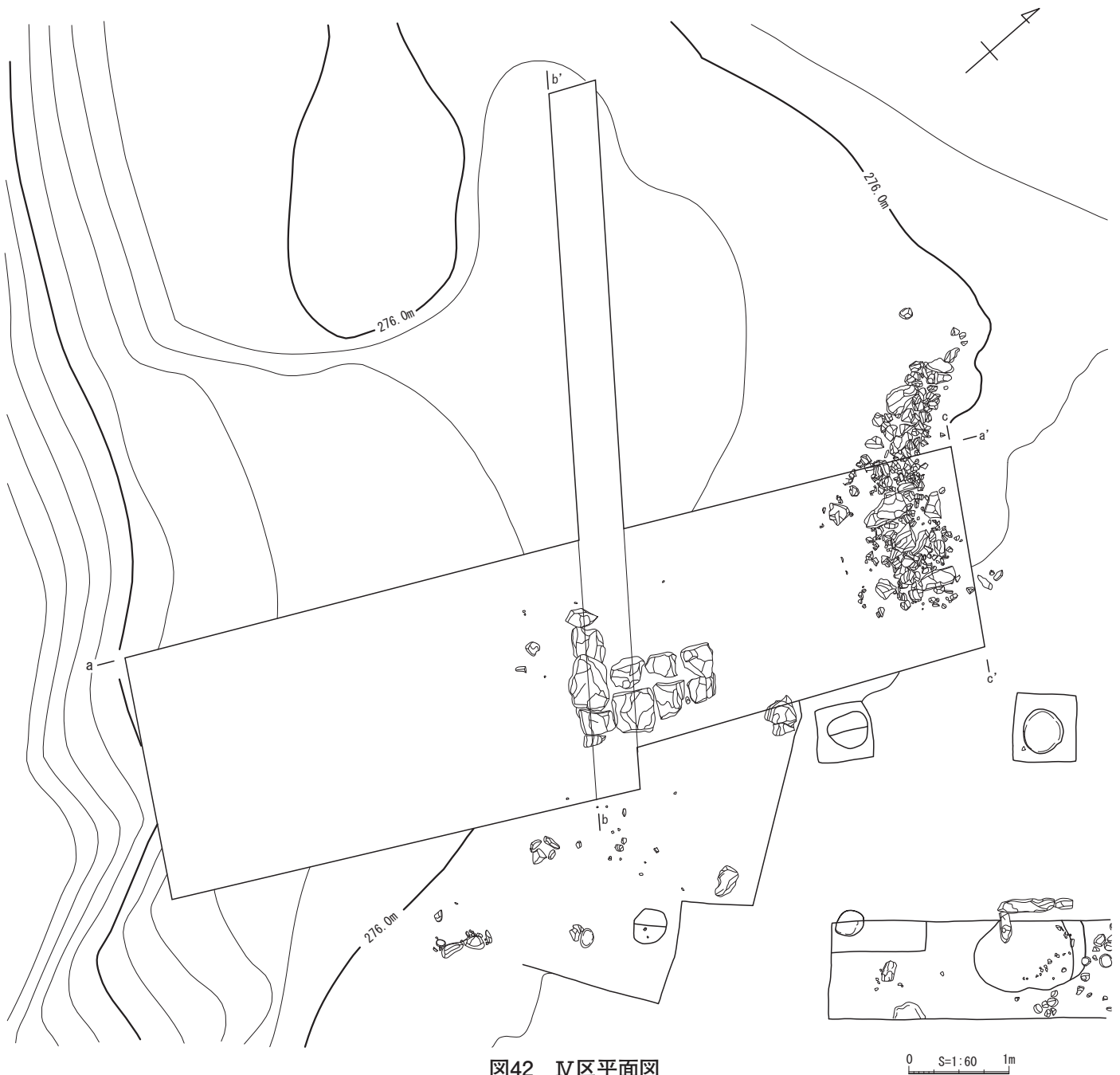




図43 a-a'土層図

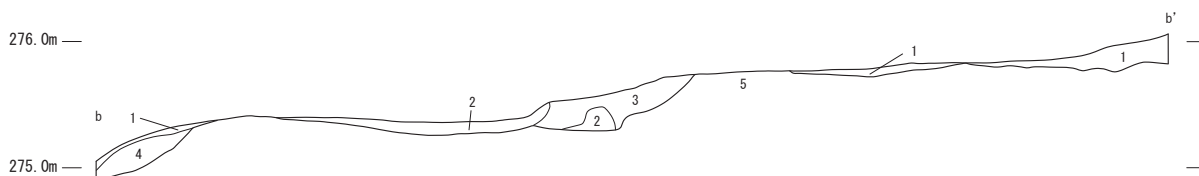


図44 b-b'土層図



図45 c-c'土層図

- 1 腐葉土〔表土〕
- 2 掘り込みによる攪乱〔攪乱層〕
- 3 黄褐色土 しまりやや強い 粘性弱い〔埋土〕
- 4 黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 6 地山

遺物 (図46)

IV区では23点の遺物が出土したが、うち9点を実測した。1、2は非ロクロ成形のかわらけである。3は16世紀後半の青花碗で外面口縁部に雷文帯、胴部に鳳凰唐草文が施されている。4は青花碗だが、口縁部の一部しか残らないため、詳細は不明である。5～9は瀬戸美濃産陶器であり、5は瀬戸黒茶碗、6は緑釉小皿である。8は口縁部がやや外反する大窯第1段階後半の端反皿である。9は錆釉壺類の胴部で、内外ともにロクロ目が強く残る。

(松原)

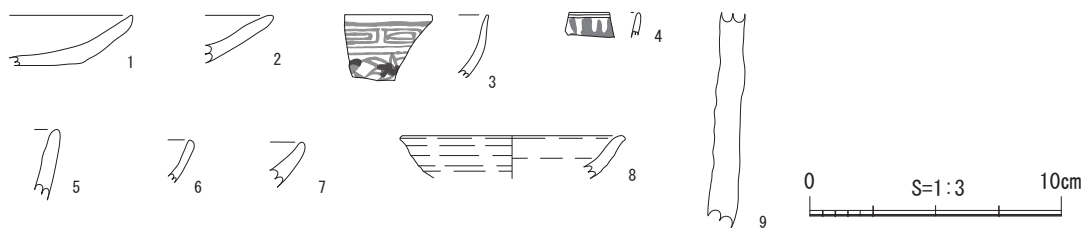


図46 IV区出土遺物

図版	種別	器種	出土位置	口径	器高	底・台径	その他	釉薬	時期・分類	備考
1	土師器	かわらけ	2層	—	(2.0)	—				非ロクロ成形
2	土師器	かわらけ	2層	—	(1.9)	—				非ロクロ成形
3	青花	碗	3層	—	(2.6)	—		透明釉	16C 後半	
4	青花	碗	3層	—	(1.0)	—		透明釉		
5	瀬戸美濃	瀬戸黒茶碗	1層	—	(2.7)	—		鉄釉		釉薬剥離
6	瀬戸美濃	緑釉小皿	1層	—	(1.7)	—		鉄釉		
7	瀬戸美濃	丸皿	1層	—	(2.0)	—		灰釉		
8	瀬戸美濃	端反皿	2層	(8.7)	(1.7)	—		灰釉	大1後	
9	瀬戸美濃	壺類	1層	—	(8.6)	—		錆釉		

表5 IV区遺物観察表

第5節 V区 (図47～54)

V区は主郭北西部に設定した。現況地形は主郭端部に向かって、緩やかに傾斜している（図47）。地表面では青灰色の棒状の川原石が散布しているSX3や、露出している岩盤の周囲に径15cm 前後の川原石を敷き詰めたSX4、同様に径15cm 前後の川原石を敷き詰めたSX5、礎石1や礎石2（図48）の一部が確認されていた。第8次調査では遺構の有無とその範囲を確認することを目的に、1～4トレンチを設定した。更に、第9次調査では後述するSX1の平面的な展開を確認するために5・6トレンチを設定した。

調査の結果、最大1.0m 掘削したところで遺構・地山面を確認した。地山面では岩盤の露頭が随所にみられる。3トレンチは地山面の確認のため、遺構の可能性のある石や土坑を避け、サブトレンチ1により断ち割りを行った。その結果、サブトレンチ内で遺物が出土しないため、30層上面を地山と判断した。堆積はおおむね北方向に向けて深くなっている。なお、1トレンチ東側では、礎石2・3があることや木の根により掘削が困難であるため、その面より深く掘削は行っていない。

遺構面は上下2面で確認した。上層遺構面は18～22・24・26～30層上面である。南側から北側に向けて傾斜し、2トレンチ北端付近から北側ではフラットになっている。上層遺構面の整地層からは古瀬戸後期様式～大窯第4段階の瀬戸美濃産陶器をはじめとした幅広い時期の遺物が包含されていた。整地層の中で最新の時期を示すのは大窯第4段階前半の播鉢（図54-50）であるため、上層遺構面は大窯第4段階前半以降の造成と考えられる。

下層遺構面は地山・23・30・33・35～37層上面である。こちらも2トレンチ南側から曲輪北側に向けて、傾斜している。下層遺構面の整地層からは遺物が出土していないが、下層遺構に伴うSK6の埋土から大窯第3段階後半の遺物が出土しているため、その頃までには機能していたものと推定される（32層・図54-71）。また南トレンチでは、地山面直上に張り付くような状態でかわらけが2点出土している（図53-29・30）。

なお、8～10層は薄く水平に堆積し、8層に掘りこまれている9・10層は硬くしめるため、整地面の可能性はある。ただ、平面的に遺構が確認できず、西側は11・12層等に攪乱されていたため、整地面であるかは判断できなかった。

SK1 (図48・50)

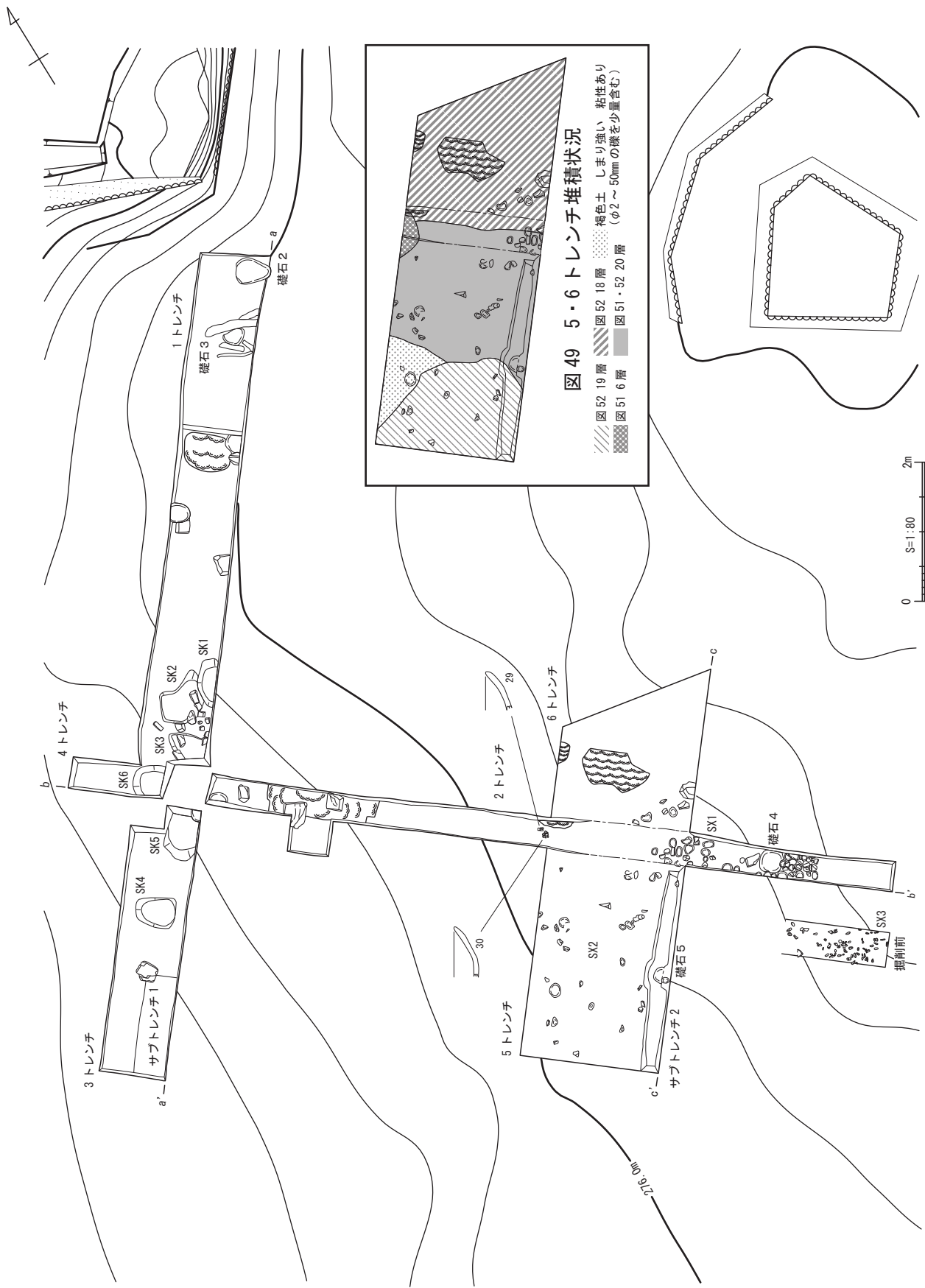
下面遺構に伴う被熱した土坑であり、内面に13cm の厚さで炭化物を含む32層が堆積している。規模は76cm ×25cm 以上であり、トレンチの南側に続いていることが想定される。上面及び底面が被熱しているが、周囲からは炉壁など焼けた壁片は出土していない。SK1の周辺からは大型の礫が点在しており、被熱はしていないがそれらの礫も関連する可能性がある。赤褐色を呈し焼けていることや過去の城跡内の調査で炉壁や羽口が出土することからも、簡易な鍛造などの鉄製品の加工や炭を焼くなどの機能が想定される。

SK2・SK3 (図48・50)

ともに下層遺構面を掘り込んで構築された不定形の土坑である。SK2は63cm ×82cm、SK3は38cm 以上×57cm 以上を測り、SK3は南へと続く。地山には礫が含まれないため、土坑構築時にチャート等の石を配置している可能性が想定される。これらの石材はSK1に近接しているが被熱しておらず、土坑の切り合い関係や32層がSK1の西側方向にも堆積していることからSK2、SK3を埋めたもしくは埋没後にSK1が機能していたと想定される。埋土から



図47 V区周辺遺構分布図



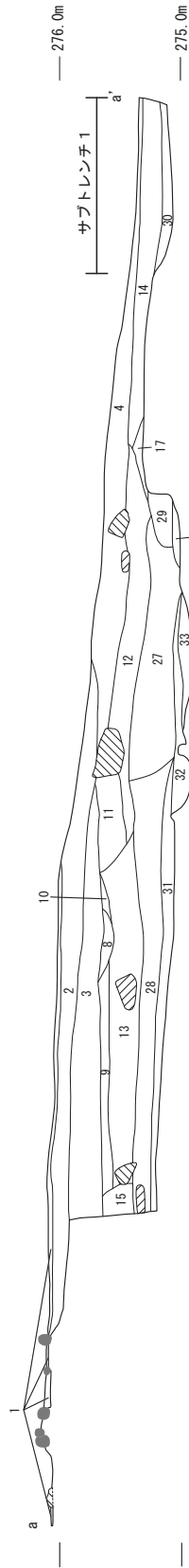


図50 a-a'土層図

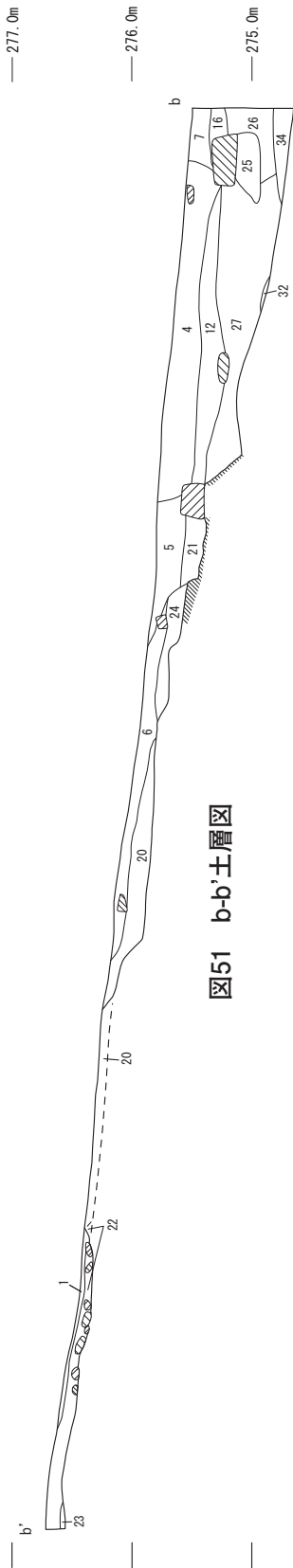


図51 b-b'土層図

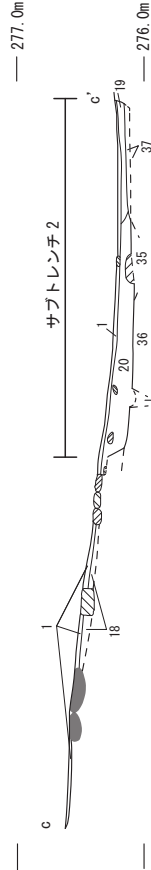


図52 c-c'土層図

- | | | | |
|-------------|-------|------|-------------------------------------|
| 1 灰色土 | しまり弱い | 粘性弱い | 〔φ5～220mmの礫を含む表土を構成する腐葉土〕 |
| 2 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫を少量含む堆積土。近現代の遺物含む〕 |
| 3 黄褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～30mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 4 黒褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～220mmの礫をわずかに含む堆積土。現代の遺物含む〕 |
| 5 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～50mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 6 暗オリーブ色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～120mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 7 灰オリーブ色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 8 黒褐色砂質土 | しまり弱い | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫をわずかに含む9と同じ整地面〕 |
| 9 明黄褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫を少量含む整地面の可能性あり〕 |
| 10 明黄褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～50mmの礫を少量含む9と同じ整地面〕 |
| 11 黒色砂質土 | しまり弱い | 粘性あり | 〔φ5～40mmの礫を少量含む部分的な堆積土〕 |
| 12 黒褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～50mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 13 明灰黄色砂質土 | しまり弱い | 粘性あり | 〔φ5～300mmの礫を含む堆積土。炭を含む〕 |
| 14 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～50mmの礫をわずかに含む堆積土。現代の遺物含む〕 |
| 15 攪乱 | | | |
| 16 明黄褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 17 にぶい褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～20mmの礫をわずかに含む地山の再堆積。部分的に12層が入る〕 |

- | | | | |
|--------------|---------|--------|--|
| 18 褐色土 | しまり強い | 粘性あり | 〔φ5～25mmの礫を少量含む上面整地層。川原石を据えている〕 |
| 19 淡黄色土 | しまり強い | 粘性あり | 〔φ5～50mmの礫を少量含む上面整地層。川原石を据えている〕 |
| 20 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～100mmの礫・川原石を含む上面整地層。川原石を据えている〕 |
| 21 暗黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～50mmの礫を少量含む上面整地層。部分的に黒色土が入る〕 |
| 22 明黄褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～80mmの礫を多く含む上面整地層。礎石を覆う〕 |
| 23 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～60mmの礫を含む盛土〕 |
| 24 オリーブ褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～20mmの礫を少量含む上面整地層〕 |
| 25 明褐色砂質土 | しまり強い | 粘性弱い | 〔φ5～60mmの礫を少量含むブロックで入る堆積土〕 |
| 26 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性ややあり | 〔φ5～150mmの礫を少量含む上面整地層〕 |
| 27 にぶい黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～100mmの礫を多量含む上面整地層〕 |
| 28 黄灰色砂質土 | しまり強い | 粘性あり | 〔φ5～20mmの礫を少量含む上面整地層〕 |
| 29 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～20mmの礫をわずかに含む上面整地層。部分的に12層が入る〕 |
| 30 明褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～10mmの礫を少量含む上面整地層。地山面〕 |
| 31 オリーブ灰色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～20mmの礫を少量含む堆積土〕 |
| 32 灰黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～40mmの礫をわずかに含む堆積土。炭を多く含む。32層の下は土が焼けている〕 |
| 33 オリーブ灰色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5～40mmの礫をわずかに含む下面整地層。被熱遺構の構築面の層〕 |
| 34 明褐色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 〔φ5～60mmの礫を含む地山の再堆積土〕 |
| 35 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 〔φ5mm前後の礫を少量含む下面整地層。礎石を据えている〕 |
| 36 黄褐色土 | しまりやや強い | 粘性あり | 〔φ5mm前後の礫を少量含む下面整地層〕 |
| 37 明黄褐色土 | しまり強い | 粘性あり | 〔φ5～60mmの礫を多く含む下面整地層〕 |

遺物は出土していない。

SK4 (図48)

58cm × 44cm の土坑で、埋土から現代の遺物が出土している。

SK5 (図48・50)

下層遺構面に伴う63cm 以上×63cm 以上の土坑で、29・32層が26cm 堆積している。底面はわずかに被熱し、炭を多く含む32層が堆積している。土坑内には SK2、SK3付近で点在するチャートがみられる。同様に被熱がみられる SK6や2トレンチの北側で確認されている被熱部分との関連性が想定される。埋土から土師器が1点のみ出土している (図50-32層)。

SK6 (図48・51)

下層遺構面に伴う遺構である。規模は45cm 以上×45cm 以上を測り、南西方向へと続くことが想定される。側面等に被熱はみられないが、底面は被熱している。埋土から土師器、瀬戸美濃産陶器、白磁が出土している (図51-32層)。

礎石2・3 (図48)

1トレンチ西側で確認した扁平な川原石である。礎石2は50cm × 25cm、礎石3は29cm × 26cm の規模である。建物の礎石としての利用が想定できるが、周囲では樹木の根が生え、地形は斜面で礎石2はやや傾いている。トレンチ内及び地表面において同一レベルの礎石等の遺構が確認できないため、両者とも原位置を留めていない可能性が高い。

礎石4 (図48)

後述の SX1に半ば覆われるような状況で検出された。地山面に設置されていることから下層遺構面に伴う。

礎石5 (図48・52)

5トレンチ内で設定したサブトレンチ2内で確認した、下層遺構面に伴う遺構である。規模は14cm 以上×24cm で35層上に据えられていた。

SX1 (図48・51)

礎石4を半ば覆うように径8～15cm の川原石を敷き詰めた上層遺構面に伴う敷石遺構である。礎石4の南側では密だが、北側ではまばらになる。SX1は南東側部分を22・23層によって構築される SX3によって覆われている。5・6トレンチ付近では、22層が SX1西側を構築する20層の下に潜り込んでいるように観察された。SX1の遺構面の保護のため、断ち割りにより上下関係を把握できたわけではないが、上述のような状況から SX1・SX3の構築、そして上層遺構面の整地はほぼ一体的に実施されたと考えられる。

SX1は、SX3を構築する際の根固めのような役割やもしくは東西で別々の遺構として機能していた可能性がある。後者の場合、20層と22層が平面的に分かれる2トレンチ南端より2.5m 部分が境になると考えられる。

SX2 (図48・49・52)

2・5・6トレンチにまたがるように検出された上層遺構面に伴う石の散布である。構成している石の大きさはSX1と範囲は重なるが、こちらには角礫も含まれ、よりまばらに確認されたため、別の遺構と認識した。ただ、遺構平面(図49)とサブトレンチ2にて、表土直下に薄い堆積が広がっている様子が確認でき、SX2もその堆積に包含される状況で検出されたため、廃城後の堆積である可能性もある。

SX3 (図48・51)

4～10cmの扁平で棒状の川原石が散在する盛土状の遺構で、上層遺構面に伴う。約9.2m×17.5mの範囲に広がり、位置関係ではSX1の北側がSX3の裾部分に展開している。土層図(図51)の22層にも棒状の川原石が多量に包含されているため、これらは盛土の表面に敷いたというより棒状の川原石を含んだ土で盛土を行ったとみられる。

散在、包含されている川原石は、SX1・2・4・5を始めとした城内の他所では確認されない石材種であり、個々の石のサイズも比較的小さいため、意図的にこの部分にのみ用いた可能性がある。

地表面では、図示した箇所より北西側でも同一の川原石がまばらに確認でき、SX3北西側が若干削られている可能性もある。

遺物 (図53・54)

V区の調査では2269点の遺物が出土している。今回は遺物の残存状況と出土位置などを重視し、78点を図化した。

土師器は2102点出土し、そのほとんどはかわらけである。ロクロ成形と非ロクロ成形が判別できる個体は、前者は401点、後者は143点確認した。つまり、ロクロ成形かわらけが3倍近く出土していることになる。ただし、その多くは両者のいずれとも判断が難しい細片である。非ロクロ成形のかわらけは京都を模倣した在地産のB1、B2類が多くみられる。なお、細片ではあるが鍋とみられる破片も1点のみ出土している。

陶器は225点出土している。産地別に分類すると瀬戸美濃産が圧倒し、器種としては皿類や天目茶碗、播鉢の出土量が多い。灰釉系陶器や古瀬戸製品など、若干古手の遺物も出土している。なお、瀬戸美濃産以外では備前産とみられる陶器片も2点のみ出土している。

磁器は38点出土している。内訳は青花14点、白磁23点、青磁1点で白磁の割合が最も高い。その多くは碗や皿とみられるが、中には茶入ないし水注(8)、そして香炉(19)とみられる特殊な器種も確認できる。

金属製品は5点出土している。16・27・35・56は銭貨であり、27のみ永楽通宝であると判読できるが、他の銭貨については判読できない。16・27に比べて、35・56はサイズが小さい。44は釘であり、L字状に折れ、断面は方形になっている。

他には窯道具である輪ドチが2点出土しているほか、碁石も一点出土している(図版17)。瓦は現代のものを除けば、1点も出土していない。

(佐藤)

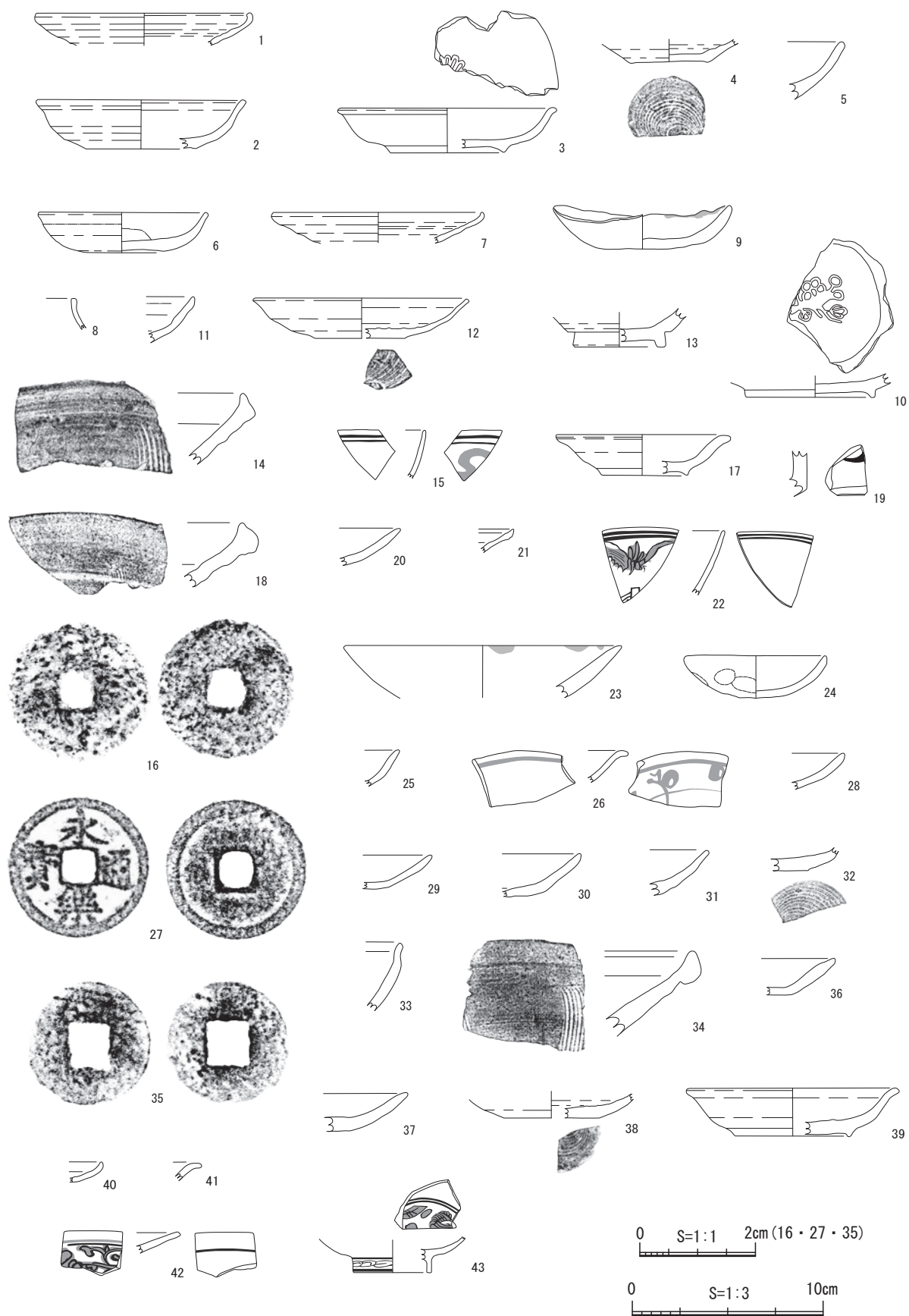


图53 V区出土遗物1

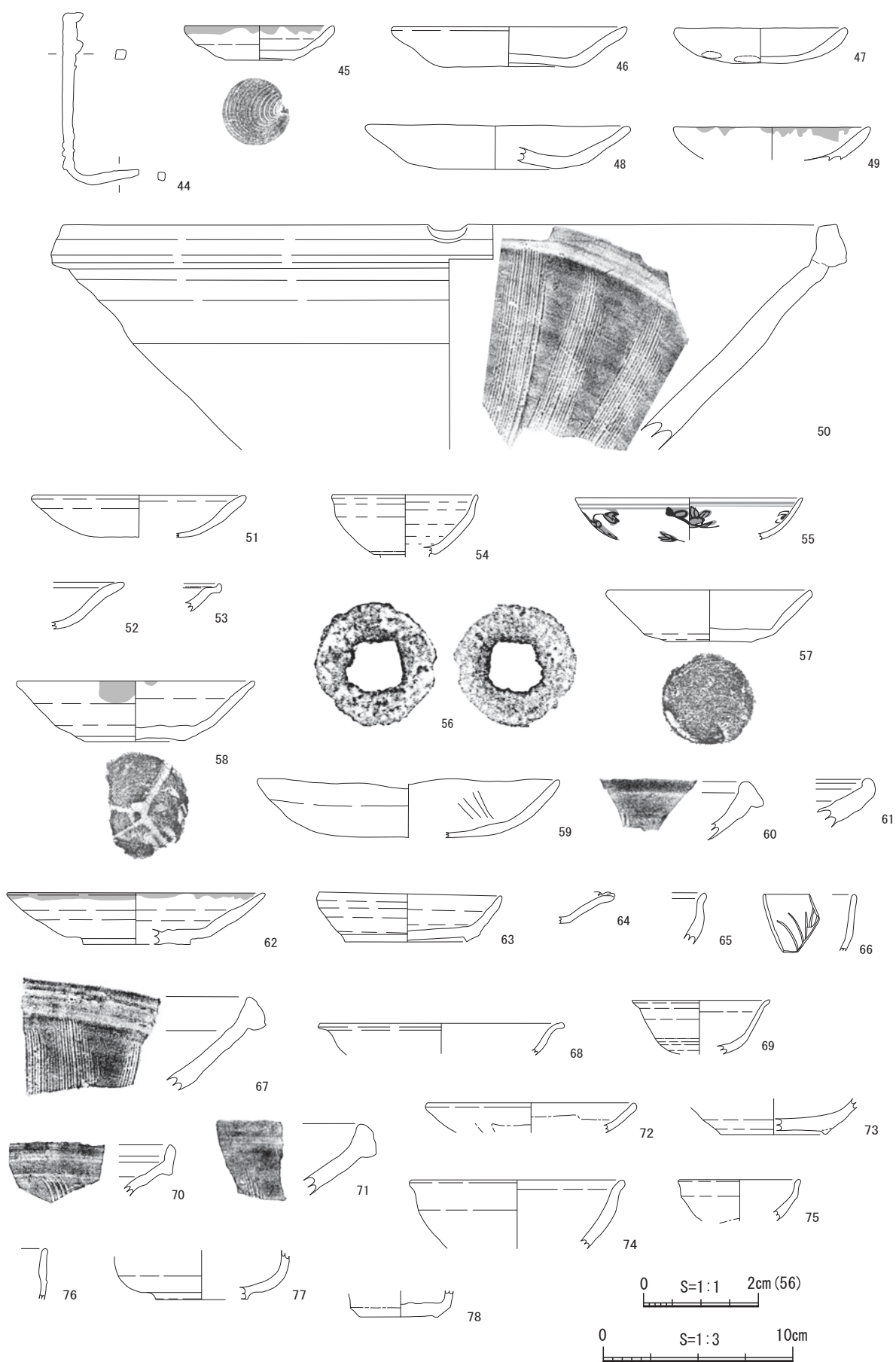


图54 V区出土遗物2

図版	種別	器種	出土位置	口径	器高	底・高台径	その他	釉薬	時期	備考
1	瀬戸美濃	灯明皿	1T1層	(11.2)	(1.7)	—			大3	
2	瀬戸美濃	丸皿	1T9・10層	(10.8)	2.5	(5.7)		灰釉	大2	
3	瀬戸美濃	端反皿	1T9・10層	(11.2)	2.4	(6.0)		灰釉	大2	見込みに菊花文。削り出し高台
4	瀬戸美濃	灯明皿	1T9・10層	—	(1.2)	4.0			大2前	底部外面回転糸切痕
5	瀬戸美濃	丸皿	1T12・13層	—	(3.0)	—		鉄釉	大1	
6	瀬戸美濃	緑釉小皿	1T12・13層	(8.7)	2.1	4.3		鉄釉	古瀬戸後IV	底部外面回転糸切痕
7	瀬戸美濃	灯明皿	1T12・13層	(10.9)	(1.6)	—			大3	
8	白磁	茶入	1T12・13層	—	(2.6)	—		透明釉		水注の可能性もあり
9	土師器	かわらけ	1T27層	9.3	2.3	3.7			C1類	非ロクロ成形。口縁部にタール付着
10	瀬戸美濃	丸皿	1T27層	—	(1.2)	(6.7)		灰釉	大窯	端反皿の可能性もあり。見込みに文様。削り出し高台
11	瀬戸美濃	緑釉小皿	1T27層	—	(2.4)	—		鉄釉	古瀬戸後IV	
12	瀬戸美濃	灯明皿	1T27層	(11.1)	2.1	(4.7)			大2後	底部外面回転糸切痕
13	瀬戸美濃	天目茶碗	1T27層	—	(2.0)	(4.7)		鉄釉	大窯	削り出し高台
14	瀬戸美濃	播鉢	1T27層	—	(3.7)	—		錆釉	大1	櫛目は1単位7本以上
15	青花	碗	1T27層	—	(2.5)	—		透明釉		内外面に二重の界線
16	銅製品	銭貨	1T27層	直径2.5、厚さ0.1						
17	瀬戸美濃	端反皿	1T31層	(8.8)	2.1	(4.5)		灰釉	大2	削り出し高台
18	瀬戸美濃	播鉢	1T31・32層	—	(3.4)	—		錆釉	大2	櫛目は1単位9本以上
19	青磁	香炉	1T31・32層	—	(2.2)	—		淡青色釉		
20	土師器	かわらけ	2T1層	—	(2.0)	—			B2類	非ロクロ成形
21	瀬戸美濃	灯明皿	2T1層	—	(1.2)	—				
22	青花	碗	2T1層	—	(3.4)	—		透明釉	小野 F 群	内面に界線。外面に界線と文様
23	土師器	かわらけ	2T5層	(14.3)	(2.7)	—				非ロクロ成形。口縁部にタール付着
24	土師器	かわらけ	2T5層	(7.2)	2.2	—			C1類	非ロクロ成形
25	瀬戸美濃	丸皿	2T5層	—	(1.9)	—		灰釉	大1～2	
26	青花	皿	2T5層	—	(1.7)	—		透明釉	小野 B1群	外面に界線と文様
27	銅製品	銭貨	2T5層	直径2.5、厚さ0.1						永楽通宝
28	土師器	かわらけ	2T18層	—	(1.9)	—			B2類	非ロクロ成形
29	土師器	かわらけ	2T18層	—	1.8	—			B2類	非ロクロ成形
30	土師器	かわらけ	2T21層	—	(2.2)	—			B2類	非ロクロ成形
31	灰釉系陶器	碗	2T21層	—	(1.2)	(5.0)			生田2	東濃型。底部外面回転糸切痕
32	瀬戸美濃	緑釉小皿	2T21層	—	(1.2)	—		鉄釉	古瀬戸後	底部外面回転糸切痕
33	瀬戸美濃	天目茶碗	2T21層	—	(3.5)	—		鉄釉	大3	
34	瀬戸美濃	播鉢	2T21層	—	(4.5)	—		錆釉	大3	櫛目は1単位6本以上
35	銅製品	銭貨	2T21層	直径2.2、厚さ0.1						
36	土師器	かわらけ	2T21・24層	—	(1.9)	—			B2類	非ロクロ成形
37	土師器	かわらけ	2T21・24層	—	(2.0)	—			B2類	非ロクロ成形
38	灰釉系陶器	碗	2T21・24層	—	(2.4)	—			脇之島3	東濃型
39	瀬戸美濃	端反皿	2T21・24層	(11.0)	2.5	(6.0)		灰釉	大2	削り出し高台。高台内にトチン痕
40	瀬戸美濃	灯明皿	2T21・24層	—	(1.1)	—			大3後	
41	白磁	端反皿	2T21・24層	—	(1.0)	—		透明釉	16C	
42	青花	罍皿	2T22層	—	(1.1)	—		透明釉	16C 後	内面に二重の界線と文様。外面に界線
43	青花	碗	2T22層	—	(1.9)	(4.0)		透明釉		内面、外面に二重の界線、文様。釉のカキオトシ
44	鉄製品	釘	2T22層	長さ12.1、横幅0.6、厚み0.5						
45	土師器	かわらけ	2T27層	(7.8)	1.8	(3.6)				ロクロ成形。口縁部にタール付着。底部外面回転糸切痕
46	土師器	かわらけ	2T27層	(12.2)	2.1	(7.0)			B1類	非ロクロ成形。口縁部にタール付着
47	土師器	かわらけ	2T27層	(8.9)	1.9	(2.8)			B2類	非ロクロ成形
48	土師器	かわらけ	2T27層	(13.6)	2.3	(6.3)			B2類	非ロクロ成形
49	土師器	かわらけ	2T27層	(10.2)	(1.7)	—			B2類	非ロクロ成形。口縁部にタール付着
50	瀬戸美濃	播鉢	2T27層	(34.0)	(9.8)	—		錆釉	大4前	櫛目は1単位14本
51	土師器	かわらけ	3T14層	(11.0)	(2.2)	—			B1類	非ロクロ成形
52	土師器	かわらけ	3T14層	—	(2.5)	—			B1類	非ロクロ成形。内面に煤付着
53	瀬戸美濃	折縁皿	3T14層	—	(1.5)	—		灰釉	大4後	
54	瀬戸美濃	小天目茶碗	3T14層	(7.6)	(3.1)	—		鉄釉	大3前	
55	青花	皿	3T14層	(11.9)	(2.2)	—		透明釉	小野 C 群	内面に二重の界線、花。外面に二重の界線、花、唐草
56	銅製品	銭貨	3T14層	直径2.1、厚さ0.1						
57	土師器	かわらけ	3T14・17層	(10.6)	2.7	4.5				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕
58	土師器	かわらけ	3T14・17層	(12.5)	3.2	5.2				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕。口縁部にタール付着
59	土師器	かわらけ	3T14・17層	(15.8)	3.1	(5.0)			B2類	非ロクロ成形
60	瀬戸美濃	播鉢	3T14・17層	—	(3.1)	—		錆釉	大2後	櫛目は1単位2本以上
61	備前	大皿	4T1層	—	(2.6)	—			乗岡 I b 期	
62	土師器	かわらけ	4T12層	(13.5)	2.7	(5.7)				ロクロ成形。底部外面回転糸切痕。口縁部にタール付着
63	瀬戸美濃	丸皿	4T12層	9.6	2.6	6.4		灰釉	大3	削り込み高台
64	瀬戸美濃	甕皿	4T12層	—	1.6	—		灰釉	大4前～後	
65	瀬戸美濃	天目茶碗	4T12層	—	(2.7)	—		鉄釉	大3	
66	瀬戸美濃	黄瀬戸鉢	4T12層	—	(3.0)	—			大4	
67	瀬戸美濃	播鉢	4T12層	—	(4.9)	—		錆釉	大3前	櫛目は1単位17本
68	白磁	皿	4T12層	(12.8)	(1.7)	—		透明釉	16C	
69	白磁	小坏	4T27層	(7.3)	(2.8)	—		白色釉	16C	
70	瀬戸美濃	播鉢	4T32層	—	(2.7)	—		錆釉	大2後	櫛目は1単位5本以上
71	瀬戸美濃	播鉢	4T32層	—	(3.7)	—		錆釉	大3後	櫛目は1単位6本以上
72	瀬戸美濃	緑釉小皿	5・6T1層	(10.9)	(1.6)	—		鉄釉	大1	
73	瀬戸美濃	丸皿	5T1層	—	(1.9)	(5.5)		灰釉	大窯	付高台
74	瀬戸美濃	天目茶碗	5T1層	(11.1)	(3.6)	—		鉄釉	大4前	
75	瀬戸美濃	小天目茶碗	5T1層	(6.3)	(2.2)	—		鉄釉	大4前	
76	瀬戸美濃	黄瀬戸向付	5T1層	—	(2.6)	—		灰釉	大4	
77	瀬戸美濃	向付	5T19・20層	—	(2.6)	(4.8)		灰釉	大窯	底部外面にはがし痕あり
78	瀬戸美濃	茶入	6T18層	—	(1.4)	(4.0)		灰釉	大窯	底部付近は露胎

表6 V区遺物観察表

第6節 石段部分（図55～62）

南Ⅱから枡形虎口へと続く石段部分は、来城者の増加に伴い利用頻度が増えたことや雨水の流れによって損壊が激しく登り降りがしにくい状況となっていた。美濃金山城跡整備委員会や美濃金山城跡を管理する「美濃金山城おまもりたい」との協議により来城者の利便性を高めるために石段を積み直すこととなったが、この石段に美濃金山城跡機能時の石段があるのかどうか不明な状態であった。また、平成19年度の発掘調査で検出された枡形虎口の門の礎石及び石垣の幅に比べ、石段の幅は半分程度であり、石段があった場合には現在の石段よりも幅が広がった可能性が考えられた。

石段部分の東側には堆積土が積もっているため、その堆積土下の石段の有無及び現存する石段が美濃金山城跡機能時のものかを確認するために発掘調査を行った。また、枡形虎口の南面に位置する石垣は現況では東側に位置する曲輪の端まで及んでいない（図56D 地点）ため、石垣が曲輪の端まで築かれているのか確認も行った。

1 トレンチ（図55・57）

地山面までは攪乱や現代の廃棄物を含む堆積土であり、西方向に向かってなだらかに下る地形となっている。4層は石段構築のための埋土であり、この部分の石段は現存していない。d 地点では細かな円礫やチャートが並んでいるが、面を揃えているわけではなく、チャートは間詰石等が落下したものも含まれる。平成19年度の調査で石垣際の門の礎石より南側には円礫が敷かれている状況が確認されていることから改変は入っているが、その一部と考えられる。また、北面石垣付近では、現地表面直下から80cm×40cmのチャート、径35cm程度の川原石が検出された。根石や構築土等の確認は行っていないが、これらは礎石等の可能性が考えられる。

石段部分（図58・60～62）

現存する石段から地形が変わる東側 C2～6地点まで掘削を行い、石段の有無の確認を行った。地表面より15～50cmで地山面及び岩盤面を検出した。堆積土は褐色の砂質土であり、瀬戸美濃産陶器を含む。堆積土は土層から積んだ様子もみられないことから廃城後に自然堆積したと考えられる。地山面に石段を据えるために地山や岩盤を加工した様子はみられず、石段脇に排水溝のような施設もみられなかった。

現在の石段部分は石材の下の土層を精査したところ、腐葉土や土のう袋をかんでいるものがあるほか、石材の大きさや天端がそろっていないものが多くみられる。地元の聞き取りによると、天守部分に以前あった建物を建てる際に歩きやすいように石段を積んだといわれ、改変が入っていることが分かったが、その範囲は不明である。

南面石垣（図56）

D 地点を検出したところ、8・9層の間に転落した石を検出したが、現存する石垣より南側には石垣の石材は確認されなかった。また、8層は裏込めではなく地山面であり、この面に石垣の石材を据えた場合、石垣の面がそろわないことから南面石垣は現存する部分までとなることが明らかとなった。その場合、石垣が構築された曲輪と石垣は約70cm 長さが合わない。石垣は曲輪を意識するよりも門の礎石と南側の礫敷部分までを意識して築かれたことが分かる。

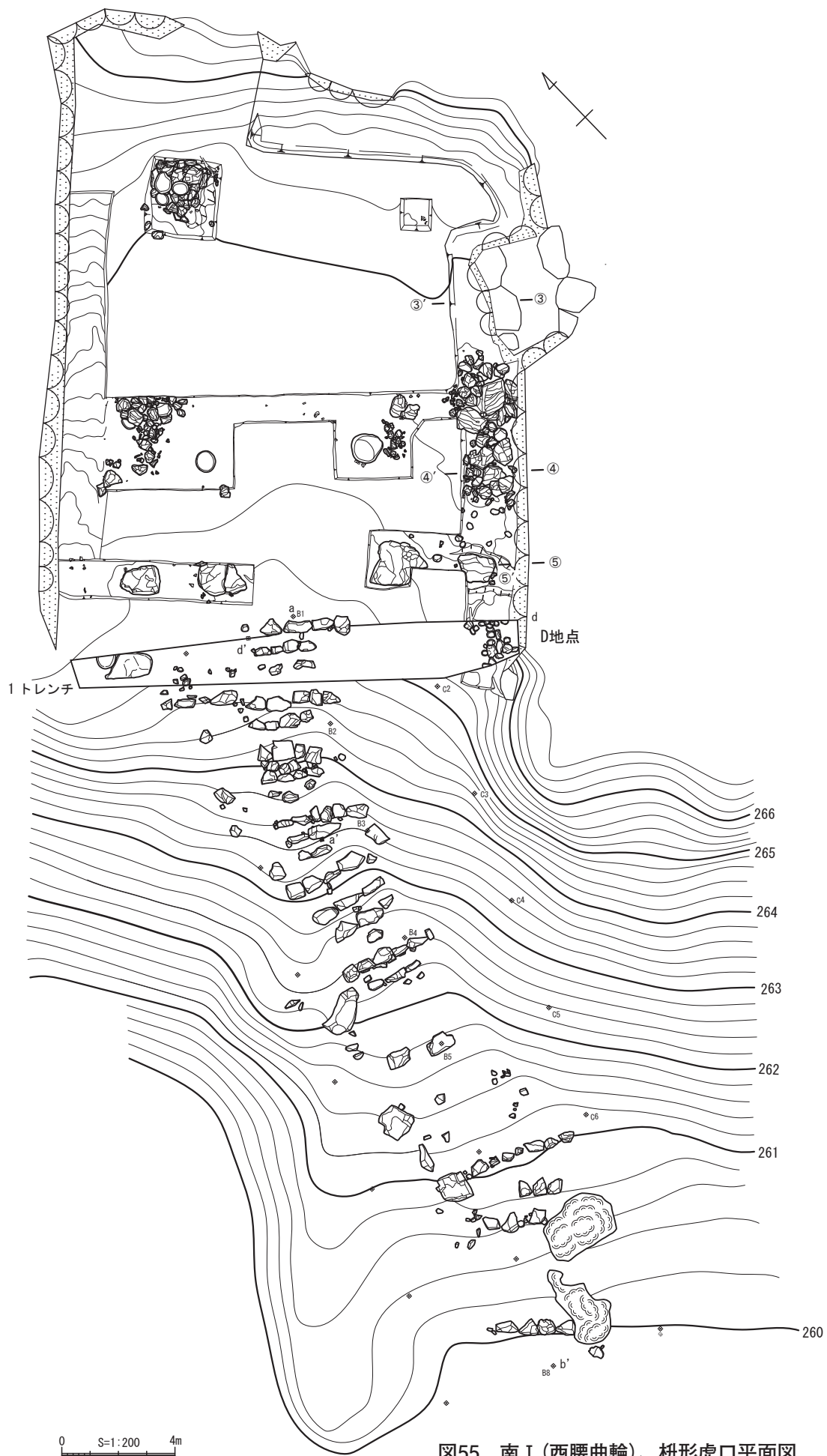


図55 南 I (西腰曲輪)、枡形虎口平面図

積み直し推定部分

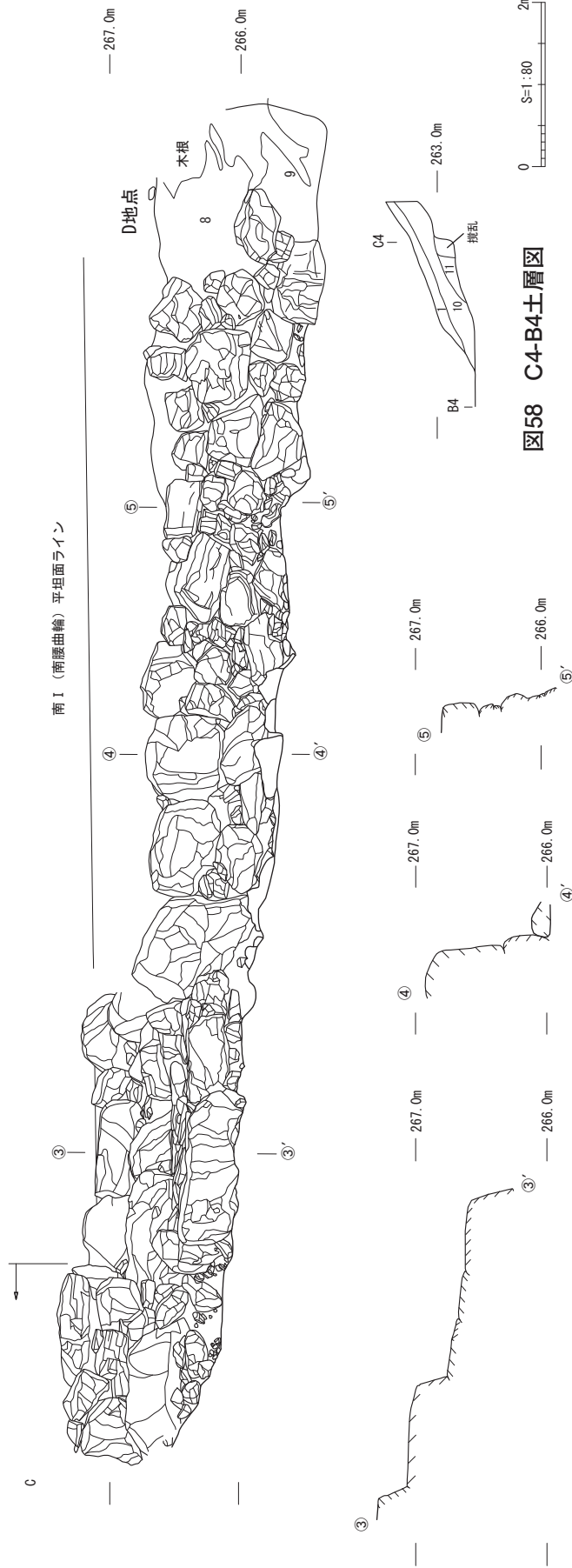


図56 枡形虎口 (南面) 立面・断面図

- 1 腐葉土
2 褐色土
3 明褐色土
4 にぶい黄褐色土
5 黄褐色土
6 明褐色土
7 暗灰黄色土
8 黄褐色土
9 褐色土
10 褐色土
11 明褐色土
- しまりあり 粘性あり
しまりあり 粘性あり
しまりあり 粘性強い
しまりあり 粘性強い
しまりあり 粘性強い
しまりあり 粘性強い
しまり強い 粘性あり
しまり強い 粘性強い
しまりあり 粘性強い
しまりあり 粘性強い
しまりあり 粘性強い
- φ5~20mmの礫を少量含む〔遺物を含む堆積土〕
φ5~20mmの礫を少量含む〔部分的に地山の土を含む堆積土〕
φ5~80mmの礫を少量含む〔石段の構築に伴う埋土〕
φ5~20mmの礫を少量含む〔遺物を含まない堆積土〕
φ5~20mmの礫をわずかに含む〔遺物を含む地山の再堆積土〕
φ5~20mmの礫を少量含む〔ゴミを含み、川原石や礫を含む堆積土。H19年度調査の埋め戻し。〕
φ100~200mmの礫を少量含む
下の石材が埋まてある部分までが石垣のあるラインでそれより堤側は石材はない
〔地山面。〕
φ50~80mmの礫を少量含む〔根カクラン層〕
φ5~20mmの礫を少量含む〔遺物を数点含む堆積土〕
φ5~20mmの礫を少量含む〔部分的に地山の流れ土を含む堆積土〕

図58 C4-B4土層図

図57 d-d'土層図

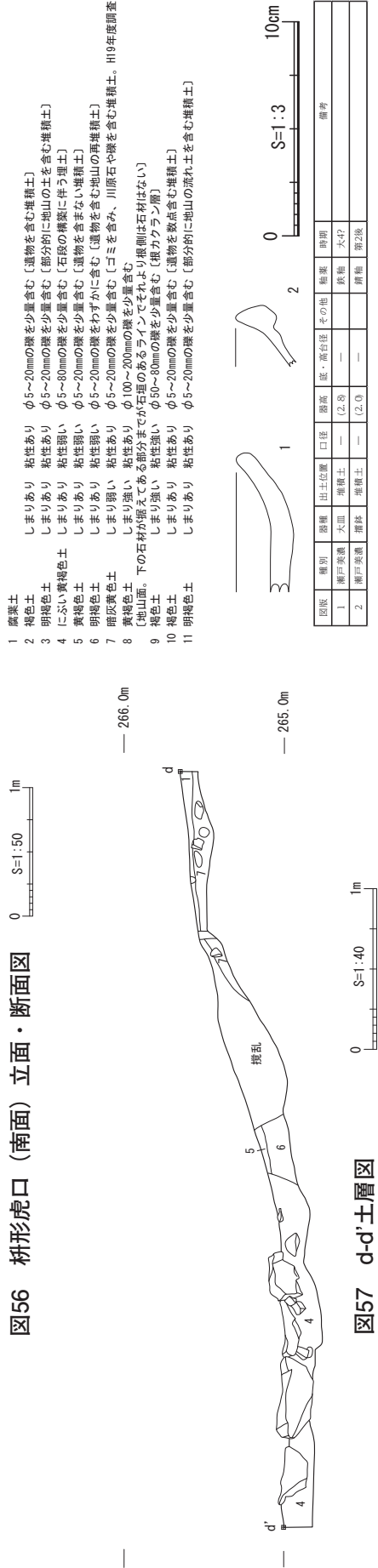


図59 石段部分出土遺物

図版	種別	器種	出土位置	口径	胎高	底・高台径	その他	輪郭	時期	備考
1	瀬戸灰青	大皿	堆積土	—	(2.0)	—	底縁	大4?	第2次	
2	瀬戸灰青	膳鉢	堆積土	—	(2.0)	—	底縁	第2次		

遺物（図59）

石段部分では播鉢5点、平瓦2点、鉄釉大皿1点が出土している。いずれも上方の曲輪から落ちてきたものと想定される。1は錆釉大皿であり、口縁部は丸みを帯びる。2は錆釉播鉢であり、口縁部が上方に伸び、下方にわずかにくぼみを有する。

まとめ

現在の石段で美濃金山城跡当時の石段が残っている部分は今回の調査では検出されなかった。また、石段に伴う排水溝などの施設もみられず、石段がなかった可能性も考えられる。ただ、現地形から城当時も斜面であった可能性が高く、斜面で登り降りが困難であるため、石段が存在していたことが想定される。大雨が降った場合にはこの石段部分には水の流れが集まることから土が削れたり、石段が動いたりすることが想定され、自然的にもまた先述したような人為的にも改変が入り、石段が滅失した可能性が考えられる。

東側の円礫部分は通路等の可能性があるが、部分的にしか確認されず、チャートも含まれ、面があまりそろっていないことから性格は不明である。また、1トレンチではチャートと川原石の礎石らしき石が検出され、層位から現在の門礎石より古い時期のものであることが確認された。ただ、これらと関連する礎石が検出されていないことは今後の枡形虎口部分を整備するときの課題となる。

（長江）

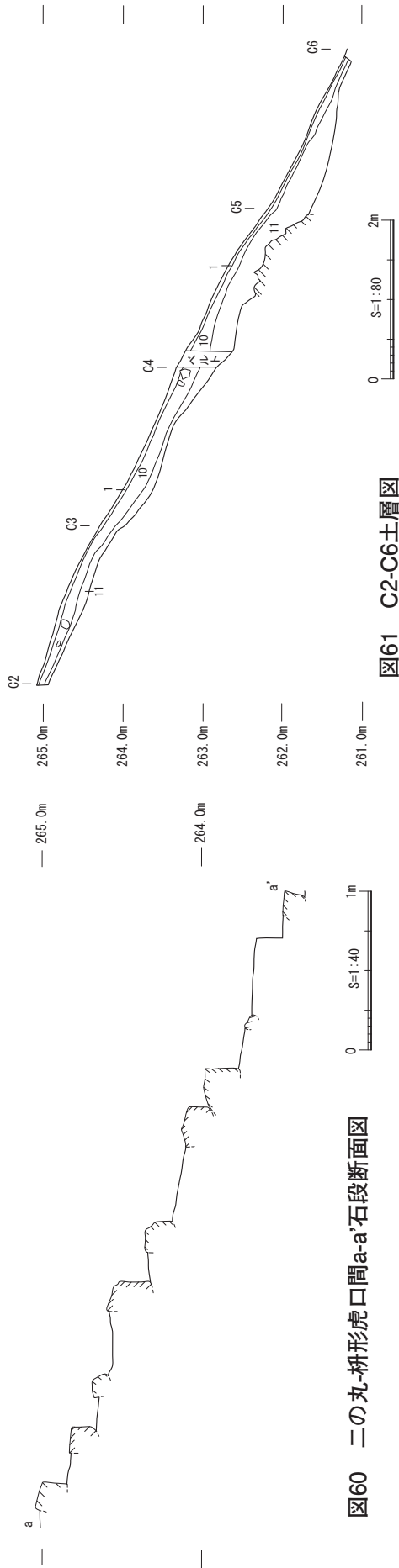


図60 二の丸-桁形虎口間a-a'石段断面図

図61 C2-C6土層図

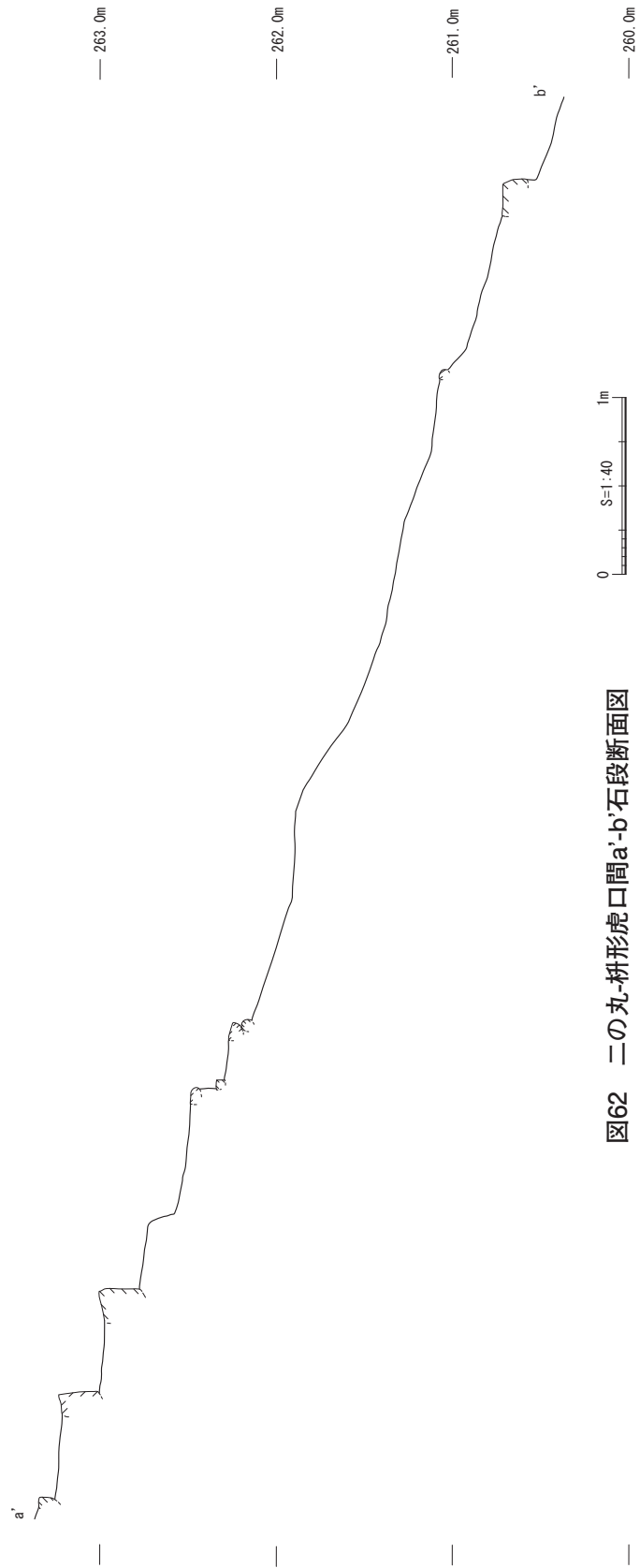


図62 二の丸-桁形虎口間a'-b'石段断面図

第3章 まとめ

第2章では、第6～9次調査において各地区で検出された遺構について述べ、主郭ではない石段部分はその節においてまとめを述べた。本章では、Ⅳ区を除く主郭の各地区の遺構及びその変遷について記述し、石垣や天守等の各様相について述べる。

第1節 検出された遺構について

1. Ⅰ・Ⅱ区

Ⅰ・Ⅱ区は調査の経緯から便宜的に区を分けているが、共通する土層も多く、天守と想定される範囲が両区にわたるため、まとめて記述する。調査により、三期に及ぶ時期変遷が明らかとなった。

第1期：地山面を中心に使用した段階（築城段階～大窯第3段階後半以前）

地山面（52層）を中心に使用した段階である。Ⅰ区では土坑 SK1と礎石 SB1、Ⅱ区では敷石状遺構 SX1・SX2が確認されている。基本的には地山面を掘り込むないし地山面直上に据えられているが、SB1は地山を部分的に整地した50層に据えられている。

遺構の時期は、SX2直上から大窯第3段階後半の天目茶碗が2点（図30-23・24）出土している点、SB1を据えている50層から大窯第2～3段階の鉄釉丸皿（図19-33）が出土している点から、大窯第3段階後半以前のいずれかの時期と想定することができる。また、この面及びⅠ区において第1期から第2期に至る盛土層（21・31層）からは瓦が出土していないこともあり、この時期には瓦葺建物が存在していなかった可能性が想定される。ただ、遺跡の保存の観点から調査面積が限られ、遺構がまとまりをもって検出されている訳ではないため、第1期における様相は不明な点が多い。

第2期：主郭全体を整地している段階（大窯第3段階後半以降～大窯第4段階）

Ⅰ・Ⅱ区全体に整地を行なっている段階である。Ⅰ区では21・31層上に内向き石垣 SV1・SV2、25層上に礎石建物 SB2、Ⅱ区では自然岩盤を掘りこんだ SK4、23・26・27・30層上に礎石建物 SB3、44層上に内向き石垣 SV3が確認されている。主郭の整地は、a-a' 土層図（図6）、c-c' 土層図（図8）に示した堆積状況から部分的に行われ、整地面においても礫の多寡や土のしまりの違いがみられるなどの状況がみられた。整地層は最大で25cmの高低差があり、整地面の高さを一定に揃えるという意識は希薄だったようである。

遺構の時期は、第1期に検出された遺構（SK1、SB1、SX2）を整地層によって埋めている点、SB2を据えた整地層（25層）から大窯第4段階前半の天目茶碗（図20-44）が出土している点から、大窯第4段階のいずれかの時期と想定することができる。ただ、SV1・SV2を築いた21層からは遺物が出土していないため、SV1・SV2が構築された時期を限定することは難しい。

第2期において構築されたSV1～SV3は、主郭内側に面を持ち、主郭を構成する外向き石垣に対応することから、この場所には半地下構造の天守に相当する建物の存在が想定された。整地面まで掘り下げたところ、整地面上では性格不明なSK2・SK3が検出されたのみで、礎石や柱穴は検出されなかった。ただ、整地面直上ないし21層より上層から瓦の小破片が多数出土している点、主郭で出土した瓦の大半がSV1・SV2付近に集中している点に鑑みると、SV1・SV2構築時の整地面上に瓦葺きの何らかの建物があったと考えるのが妥当であろう。その建物の範囲は、概ねSV1～SV3で区切られた範囲と考えられる。天守と想定される建物の範囲については別項で詳細を後述する。

また、同じく第2期で構築されたSB2は、第1次調査で検出された建物跡の礎石列と寸法が

近似していることから、主郭御殿と想定される礎石建物の一部と考えられる。そのため、従来想定されていた御殿の範囲が一間分東側に広がることが明らかとなった。

第3期：整地面上の遺構を埋めた段階（大窯第4段階）

整地面上の遺構が埋められた段階である。Ⅰ区では1・2トレンチを中心として、東西6.0m、南北2.7m以上の範囲に半球状に広がるように13・14層が堆積し、その上には1トレンチを中心に礫層である12層が堆積する。また、Ⅱ区では整地面を覆い隠すように15・16層が堆積している。

特に12層上面は、後世の建物が建てられたことにより部分的に改変を受けており、12層上面に遺構があった可能性がないわけではない。しかし、それぞれの層があくまで部分的な堆積にとどまり、整地面と考えるには高さが揃わない点や12～15層が1・2トレンチを中心に堆積し、天守と想定される半地下構造の建物の全体に及ばない点から考えると、ある段階の整地面とするには根拠が少ないように思われる。12層ないし15層に伴う遺物が大窯第4段階を下限とする瀬戸美濃産陶器（図19-1～4、図30-13～21）である点、12・15層の上に近世以降の地表面である7層が堆積している点も合わせて考えると、整地面上の遺構を埋める目的で行われたと考えるほうが妥当である。以上の点をもって、第3期は慶長6年（1601）前後の美濃金山城廃城に伴う破却行為の一工程ととらえることができよう。この点についても、別項にて改めて検討を行う。

（柴田）

2. Ⅲ区

主郭虎口であるⅢ区は二期の変遷は確認されたが、各時期の遺物の出土が少ないためそれぞれの時期を絞るのは難しい。

第1期（織豊期以前？・織豊期？）

地山面に礎石5・6を据え、主に6・7層で整地した段階であり、石垣は築かれていない。整地面から遺物が出土していないため、時期は言及できない。礎石5・6は礎石間が3.0mほど離れ、ともに角石で上に面を持つ。上面の高さは礎石6が礎石5よりもわずかに高く、同じ構築物に使用されたものかは定かでない。美濃金山城内で角石を礎石に用いる事例は、主郭や東Ⅵなどでも確認されている。礎石以外での遺構は確認されず、第1期での虎口の形態も不明である。

第2期：柵形虎口が構築された段階（織豊期）

主に5層で整地した時期である。この時期の整地層にはSB4とSV4・SV5が据えられている。5層は第1期の礎石を埋めており、角石の礎石を埋めて川原石の礎石を据える過程は主郭でも確認されている。

SB4を用いる構築物については、虎口内で対応するような礎石は検出されていないため、門など虎口内で完結する構築物は想定できない。また、主郭東側（Ⅰ区）から突き出す形となる懸造状の構築物に伴う礎石と想定することもできるが、Ⅰ区ではSB4と対応する礎石が検出されていないため、その様相については不明である。

SV4とSV5において調査前の観察では、SV5の築石がSV4の築石に付け足すように積まれていることから、構築に時期差があると推測された。そのため、2トレンチを設定したが、SV4の続きにあたる石垣は検出されなかった。SV4、SV5の順に構築されるが、両石垣の構築は同時期とみられる。これによりSB4、SV4、SV5は同時期とみられ、第2期に柵形虎口が形成されたと推定できる。整地土である5層から生田2号窯式の灰釉系陶器が出土しているが、遺物から時期を検討できていない。

（松原）

3. V区

V区は礎石等の露頭がみられず、木曽川方向に向かって標高が低くなる地形をしている。ここでは大窯第4段階を転機とする二期の変遷が確認された。

第1期（～大窯第4段階前半）

地山面を中心とした下層遺構面が機能した時期である。主郭西側は被熱された土坑（SK1）が検出されたことにより、この時期は御殿付近よりも1.0m 以上も更に低くなる地形をしていることが明らかとなった。また、地山面が東から西に下がっていく斜面地形であり、西側では簡易な鍛造などの鉄製品の加工や炭を焼くなどの機能を行った作業場であることが想定されるが、居住性のある建物があったとは想像しがたい。

東側でみられる礎石4はそれより西側には川原石の礎石がみられないことから、御殿との関連性が想定される。ただ、検出された各遺構がどのように組み合わせられ、機能していたかは不明な部分が多い。

土坑の埋土に大窯第3段階後半の遺物が出土し、下層遺構面を埋める造成土に大窯第4段階前半の遺物が包含されていることから、少なくとも大窯第3段階後半の時点では機能し、大窯第4段階前半には廃絶したと考えられる。

第2期（大窯第4段階）

上層遺構面が機能した時期である。土坑や石敷き、盛土遺構が確認された。SX3は礎石4を埋めてSX1を根固めのような役割として用いて構築した可能性があり、城内の他所で確認できない川原石を多量に包含している。このような特徴や御殿との位置関係を踏まえれば、SX3を庭園の築山としていたことも想定される。

V区の北側に位置するSV17（可児市教育委員会2013に掲載した主郭北側の石垣）との関連性は、図63からSV17は第1期面（下層遺構面）の上に盛土を行い、整地をするとともに構築されていると考えられ、上層遺構面形成と同時期であると想定される。将来的に4トレンチとSV17の間を調査できればこの点がより明らかになるであろう。

この時期は東側ではSX3など遺構はあるが、西側では遺構がみられない状況である。後世の改変も入っているため、遺構が滅失している可能性もあるが、現在のところ西側は何もない空間であった可能性も想定される。

前述のように、造成土に包含されている最も新しい遺物は大窯第4段階である。第2期は、大窯第4段階以降に成立し、機能していたと考えられる。

（佐藤）

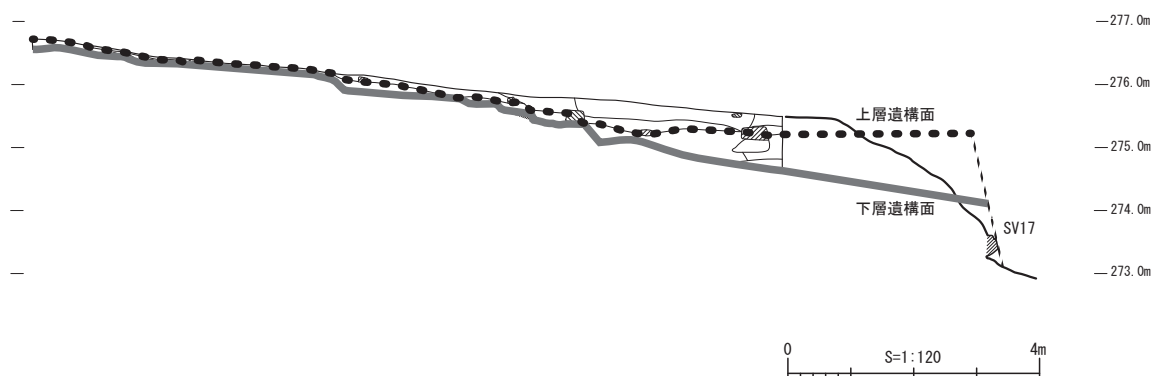


図63 V区とSV17の関連図

第2節 美濃金山城の石垣について

第1～5次調査において確認された美濃金山城の石垣は、地表面上で確認できるものが大半である。石垣は現在においても地上に露出しているため、城機能時ないし後世において何らかの手が加わっている可能性があり、現に桁形虎口など改変が入っている部分も見受けられる。石垣の構築時期を限定させるためには、発掘調査や石垣解体調査などを行う必要があり、第1～5次調査では、主郭Eトレンチにおいて主郭石垣SV20（可児市教育委員会2013に掲載した主郭の北西側の石垣）の前面で整地面を検出し、堆積土からの遺物により大窯第3段階以降に構築されたことが明らかとなった。しかし、その他には石垣の構築時期を明らかとすることを目的とした調査は行われていない。そのため、美濃金山城で確認された石垣の構築年代を考古学的に検討することは難しい状況にあった。

今回報告している第6～9次調査において、慶長6年（1601）前後の廃城の段階でⅠ区周辺を埋めたと考えられる層中から石垣SV1・SV2が検出されたことにより、美濃金山城において初めて考古学的に石垣構築年代の上限を押さえることができる基準資料となった。本節では、SV1・SV2を中心に据え、美濃金山城主郭の石垣の様相について検討を試みる。

SV1・SV2は整地面の標高276.5m付近を基準として築かれ、城内側に面を向ける。石材は自然石ないし粗割石で幅20cm～1.0mと大きさは不規則であるが、石材は比較的横長に用いられ、控えは短い。築石石材種は複数種類存在するものの、矢穴痕は見受けられない。裏込めはⅠ区4トレンチ及びⅢ区2トレンチから、10～20cm大の裏込石が土の層と交互に造成されていることが確認された。残存高は最高で約1.0mであり、廃城の際の破却を受けて天端は残っていない。主郭を囲む石垣と対応し、両石垣の高さから石垣上に半地下構造を有する建物があったことが想定されている。

石垣面における築石の形状は不規則であり、方形を呈しているものもあればそうでないものも含まれ、石垣の規格化を見出すことはできない。石垣面に使用されている築石は、平らな自然面と割面が混在し、築石の平滑面を前面に向けて据えられている。また、築石の間に大きく隙間が空いているために、間詰石や相石が多用されているのが特徴である。

石垣の変遷については下高大輔氏が、豊臣段階の城郭石垣を発掘調査で年代が把握できるものの、築城から廃城までが短期間で尚且つ文献史料で実年代が把握できるものに限定して、検討を行っている（下高2017）。下高氏は、豊臣段階の城郭石垣の石垣面の特徴を抽出し、以下のような変遷案を提示し、実年代を当てはめている。

Ⅰ期：平らな自然面に一部粗割面を石垣面に配置（例）安土城・大坂城・聚楽第・石垣山城

天正4（1574）～同18年（1590）

Ⅱ期：割面主体を石垣面に配置（例）名護屋城・機張城・西生浦城・指月伏見城

天正18・19（1590・1591）～文禄5年（1596）

Ⅲ期：平らな自然面と割面混在を石垣面に配置（例）木幡山伏見城・梁山城・蔚山城

文禄5・慶長元（1596）～同5年（1600）

調査で検出されたSV1・SV2の検出状況で大窯第3段階後半以降から廃城付近である1601年前後までと年代幅があり、下高氏が想定する変遷案をそのまま当てはめるのは難しいが、Ⅰ～Ⅲ期の石垣面の特徴と単純に比較すると、SV1・SV2はⅢ期の特徴に近い印象を受ける。

また、下高氏がⅢ期に挙げている石垣は、Ⅱ期段階の石垣が構造上の問題を抱えていたこと

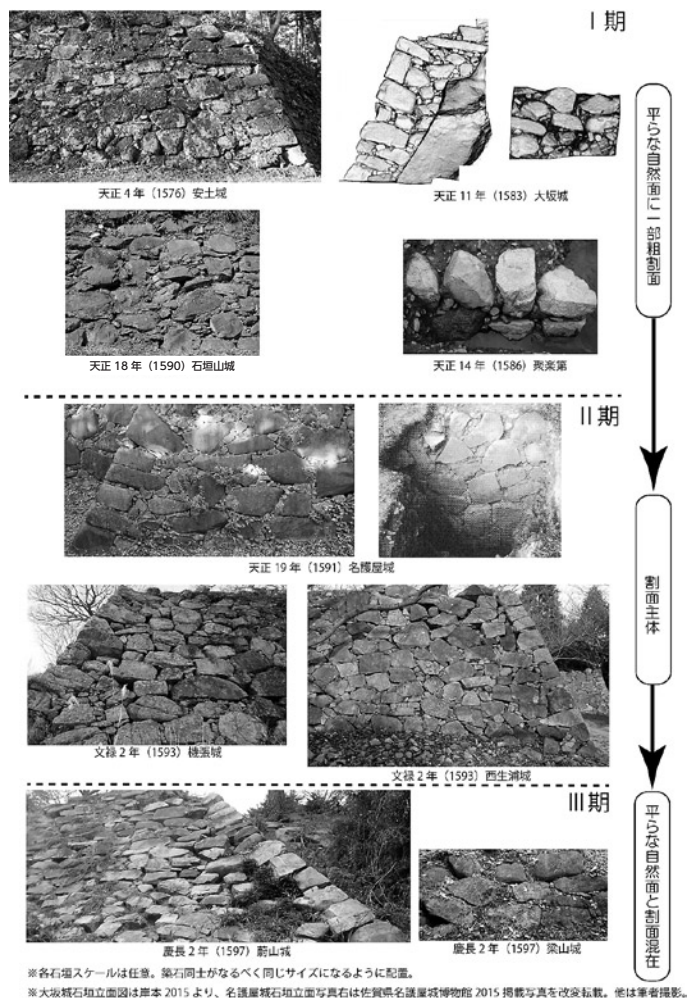


図64 豊臣城郭石垣の石垣面変遷（下高2017）

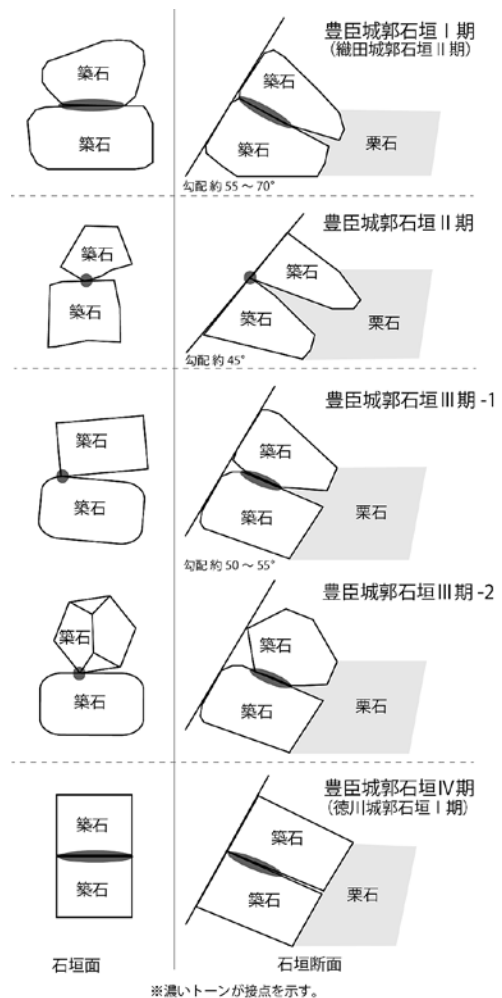


図65 豊臣城郭石垣の築石接点変遷モデル（下高2017）

への反省も踏まえ、築石の接地面を重視することにより、築石のみで自立できるような努力が行なわれているという。こうしたⅢ期の石垣は、一見するとⅠ期の石垣と同じいわゆる「野面積み」であるように見えるが、石材として築石よりも扱いやすい間詰石を多用し、施工の省力化が図られることから、Ⅰ・Ⅲ期それぞれで石垣面の印象が異なって見えるといわれる。

SV1・SV2は間詰石を多用している様相からもⅢ期に近く、Ⅰ・Ⅱ区を整地した第2期が大窯第4段階のいずれかの時期と想定されることからSV1・SV2の構築時期が天正段階ではなく文禄・慶長段階の可能性も十分あるといえるのではないだろうか。文禄・慶長段階と仮定した場合は、森忠政が城主だった時期にあたり、過去の調査で出土した桐文の瓦が葺かれていた建物があったことが想定される。SV1・SV2は半地下構造の建物を支えるためのもので、「見せる」という意識をもった石垣ではない。そのため、上部構造は不明な点も多いが、建物を最低限支える役割を担う造りでよかったのだろう。

今回報告した調査成果だけでは、石垣の構築年代や構築方法について明らかにすることは困難である。前述の点を解明する目的で意識的に調査を行い、検討を行うことが今後の課題となるだろう。

（柴田）

第3節 「天守」の範囲復元試案

I区を中心とする主郭東側の範囲は、昭和初期から天守があったと想定されていた。昭和48年に荒井金一氏が作成した『美濃金山城郭推定略図』（図66）にはその部分が「天守」、その西側が「天守台」として記述されている。平成29年度の第6次調査において、内向きに面を向けたSV1・SV2が検出され、天守と想定される半地下構造の瓦葺建物の内向き石垣が明らかとなった。しかし、その後のI区、II区の調査において内向き石垣内に礎石や柱穴等は検出されなかったため、建物構造そのものを把握するには至らなかった。

本節では、SV1・SV2をはじめ、これまでの調査で検出された遺構を基に半地下構造建物が構築されたと考えられる範囲（＝「天守」の範囲）について方法や基準を示しながら検討を行う。

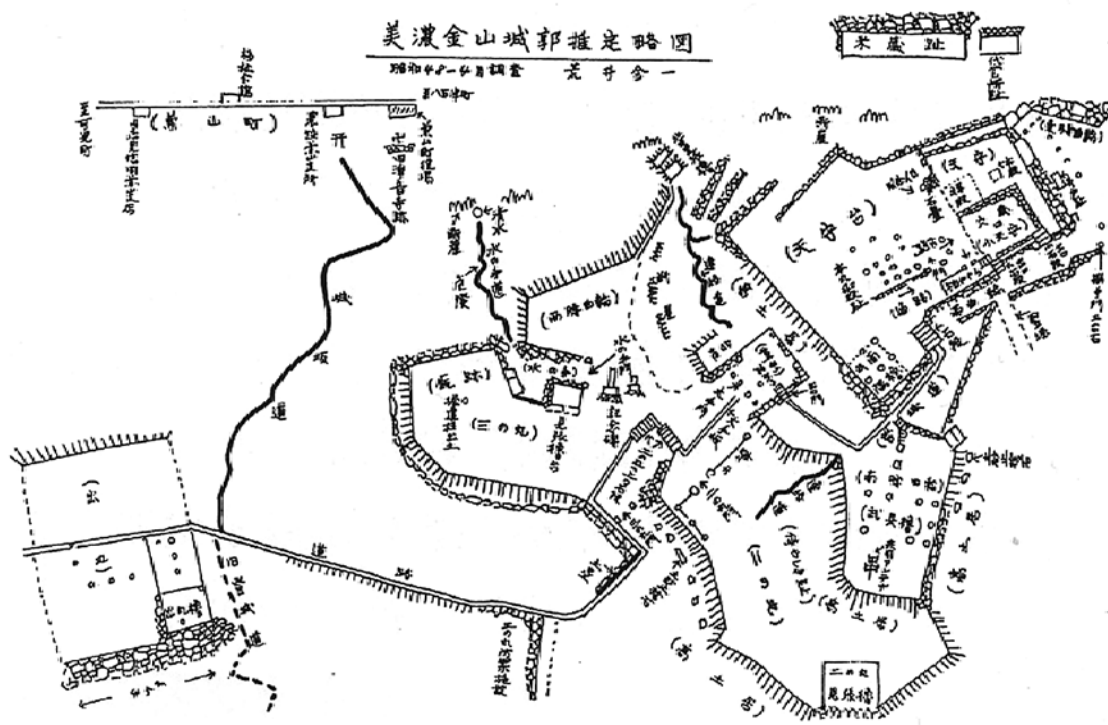


図66 美濃金山城跡推定略図

1. 検討方法

調査によって検出された「天守」の石垣は外側に面を向けるSV4・SV5・SV8（可児市教育委員会2013のSV1）・SV9（可児市教育委員会2013のSV22）と内側に面を向けるSV1～SV3である（図67）。これらは、第3章第1節に示した第2期に機能していた石垣である。ただ、石垣は廃城の際の破却行為によって天端が崩されている。また、北面のSV8・SV9は1～3段程度の築石が残存しているが、これまでの調査で根石を検出している訳ではないため、根石が埋まっている状況と想定される。

前述した状況を加味し、SV4・SV5・SV8・SV9の立面図及び断面図、SV1・SV2の立面図と断面図を用い、「天守」の規模を推定するために必要な要素である（1）石垣の高さ（＝天端の高さ）と（2）石垣の勾配、（3）隅部の位置から検討を行う。

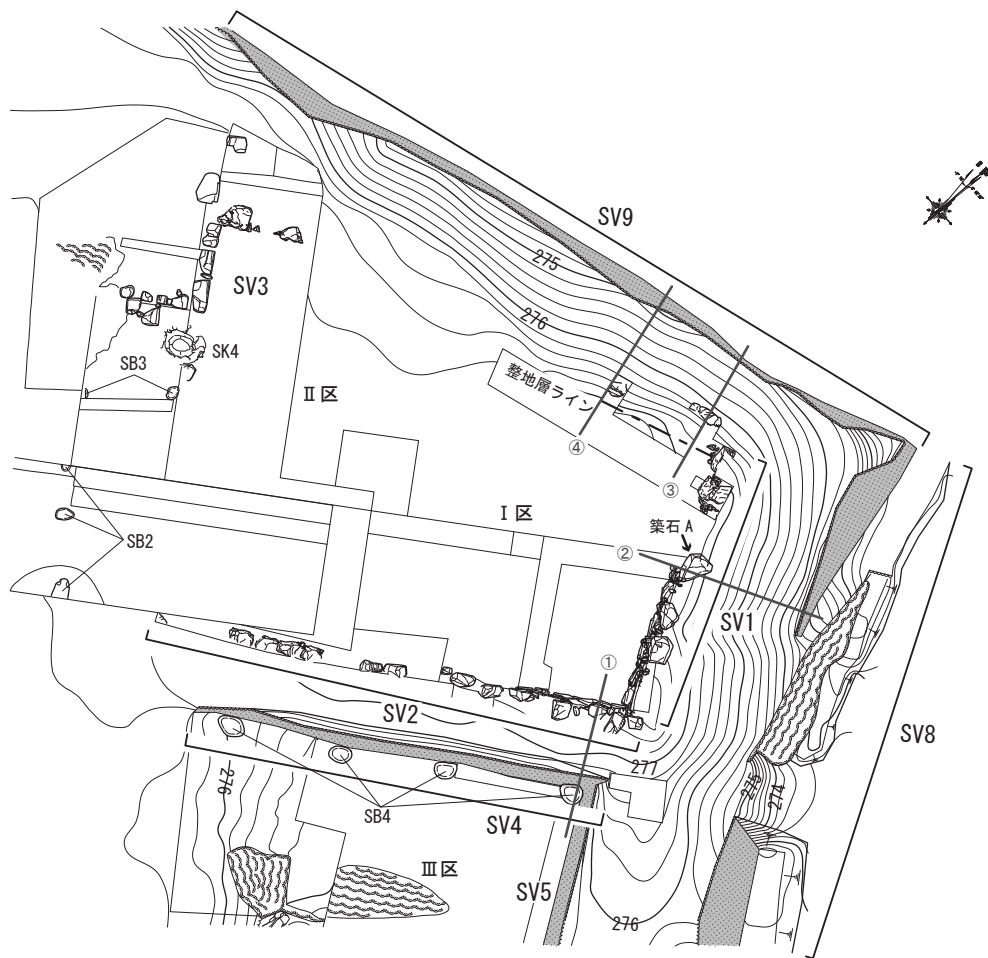


図67 断面位置図(第2期の遺構)

0 S=1:200 4m

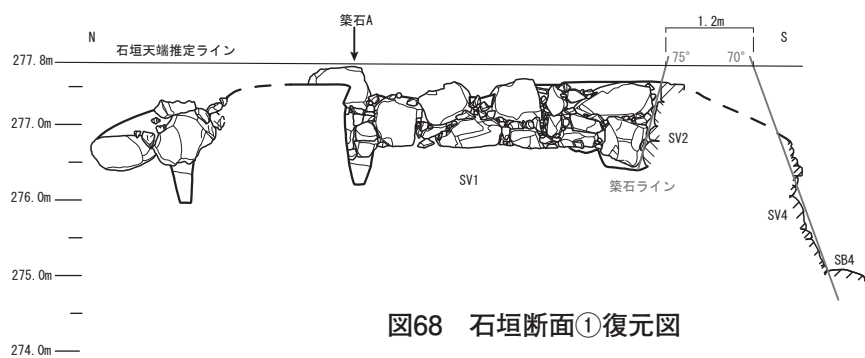


図68 石垣断面①復元図

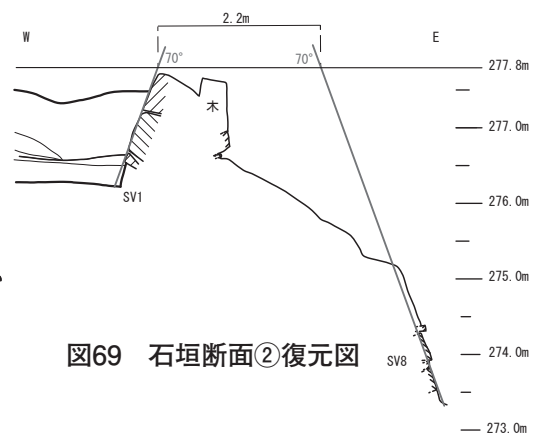


図69 石垣断面②復元図

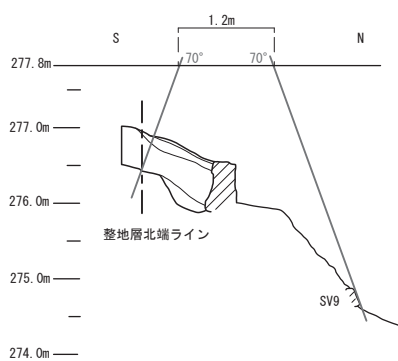


図70 石垣断面③復元図

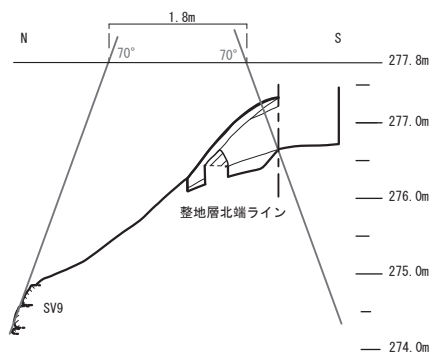


図71 石垣断面④復元図

0 S=1:100 2m

(1) 石垣の高さ

天端の高さについてはSV1中央部の築石Aを基準とする(図68)。天守台の範囲を復元している肥前名護屋城跡の事例(宮崎・市川2017)では、穴蔵内の礎石を基準に天端の平面規模を推定している。しかし、美濃金山城では礎石が検出されていないため、礎石をもとに平面規模を推定することはできない。築石Aは石垣の中で最も高いところに位置し、内向き石垣の天端として残っている可能性がある。この築石Aの頂部277.8mを基準とし、建物を安定させるために内向き石垣と外向き石垣の天端がそろうと仮定する。その場合、半地下構造の高さは天端と整地面から約1.0mとなる。

(2) 石垣の勾配

主郭を構成する石垣(第1次調査SV1～SV22)の残存部の勾配は、60度～80度前後であり、特に70度の勾配を持つものが多い。破却行為の影響で、残存率の低い石垣の勾配は正確性に欠ける場合もあるが、現存する石垣から勾配を70度で復元を行う。また、破却行為により石垣上部の欠落が激しい隅部の勾配についても同様とする。ただし、SV1・SV2に関しては残存状況が良いため、残存部から勾配をSV1は70度、SV2は75度とする(図68・69)。

(1)で定めた築石Aの高さ277.8mまで石垣の勾配に従い石垣断面図に延長線(「築石ライン」)を引き、石垣の天端部分における内向き石垣と外向き石垣との幅が明らかとなる(図68)。

(3) 隅部の位置

「天守」を構成する石垣の隅部は、内向きで4箇所、外向きで4箇所となる。検出された石垣の状況により、内向き石垣について南東部分はSV1、SV2の交点とし、北東部分はSV1と整地面北端、北西隅部分はSV3北角と北東隅部分を結んだ交点とした。南西隅部分はSV3の築石列の延長ラインとSV2の延長ラインの交点を隅とした。

外向きの4箇所は、北東隅のSV9は残りが悪く、残りの3箇所は石垣による隅部が形成されないため、(2)で検討を行った天端の上端幅を用いて、交差する点を隅部と推定した。

2. 復元試案

「天守」範囲の復元は北面と東面の外向き石垣について、一段築成の石垣と仮定して復元を試みている。この場合、北面と東面の外向き石垣の本来の高さは4.0mほどであったと推定される。ただ、美濃金山城内では、主郭北西部分や西Ⅱ南東部などの3.0mを超える石垣で、二段築成の石垣が確認されており、「天守」北面・東面でも二段の可能性が考えられるため、二段の可能性の検討を行ったのが図73～75である。この復元図は石垣の天端の高さや勾配の条件はそのままに、西ⅡSV3・SV4の調査成果(図72)から犬走りの幅を1.6mとして復元している。

東面で1箇所(図67②)、北面で2箇所(図67③・④)を基に復元すると、天端の幅が図73では0.6m、図74では-0.3m、図75では0.3mとなった。天端の幅が1.0mに満たない状態では、上面に建物を構築するのが難しいため、少なくとも北面は一段で石垣が築造されていたと推定される。また、北面と北東隅で交わる東面も幅が狭いため、同じく一段で築かれていたと考えるのが妥当であろう。

前述した(1)～(3)及び石垣が一段であることを基に「天守」部分の各四辺を整理し、平面図に反映する(図76)。

南辺

南辺はSV2とSV4で構成される。SV2は75度、SV4を70度で277.8mまで復元した（図68）。この時石垣上面に確保できる幅は、復元した箇所約1.2mとなる。

東辺

東辺はSV1とSV9で構成される。SV1、SV8ともに70度で277.8mまで復元した（図69）。また、虎口とSV9からの推定図（図78）では約2.5mであるため、石垣上面に確保できる幅は、2.2～2.5mとなる。

北辺

北辺は内向き石垣が検出されていないため、現存する整地層の端から70度の角度で立ち上げた（図70・71）。外向き石垣（SV9）は、南・東辺と同様に残存する築石から70度で277.8mまで延長した。石垣上面の幅は、断面③で1.2m、断面④で1.8mであった。

外向き石垣の北西隅は、SV3の西側に築石等がみられないことからSV3の北側延長ラインとSV9の上面復元ラインとの交点を範囲と想定した。また、内向き石垣の北西隅は内向き石垣の復元ラインと天守想定部に面を向けるSV3に接続させた。

西辺

西辺は「天守」に面を向けるSV3を内向き石垣のラインとした。南西隅はSV2の延長ラインとの交点を隅とした。西辺は外向き石垣が検出されていない点やSV3の延長線を境に、主郭礎石建物（SB2）に関する遺構が検出されていない点、SB3の整地面上に遺物が面的に出土した点などからも、この部分が何らかの区切りとなることが想定される。

以上の内容を整理すると、「天守」の復元規模は外側の辺の長さは東面約9.0m、西面約15.0m、南面約15.5m、北面約18.0mとなり、内側は東面約7.5m、西面約11.0m、南面約13.0m、北面約15.0mと想定される（図76～78）。外向き石垣と内向き石垣により形成される石垣上面の幅は約1.0～2.5mであり、西辺を除く三辺が形成される。西側はSV3より南側に築石がみられない点、礎石（SB3）の位置関係から、主郭側に向けて開口するような形が想定される。想像をたくましくすれば、西側の開口部分から入り半地下構造の約1.0mを階段等であがり、天端上に貼られた床に至ると想定される。ただ、Ⅰ区で礎石が検出されていないことや御殿と考えられる主郭礎石建物（SB2）との関連性については、不明瞭な点も多い。「天守」が御殿とつながっていたのか、あるいは独立していたのかという点についても、今後の調査等により解明していく必要がある。

3. SB4との関連

「天守」の南側、虎口内部（Ⅲ区）に4つの礎石から構成されるSB4が検出されている。SB4は、虎口内に対応する礎石が検出されていないことから、「天守」の半地下構造建物の張り出し部分等を支えていた礎石列と想定される（図76～78）。SB4を「天守」の範囲に加えた場合、図76のように、南へ広がることになる。広がった場合の建物の範囲は最大で、東面約10.0m、西面約16.0m、南面約13.0m、北面約14.0mと推定され、虎口側へ突き出すような形となる。櫓を礎石と石垣（石塁）で支える構造は、安土城伝本丸跡などでみられ、「天守」

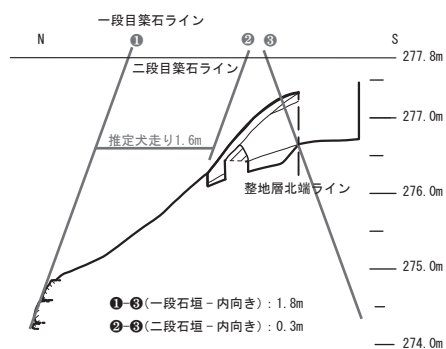
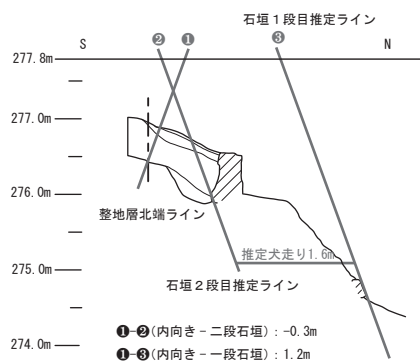
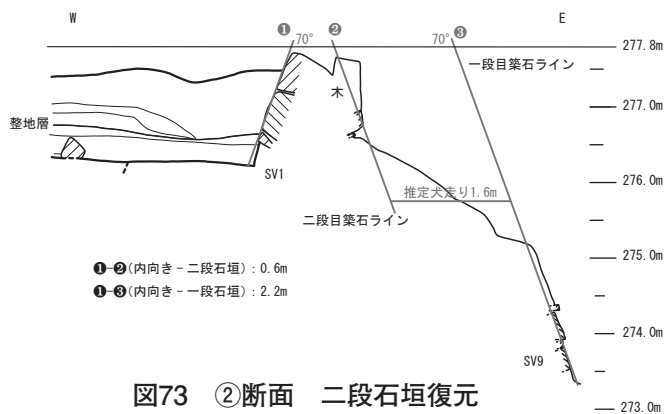
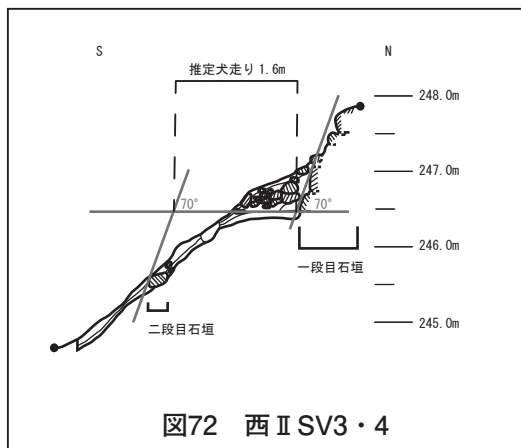
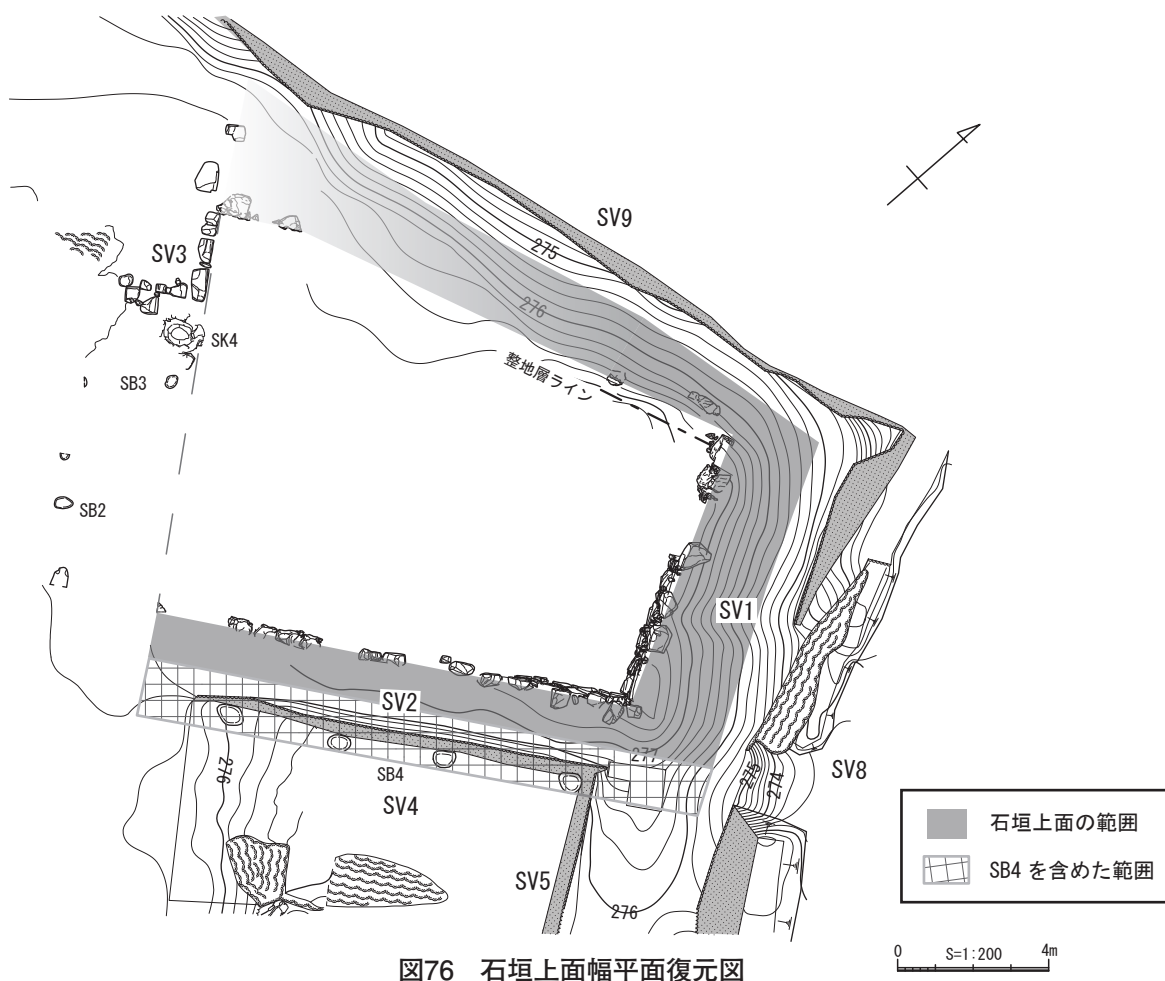


図 72 ～ 75 : 0 S=1:100 2m



の南面を礎石と石垣で支えていた時期があったと想定される。

(松原)

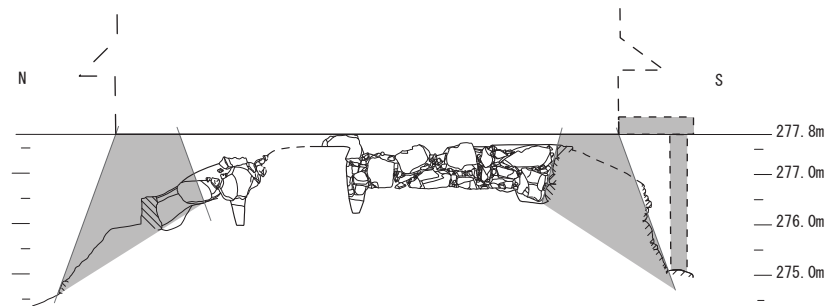


図77 石垣復元図（西より）

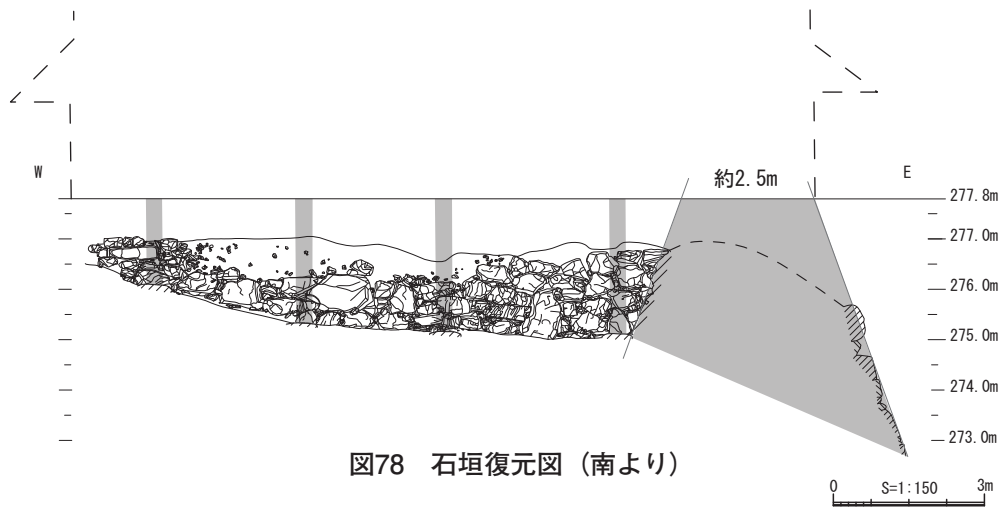


図78 石垣復元図（南より）

第4節 美濃金山城廃城に伴う破却行為（図79）

I・II区で第3期とした整地面埋土が、慶長6年（1601）前後の美濃金山城廃城に伴う破却行為の一工程の可能性が高いことは、第4章第1節において指摘した。本項では、前述の点を踏まえながら、美濃金山城廃城時に伴う破却行為の一端について検討を試みる。

既に述べた通り、整地面埋土にはいくつかの単位が存在する。初めの段階として、I区中央のやや東よりに位置する場所に、東西3.6m×南北1.8m以上の範囲に半球状に広がるように14層が堆積する。この14層は白色ブロックが混じる固くしまった粘土質の土であるが、この層のみで整地面全体を覆い隠せているわけではなく、I区2トレンチや内向き石垣（SV1・SV2）付近にまでは14層が及んでいない。なお、II区の15層も14層と同様に固くしまった粘土質の土であるが、こちらは基本的に15層のみが整地面全体を覆い隠すように堆積している。

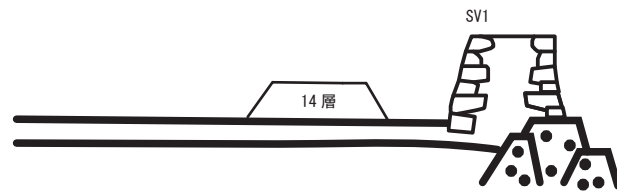
14層の上には、東西6.0m、南北2.7m以上の範囲に半球状に広がるように13層が堆積する。13層は14層よりも堆積の範囲が広く、I区1・2トレンチの大半をカバーしている。ただ、14層と同様に、石垣（SV1・SV2）付近にまで及んでいない。

13・14層の堆積により、I・II区の大半の整地面が覆い隠される。ただ、内向き石垣（SV1・SV2）付近まで及んでいないため、残された部分に12層が堆積する。12層は20～150mm大の礫が大半を占める礫層であるが、層中に築石を構成するような石材を見出すことはできなかった。また、I区6-2トレンチにおいて、北面の内向き石垣を構成したと考えられる石材が原位置を保っていない状況で検出され、その石材が動くのに連動する形で12層が斜め下方向に流れるように堆積している。このような点を鑑みると、石垣そのものの破却は、12～14層が堆積した後に行なわれたと想定される。

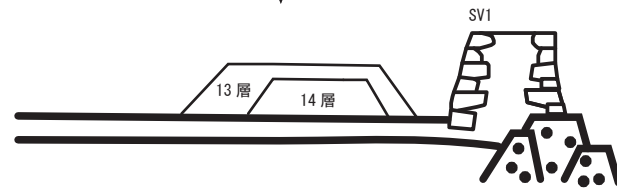
前述した点から石垣の破却は、まず外向きの石垣を崩し、その後に内向き石垣を下の曲輪に落としたと考えてよいだろう。SV1・SV2の内向き石垣は、結果的にではあるが整地面埋土及び内向きと外向き石垣の間の裏込めによって守られる形となり、外向き石垣と比して破却の影響は上部のみと限定的である。ただ、北面の内向き石垣は原位置を保っているものは一石も残されておらず、北面の外向き石垣も1、2石を残して崩されてしまっている。東面、南面の外向き石垣の残存状況からみれば、念入りに破却を行っていると言え、山麓の城下町から視認できる位置を重点的に破却したものと考えられる。

以上、美濃金山城廃城に伴う破却行為の様相について概観した。これまで各曲輪に構築された全ての石垣が何らかの破却行為を受けていたことが知られていたが、今回の調査により、整地面を埋めるといった形の破却が行われていたことが新たに明らかとなった。ただ、整地面を埋めるという行為は、主郭全体で普遍的にみられるわけではない。事実、I区9トレンチでは表土を剥ぐとすぐに建物の礎石が検出され、場所によっては調査前から露頭している礎石も存在した。また、石垣の破却度合いも石垣面によってバラツキがあり、主郭の東面や南IIの南面、西IIの南面、東VIの北面など城内の動線上にある石垣よりも遠方から見える部分を重点的に壊していると考えられる。これらの点は、廃城の際に全てを破却しているのではなく、重点的に破却すべき地点に労力を集中させた結果と捉えることができるだろう。

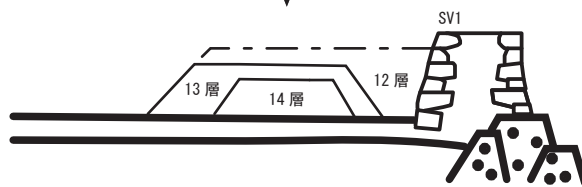
天守と想定される主郭の半地下構造の瓦葺建物が存在した箇所は他所では用いられていない土を運び入れて固く締めている。その後、石垣の裏込めにも用いられていないほどの大量の礫を入れている。美濃金山城跡には岩盤が多く露出するため、礫等の確保はできるであろうが、これら破却に至る行為は大きな労力であっただろう。この部分に限定的にみられる破却行為は、この箇所を再利用されたくないという強い意志を伺うことができる。（柴田）



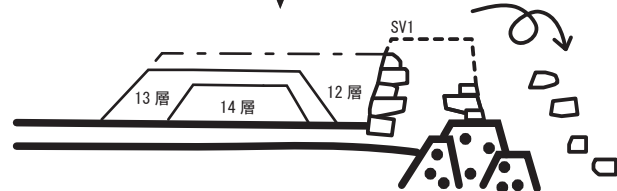
①14 層が入れられた段階



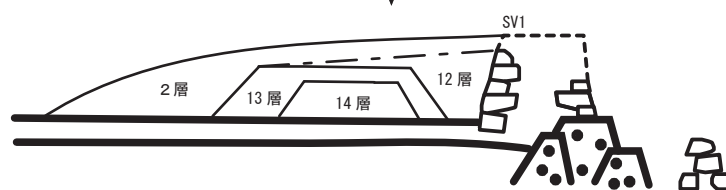
②13 層が入れられた段階



③12 層が入れられた段階



④石垣を破却した段階



⑤廃城以後の状況（昭和期以降）

図79 破却行為の工程模式図

第5節 遺物の出土状況からみた様相

調査面積の多寡や調査箇所によって遺物の多寡や傾向が異なることも考えられるが、Ⅰ～Ⅴ区の出土遺物について過去の調査も踏まえ、遺物組成及び出土状況を検討する（表7）。

1. 瀬戸美濃産陶器

Ⅰ・Ⅱ区は多くの遺物が10点未満である中、天目茶碗や筒形碗、播鉢などが多く出土している。種類別にみると、Ⅰ・Ⅱ区は碗類が多く、御殿部分やⅤ区は皿類が多い傾向がみられる。鉢類は主に播鉢であり、Ⅱ区、Ⅴ区、Ⅰ区の順に多く、北側石垣の堆積土からも多くの播鉢が出土し、廃棄されたことがうかがえる。Ⅰ・Ⅱ区では桃山陶や茶碗、黄瀬戸などの茶陶関係がみられることから天守と想定される半地下構造瓦葺建物や御殿で喫茶もしくは茶事をしていたことが想定される。また、Ⅴ区でも一定量の茶陶が出土していることからそのような機能があった建物等があった可能性も想定されるが、建物に関する遺構が確認されていないことや後述するかわらの出土量が多いことから廃棄に伴うものの可能性がある。

Ⅲ区は主郭虎口にあたり、Ⅳ区は遺構が確認されていない部分となるため、2箇所とも居住を伴うような建物がなかった空間となる。廃棄する行為も行われていないため、遺物は数点ずつしか出土していない。

2. 土師器

土師器はⅤ区で鍋と想定される破片が出土し、主郭の過去採集では内耳鍋や土鈴などもみられるが、そのほとんどがかわらけである。かわらけの出土量はⅠ区に比べ、Ⅱ区が多いが、調査面積が少ないⅤ区や北側石垣部分の出土量もかなり多い。

かわらけはロクロ成形と非ロクロ成形があり、細片であったり、摩耗しているものが多く出土しているが、製作技法を判別できたものの点数と割合は下記の通りである。

Ⅰ区	…ロクロ成形	75点（約68％）	非ロクロ成形	35点（約32％）
Ⅱ区	…ロクロ成形	216点（約74％）	非ロクロ成形	75点（約26％）
Ⅴ区	…ロクロ成形	401点（約73％）	非ロクロ成形	143点（約27％）
北側石垣部分	…ロクロ成形	365点（約59％）	非ロクロ成形	258点（約41％）
御殿部分	…ロクロ成形	76点（約18％）	非ロクロ成形	307点（約82％）

北側石垣部分は重さの割合ではロクロ成形が約70％を占め、Ⅰ区～北側石垣部分はロクロ成形が主体で用いられた、もしくは廃棄されていた様子がうかがえる。一方、平成18年度に調査を行った御殿部分では非ロクロ成形が多く、非ロクロ成形が主体となる。主郭全体では点数だけみると、ロクロ成形の方が多く、非ロクロ成形が少ない様子がうかがえる^{（註1）}。また、出土点数では調査により建物が検出されなかったⅤ区や廃棄されたと想定される北側石垣はロクロ成形の割合が多い。これはロクロ成形がハレの場等で使用され、建物外及び主郭外へ捨てられた可能性がある。天守と想定されるⅠ・Ⅱ区は陶器では碗類が多く出土することからも茶事等の際に数物としてロクロ成形があわせて用いられ、廃棄された可能性が想定される。これらロクロ成形の多さについて可見地域は大窯、連房式登窯が造られた窯業地であり、その影響が大きいとも考えられる。

過去採集では10トレンチ付近からかわらけの完形品が多く出土し、そのかわらけはロクロ

	かわらけ			その他土師 土師鍋	中国陶磁			灰釉製品										
	ロクロ	非ロクロ	不明		青花	白磁	青磁	丸皿	反皿	端反皿	ソギ皿	折縁皿	慶皿	皿類	灰釉丸碗	鉢・向付	徳利	壺・分甕
I区	75	35	75		1	6		7		4				2				1
II区	216	75	128		10	8		7		2		1		2	3	3	6	2
III区		1	2		4	1							1	2				
IV区		3	1		2	1		1		2								
V区	401	143	1558	1	14	23	1	33	7		1	1	1	6		5		13
御殿部分	76	307						7		6			1	23		2		1
北側石垣	365	258						3		1				3				4
虎口														1				

	鉄釉製品											桃山陶					
	丸皿	反皿	端反皿	縁釉小皿	皿類	天目茶碗	小天目茶碗	鉄釉丸碗	鉄釉平碗	筒形碗	大皿	徳利	鉢	壺・分甕	器種不明	瀬戸黒	黄瀬戸
I 区	2			5	2	19		2	2		1			1	4	2	3
II 区			1	1	1				1	28	1	8	10	2	1	23	
III 区														1			
IV 区				1		1								1		1	
V 区	8	2		2	3	38	5	6				1			10		5
御殿部分						19								1	4		
北側石垣	3		1	3		11		1				2			4	1	1
虎口															1		2

	陶器その他										瓦				その他		
	挿鉢	水指建水	茶入	灰釉茶陶器	灯明皿	祖母壇	四鉢	瀬戸美濃不明	備前	平瓦	丸瓦	軒丸	軒平	飾瓦	瓦片		
I 区	17		2	1	3	1	1	5		1583	201	10	4	3	102	焼き締め1、生焼碗高台1、土鈴1、炉壁、常滑甕1	
II 区	35			4 (尾張1)	3	4	3	3	3	154	21	4	1	1	1		
III 区	1			1			1	1		7	4			1		宝篋印塔片1	
IV 区	1							1		6					1		
V 区	24		3	14	21			14	2							焼き締め1、輪ドチ2	
御殿部分	9			3	8		1			39	3		2		2	焼き締め1	
北側石垣	17	1		4	1											焼き締め1	
虎口	1						1			17	8	1				焼き締め1	

	血類	碗類	挿鉢・盛類	鉢・向付類	黄瀬戸	壺・瓶類	備前	その他
I 区	22	25	18	1	3	6		16
II 区	15	55	36			18	3	11
V 区	64	49	24	5	5	4	2	72
御殿部分	37	19	9	2		1		17
北側石垣	14	12	17		1	2		14

※御殿部分、北側石垣について遺物の点数が可児市教育委員会2013と異なるのは場所をより限定し、再計測しているためである。

表 7 主郭出土遺物計測表

成形に比べ非ロクロ成形の割合が多い。平成18年度以降の調査で完形品に近いかわらけの出土が少ないため、この地点では「廃棄された」というよりは「置かれた」ような様相がうかがえる。また、御殿でのみ非ロクロ成形の出土量が多い。量が少ないことや出土状況から非ロクロ成形がロクロ成形より重宝されていた可能性がある。

かわらけの用途は「供膳具」や「灯明具」などが考えられ、かわらけにタールが付着するのはロクロ成形、非ロクロ成形ともにみられる。両者ともに口径7～12cmのものにタール痕が付着しているため、「灯明具」としてある程度の大きさの指標があったと想定されるが、付着しないかわらけと器形の違いはみられない。瀬戸美濃産陶器の灯明皿の点数がV区を除いて10点未満であることからかわらけが灯明皿としての役割を担っていたことがわかるが、大きさ以外の指標はないようである。また、タールが付着しないものの多くは「供膳具」として使用されたことが想定されるが、ロクロ成形、非ロクロ成形といった技法の違いや法量などに用途の違いは反映されていない。両者が混ざる地域であるからこそ今後ロクロ成形、非ロクロ成形による違いを解明していく必要がある^(註2)。

3. 瓦

瓦はⅠ・Ⅱ区から多く出土し、Ⅴ区では出土がみられなかった。美濃金山城の中では瓦が多く出土する場所は門があると想定される南Ⅰ（南腰曲輪）や東Ⅲ、集積もしくは加工を行ったような東Ⅳなどに限られる。また、東Ⅰの枡形遺構からも多くの瓦が出土することからⅠ・Ⅱ区の辺りに瓦葺建物があったことが想定される。また、Ⅰ区では瓦は21層より上層でしか出土せず、21層上面にも多くの瓦が細片で散らばっていた。この状況から破却に伴い、瓦葺建物を壊し、良いものは持ち出され、割れたものは細片となり放置されていたことが想定される。また、破却の際埋めたと考えられる12～14層にも細片の瓦が含まれるのもその結果によるものであろう。主郭の瓦は四方に造られた石垣の堆積土から出るものはやや残りが良いが、他の曲輪に比べ基本的に残存率は低く、図化できない細片が多い。破却の際に意図的に細片にしているような様相さえ伺える。

地区	トレンチ	出土地点	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	飾・道具瓦	不明
Ⅰ区	1トレンチ	廃城以後の堆積土	36	8	0	0	0	1
		遺構面埋土	222	52	2	3	1（輪違）	45
		遺構面直上	23	12	0	1	0	10
		1トレンチ合計（416）	281	72	2	4	1	56
	2トレンチ	廃城以後の堆積土	715	66	2	4	0	14
		遺構面埋土	174	36	0	0	0	26
		遺構面直上	109	6	0	0	0	4
		2トレンチ合計（1156）	998	108	2	4	0	44
	6トレンチ	廃城以後の堆積土	4	1	0	0	0	0
		遺構面埋土	4	11	0	0	0	0
		6トレンチ合計（20）	8	12	0	0	0	0
	7トレンチ	廃城以後の堆積土	213	3	0	0	0	3
		7トレンチ合計（219）	213	3	0	0	0	3
	8・9トレンチ	廃城以後の堆積土	15	2	0	1	0	0
		遺構面埋土	26	1	0	1	0	0
	8トレンチ	遺構面埋土	3	0	0	0	0	0
		廃城以後の堆積土	20	0	0	0	2（飾瓦）	0
		上面遺構面直上	14	2	0	0	0	0
		8・9トレンチ合計（87）	78	5	0	2	2	0
Ⅱ区		廃城以後の堆積土	137	20	1	2	0	1
		遺構面埋土	14	1	0	2	1（雨蓋瓦）	0
		上面遺構面直上	3	0	0	0	0	0
		Ⅱ区合計（182）	154	21	1	4	1	1
Ⅲ区		廃城以後の堆積土	5	5	0	0	1（飾瓦）	2
		Ⅲ区合計（13）	5	5	0	0	1	2
Ⅳ区		Ⅳ区合計（0）	0	0	0	0	0	0
Ⅴ区		Ⅴ区合計（0）	0	0	0	0	0	0

表8 各地区の瓦出土状況

出土した瓦には軒瓦や丸・平瓦のみならず飾瓦や輪違瓦、留蓋瓦とみられるものも確認されている。また、破片数では軒丸・軒平瓦と丸・平瓦との数量差は数十倍以上の開きがある。これらの点を踏まえれば、総瓦葺の屋根を持つ建物が存在した可能性も指摘できる。ただし、建物遺構に明確に伴う形で大量の瓦が出土していないため、例えば土塀に葺かれた可能性や、薨棟・熨斗棟に葺かれた可能性を否定はできない。

I区付近に存在した瓦葺建物の構築時期については『金山城跡発掘調査報告書』ではコビキBと桐文瓦の存在から、天正後期以降に美濃金山城に瓦葺建物が出現したとの見解を示した(可児市教育委員会2013)。I・II区では上下ある遺構面のうち上層である第2期の面にのみ瓦が伴い、それより下層からは瓦は出土していない。上層遺構面を形成する整地土の中に包含されている遺物の上限は大窯第3段階後半であることから、瓦葺建物の出現を大窯第3段階後半以降に求めることができる。これは『金山城跡発掘調査報告書』で示した見解と今回の調査結果とは整合している。ただ、上報告書の検討では過程について詳説できなかったため、先行研究や他遺跡の事例を確認しながら検討を加え、改めて検討を試みる。

美濃金山城では軒丸瓦・軒平瓦のいずれも法量の異なる大小2種類の範が認められ、丸瓦・平瓦もこれに対応するように大小2法量存在することを確認できる^(註3)(図80)。ただし、丸瓦凹面のコビキ痕や平瓦のナデ等の製作技法や胎土、焼成具合には顕著な相違を確認することができない。また、I・II区の発掘調査でも瓦が伴う遺構面は1面しか確認できず、瓦葺き替えの際に不要な瓦を処分するために構築する瓦廃棄土坑のような遺構は確認できなかった。したがって、美濃金山城に瓦が供給されたのは城の歴史の中で考えれば1次的な現象であると考えられる。

その上で年代観について考察する際に参考となる属性に、コビキ痕がある。コビキ痕は近世初頭にAからBへ移行することが森田克行氏によって明らかにされた(森田1984)。その後、山崎信二氏がコビキA→Bの変遷を全国的に検討し、その過程を4段階に分け、多くの地域でBへの転換が進むのは2・3段階目にあたる文禄3年(1594)～慶長6年(1601)頃であるとしている(山崎2008)。美濃金山城で出土している瓦に確認できるコビキ痕はすべてBであるから、素直に全国的な変遷と結びつけるのであれば、文禄3年頃以降の所産である可能性が高いと言えるであろう。

他にも年代観について考察する手掛かりに、軒瓦の文様がある^(註4)。ここでは特に桐文様をあしらった軒平瓦の記年銘資料と出土した城跡を概観する(図81)。

浄土寺(広島県尾道市)

美濃金山城が機能した時期の記年銘資料として、浄土寺のものが挙げられる。平瓦部分に「瓦大工又右衛門之作天正廿年壬辰六月初面十一日」とヘラガキされ、天正20年(1592)に製作されたことがうかがえる(山崎2008)。

八幡山城遺跡秀次館跡(滋賀県近江八幡市)

八幡山城遺跡秀次館跡では、2層ある遺構面のうち下層を覆うような状況で大量の瓦が出土している(近江八幡市ほか2002)。この瓦群には秀次が馬印としていた沢潟をあしらう飾瓦が含まれていたため、秀次が城主の築城時からのものを含む資料群と捉えられている(奈良2003)。八幡山城は天正13年(1585)～文禄4年(1595)頃の短い間のみ機能し、なおかつ瓦群は下層遺構面に伴っている点を踏まえると、その前の方に位置づけることができよう。そ

して、この瓦群で桐文をあしらった文様を持つのは鬼瓦のみである。

聚楽第跡（京都府京都市）

聚楽第跡では本丸東堀推定地の発掘調査で、本丸側からの堀の埋め土に包含される状況で大量の金箔瓦が出土している（京都府1993・森島1994）。聚楽第は天正15年（1587）に完成し、文禄4年（1595）には廃城となることが文献で確認され、当該資料群もこの年代観に位置づけることができる。そして、当該資料群で桐文をあしろうのは飾瓦のみである。

名護屋城跡（佐賀県唐津市）

名護屋城跡では城域の様々な場所で継続的な発掘調査が実施され、大量の瓦が出土している。三ノ丸第121調査で検出されたSK002は本丸大手門前に設けられ、名護屋城の建物を撤去する際に不要な瓦を捨てた廃棄土坑であると理解されている（佐賀県2012）。名護屋城は天正19年（1591）に築城されたと理解され、廃城時期については不明だが、SK002で共伴している土器の下限は16世紀末に求められる。資料群には桐文をあしらった軒平瓦が含まれている。

岡山城跡（岡山県岡山市）

岡山城跡では大量に出土した軒瓦の変遷、出土層位や他遺跡との同范関係に基づいて1～7式に分類し、それぞれに時期が当てはめられている。このうち、桐文をあしらった軒平瓦は2式（1592～1600）以降に位置づけられている（岡山市1997・乗岡2018）。

ここまでの検討で天正13年（1585）築城の八幡山城や天正15年（1587）築城の聚楽第の資料には桐文軒平瓦は含まれず、天正19年（1591）築城の名護屋城の資料には桐文軒平瓦が含まれることや、天正20年（1592）銘の資料の存在、そして岡山城跡における桐文軒平瓦の時期的な位置づけを確認してきた。紹介した事例にしたがえば、桐文をあしろう軒平瓦の出現は天正末年頃以降と考えられる。桐文の軒平瓦とコビキBから、美濃金山城での瓦葺建物出現はおおよそ文禄3年（1594）頃以降、遡ったとしても天正末年頃以降と位置づけることができる。この年代観は、瓦が確認される遺構面を形成する土の中に大窯第3段階後半の遺物が包含されている点とも矛盾しない。

4. 主郭における遺物の様相

主要な遺物からみた主郭の遺物の様相を概観する。遺物の時期幅は過去の調査と同様に今回の調査区でも大窯第1～4段階後半までとなり、大窯第3～4段階が主体となっている。その中でも第1節で示したように大窯第3段階後半が一つの転機となるような時期にあたる。

I・II区は天守があったと想定している場所であり、遺物の様相は似ている。ただ、I区はII区より陶器類が少なく、瓦が多い。これは天守想定部分の中心地がI区であり、この場所が生活空間でないことが分かる。II区は天守想定部分の範囲からやや外れ、生活空間に近い様相であることが想定される。ただ、II区は皿類よりも碗類が多く、ロクロ成形かわらけが多いという傾向があり、これは御殿部分よりもI区よりの組成であり、天守想定部分の範囲内と捉えることができる。SB3やSX2付近に遺物が面的に広がっていることやSV3からI区及びII区の南側は天守想定部分と御殿部分の一つの境になると考えられる場所を含んでいる。その境部分が含まれるが、I・II区は遺物の傾向からは同一の性格をもった場所であることが分かる。

この地区に瓦が集中することやV区や御殿部分では瓦がでないことから瓦葺建物は主郭内で場所を移すことなく、建てられた当初からこの場所にあったことが想定され、瓦の検討から出現時期は文禄3年（1594）頃以降、遡ったとしても天正末年頃以降と位置づけられる。

V区は被熱遺構や礫敷遺構が検出されているが、現時点で建物の痕跡はみつからない。遺物ではI・II区に比べ多くの点数が出土し、特にかわらけの細片の点数が非常に多い。被熱遺構が機能していた段階は、作業場等の空間として利用されていた可能性があるが、その後は整地面が確認されていることから不要な土器・陶器類を廃棄しつつ、整地した可能性が考えられる。今後の調査により第2期の整地面において建物が検出される可能性も考えられるが、現時点において御殿部分のような礎石等の露頭もみられない。他地区に比べ遺物の出土量が多いのは瓦葺建物や御殿が建っていた時期に何も建物がなく、日常的にもしくは廃城になった際に不要になった陶器類をこの場所に捨てた可能性が想定される。

美濃金山城が機能していた頃は東美濃では多くの窯跡が築かれ、藤澤良祐氏は城主と窯跡の関連性を指摘されている（愛知県史2007）。それは、本来製品として流通しないはずの窯道具（匣鉢、匣鉢蓋、トチ）が出土していることからもうかがいしることができる^{（註5）}近年、発掘調査を行った大萱古窯跡群の牟田洞窯跡、大萱窯下窯跡は美濃金山城跡で遺物が多くみられる大窯第3～4段階にあたる窯跡であり、同じ時期に機能していたことになる。両窯跡は桃山陶を焼いた窯跡として有名であるが、主要生産器種は折縁皿や丸皿、天目茶碗、播鉢である。在地向けに生産されている播鉢や数物としての天目茶碗、丸皿は美濃金山城跡でも一定量の出土がみられるが、窯場で多く焼かれている折縁皿は今回の調査ではほぼ出土していない。また、向付類の出土分布は洛中や堺環濠都市といった畿内の大都市圏からまとまって出土する傾向が認められ、それ以外の地域で清州城下町遺跡や岐阜城千疊敷遺跡などの尾張・美濃地方の都市でもあまり多くないことが知られており、美濃金山城でも生産地の近くでありながら向付類の出土点数は少ないといえる。

森氏が窯業生産に関与したという記録は残っていないが、窯で作られる陶器は在地向けのものは在地に売るが、消費地向けの桃山陶や折縁皿のような器種はその地域を治めていた領主であつても多くは手に入らなかったことがうかがえる。

（長江・佐藤）

註1 主郭以外の部分では非ロクロ成形のかわらけが多い傾向がある。

註2 東濃では、土岐市妻木城と瑞浪市小里城山城はロクロ成形のみが使用され、美濃金山城、久々利城、瑞浪市鶴ヶ城は非ロクロ成形とロクロ成形の両方が使用されている。

註3 各瓦の法量は、軒丸瓦小：瓦当径15cm 程、軒丸瓦大：瓦当径17cm 程。軒平瓦小：瓦当幅21cm 程、軒平瓦大：瓦当幅25cm 程。丸瓦小：長さ27cm 程、丸瓦大：長さ31cm 程。平瓦小：長さ28cm 程、平瓦大：長さ31cm 程。

註4 葉脈のある葉が三枚重なった文様も、「桐葉文（紋）」等として桐紋に含める立場もある（加藤1994・木戸1995など）。ただし、本稿では美濃金山城跡事例にみられるように葉と花が確認できる文様のみ桐紋とする黒田慶一氏の見解に従う（黒田1995）。

註5 妻木城、鶴ヶ城、小里城山城、久々利城でも窯道具が出土している。

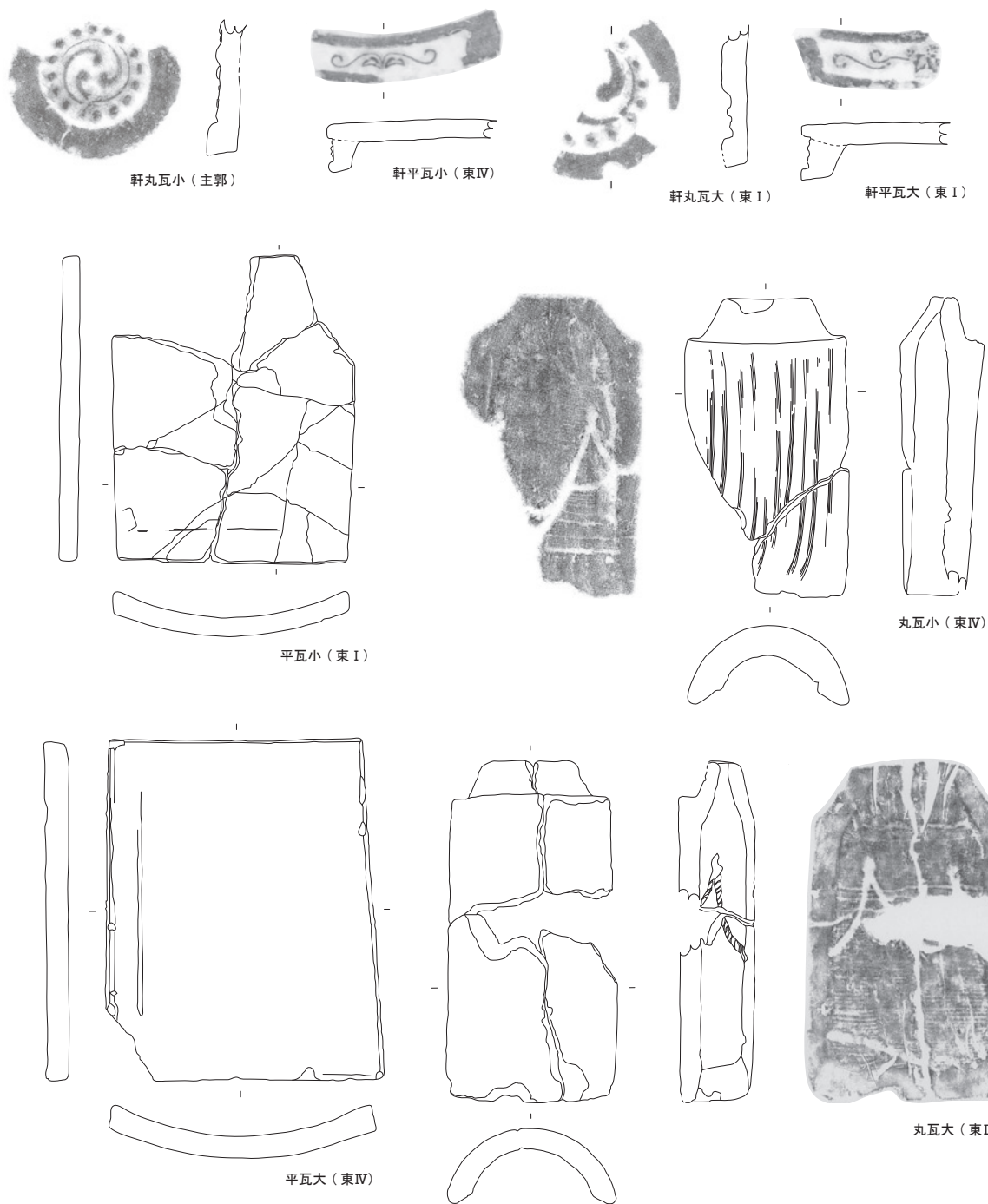


図 80 美濃金山城跡出土の軒・丸・平瓦

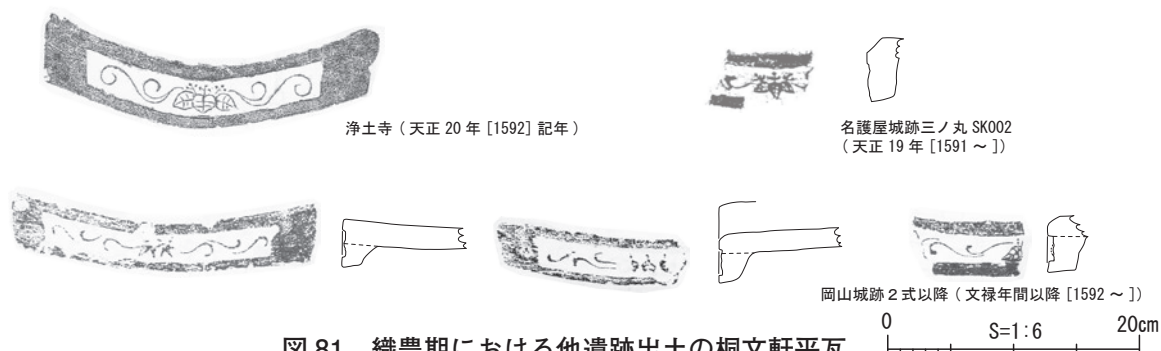


図 81 織豊期における他遺跡出土の桐文軒平瓦

※各遺物は下記の文献より引用し、再トレースした。
 可見市教育委員会 2013『金山城跡発掘調査報告書』
 山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社
 岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告書』
 佐賀県立名護屋城博物館 2012『名護屋城跡 - 三ノ丸 -』

第4章 総括

第1節 各地区の関連性

過去の調査に加え、平成29年度から令和元年度まで行ったⅠ～Ⅴ区の調査により主郭部分の全容がおぼろげながらみえてきた。Ⅳ区が虎口ではないと判断されたため、Ⅳ区を除き、平成18年度に調査を行った御殿、隅櫓部分を踏まえ、主郭各地区の時期変遷を示すと表9の通りとなる。これらをもとに主郭全体の変遷を概観する。

Ⅰ・Ⅱ区（天守想定部分） 1期 築城～大窯第3後半以前 2期 大窯第3後半～大窯第4 3期 大窯第4	Ⅲ区（主郭虎口部分） 1期 織豊期以前？織豊期？ （角石の礎石を使う段階） 2期 織豊期
Ⅴ区 1期 大窯第4前以前 2期 大窯第4以降	御殿及び隅櫓部分 1期 大窯第4前以前 2期 大窯第4以降

表9 各地区の変遷

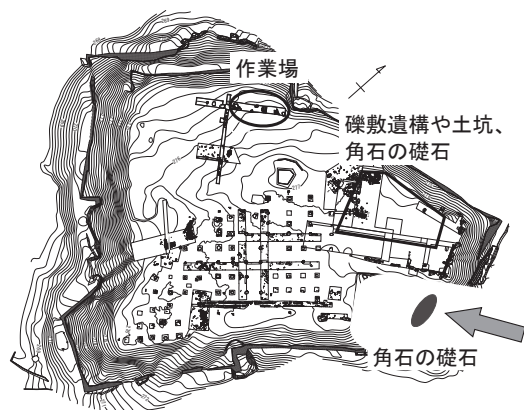
前期段階

Ⅰ・Ⅱ区及びⅤ区の1期はともに地山面に遺構を築く時期であり、石垣及び瓦葺建物もない時期となる。Ⅰ区は土坑や角石の礎石、Ⅴ区では被熱遺構と川原石の礎石が検出されている。また、Ⅲ区は時期を比定できる遺物が出土していないが、1期は川原石ではない角石の礎石を使用していることや虎口を囲む石垣が築かれていない段階であることが分かっている。角石の礎石は美濃金山城跡内では主郭の1期及び東Ⅵ（左近屋敷）^(註1)及び枳形虎口や東Ⅲの門跡と想定される遺構でみられる。川原石ではない角石の礎石の使用という点を重視した場合、Ⅰ・Ⅱ区の1期とⅢ区の1期は近い時期であることが想定され、主郭の各地区の1期は近い時期と考えられる。Ⅱ区では敷石状遺構（SX1・2）やSK4がみられることから、Ⅰ・Ⅱ区付近は14m×9m程度の範囲は最低限機能していたこととなる。

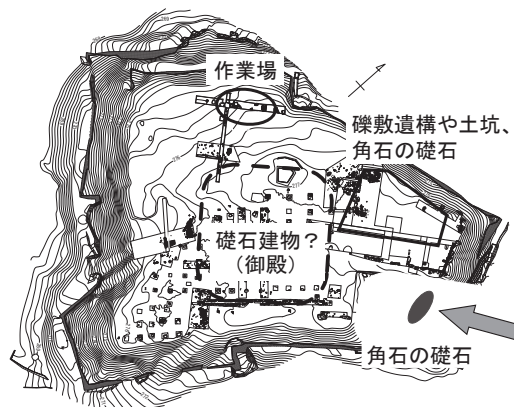
御殿部分は川原石を礎石とする建物で二時期の変遷が確認されており、2期の整地土から大窯第4段階前半の遺物が出ているため、1期と2期の境はその頃にあたる。礎石に川原石を使用するのはⅠ・Ⅱ区の2期以降にあたるため、礎石からみれば御殿部分には建物がなかったこととなるが、下層の川原石を使用した礎石建物が機能していた可能性も想定される。また、Ⅴ区で検出された地山面に据えられた川原石の礎石（礎石4）は、それより西側で関連性のある礎石がみられていないことから、御殿に伴う可能性が考えられる。礎石4の標高は約276.3mであり、御殿の上層の礎石が276.3～276.5m、下層の礎石が276.2m付近とどちらの標高も礎石4の高さに近いが、Ⅴ区の2期になると盛土により機能しなくなるため御殿の上層よりは下層の礎石建物に伴うと考えられる。その場合は御殿の範囲が礎石4付近まで広がっていたこととなる。

主郭への動線は不透明な部分があるが、Ⅳ区が虎口でないことから、Ⅲ区が唯一の虎口であることが想定される。虎口部分にはこの時期は石垣がないため、東Ⅰ（東腰曲輪）から直線的に登ることのできる構造であった可能性が高い。

前期段階



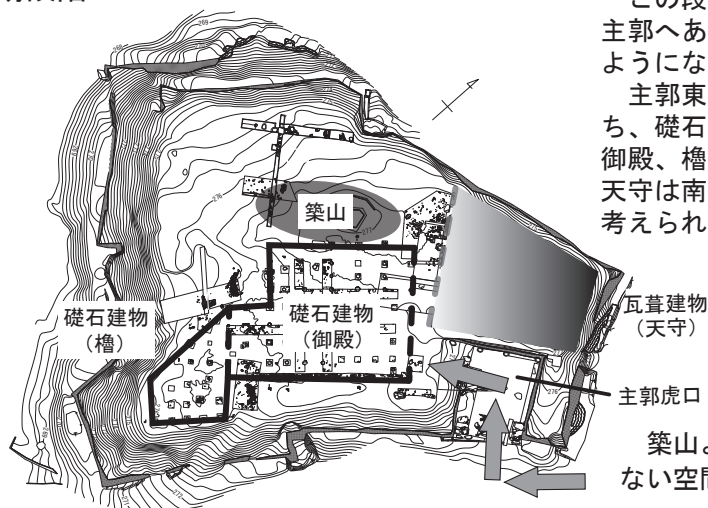
前期段階で確認されている遺構は少なく、それらの関連性は判明していないが、主郭の虎口部分は石垣の張り出しはない。



この段階に御殿部分の下層の礎石建物があつた可能性があるが、下層の礎石建物に伴う礎石の配列等は分かっていない。

礎石建物があつた場合、この場所が前期の中心であつたかもしれない。

中期段階

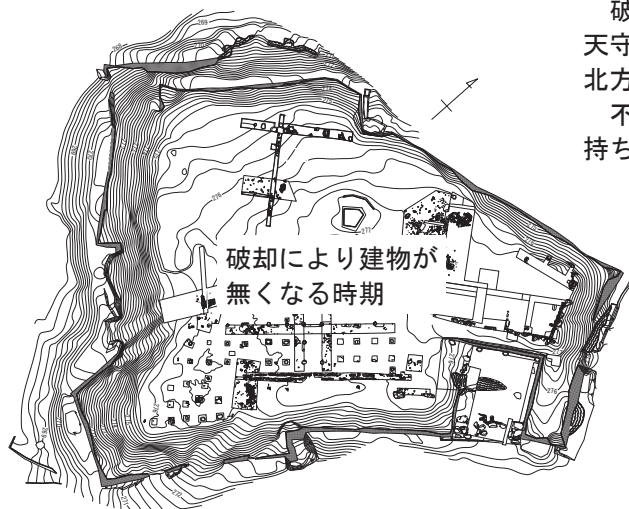


この段階に、石垣が四方に構築され、主郭へあがる虎口は折れ曲がって入るようになる。

主郭東側に天守相当の瓦葺建物が建ち、礎石建物として御殿、櫓が並ぶ。御殿、櫓、天守との接続部分は不明。天守は南側に一時期拡張した可能性が考えられる（天守南破線部分）。

築山より西側には遺構が広がっていない空間であつたと想定される。

後期段階



破却が行われ、主郭から建物がなくなる。天守部分は埋められ、天守台の石垣は東と北方向に落とされる。葺いていた瓦は、不要な破片は捨てられたが、それ以外は持ち出されている。

主郭は四方向とも石垣が落とされるが、遠方からみえる北側部分の石垣が重点的に落とされている。

図82 主郭変遷概念図

美濃金山城は1537年に烏峰城として築城したとされ、1600年前後に廃城になったといわれ、現在のところそれを遡ると考えられる明確な遺構は検出されていない。この段階は築城段階以降大窯第3段階後半以前と考えられる。

中期段階

この段階は天守と想定される東側部分に面を内に向ける石垣を築き、瓦葺建物があり、御殿及び櫓部分に川原石の礎石建物が展開する段階である。主郭外側の三方向には高さ約4.0mの一段の石垣が築かれ、西方向にのみ登城路を意識して三段の石垣が築かれる。

I・II区では前期段階から盛土が行われ、石垣を構築するための整地をし、石垣を構築する。内向きと外向きの石垣は連動して構築された可能性が考えられ^(註2)、それを土台として瓦葺建物が築かれている。内向き石垣は上部構造を支える用途であり、外向き石垣に比べやや雑な積み方がされるため、「見えない」ことが前提であったと考えられる。内向き石垣の高さは1.0m程度であり、穴蔵としては低すぎるため、半地下構造であろう。石垣を築いた整地面には瓦葺建物を支える礎石や柱穴が検出されておらず、抜き取り痕等も確認されていないため建物の構造については今後の課題となる。III区のSB4からこの建物には張り出した床等があったことも想定される。ただ、SB4が機能し、柱が立っていた場合、意匠性のある虎口の石垣が見えなくなるため、天守想定部分は中期段階のある時期に拡張したのかもしれない。虎口部分は南方向には張り出した石垣が構築され、直接主郭へ登ることのできないような構造になり、主郭の防御性を高めていることもうかがえる。

V区では上層の整地面が築かれるが、西方向には遺構がみられないため、何もない空間であったことが考えられる。また、東側では礎石4が機能していた時期後に盛土を行い、庭園の築山としていたことも想定される。

前期段階の御殿の礎石建物と半地下構造建物との関連性は不明な部分があるが、この段階には川原石を使用した礎石建物として御殿及び南西に隅櫓があり、主郭の南側には建物が展開していることとなる。隅櫓は断ち割り調査をしていないため、時期変遷が明らかとなっていないが、主郭の石垣構築に伴うものであることからこの時期に該当する可能性が高い。V区の築山が御殿の西限となり、東側に石組みの雨落ち溝が造られる。

第3章から内向き石垣は遅くとも文禄・慶長段階に構築され、瓦葺建物の出現時期は文禄3年(1594)頃以降、遡ったとしても天正末年頃以降と位置づけられる。それらから早くとも天正末年頃には城の最終形となる天守と想定される半地下構造をもつ瓦葺建物があったこととなる。この段階は大窯第3段階後半～大窯第4段階(～1600前後)、言い換えれば1590～1600年前後と考えられる。

後期段階

大窯第4段階、廃城となった時期である。第3章第4節でも触れたが、瓦葺建物を撤去後、破損したと考えられる不要な瓦の小破片は整地面に捨てられている。建物撤去後には盛土を行い、礫を詰め、石垣を落とす行為が行われるなど、天守と想定される部分は重点的に労力をかけて破却が行われる。また、主郭北面は城下から見えることを意識してか、内向き石垣がほぼ落とされているほか、外向き石垣についても多くの石が落とされている。これは城の中の石垣も同様であり、城内の動線上にある石垣よりも遠方から見える石垣を大きく破却している。

破却に関して御殿や櫓部分は上部を除かれたのみのようで、礎石は残されている。このこと

からも天守と想定される部分の破却は入念に行われたことが分かる。

主郭の調査から明らかとなった時期変遷を大きく三段階にわけて概観し、主郭全体のおおまかな流れをつかむことはできた。しかし、これらの段階がさらに細分されるべきことは明らかである。美濃金山城跡は森可成の時期には織田信長の東美濃支配の拠点となり、森長可の遺言状にあるように東美濃支配の「かなめ」となっていた事象がある。提示した三段階は前期段階の幅が長く、烏峰城当時の様相をつかむのは遺跡の保存の観点からも主郭で検討していくことは難しい。また、城の転換期でもある大窯第3段階、特に後半の中でさらに細かな考古学的検討をしていくとともに歴史的事象とどう関わっていくのか精査が求められる。

石垣や瓦の観点から中期段階の天守と想定される瓦葺建物が築かれたのは森忠政の段階と位置づけた。森忠政は天正17年（1589）に羽柴姓や桐文の使用が許されているため、中期段階と符合してくる。以前、高田徹氏は石垣隅角部の形態や主郭から出土するコビキB痕を留める丸瓦の存在から天正後期以降の森忠政によって整備された可能性が高いとすでに指摘（岐阜県教育委員会2004）しており、これまでの研究でなされた解釈とも矛盾しない。ただ、その段階に天守付近が一挙に整備されたとは想像しがたい部分もある。森長可の頃には家臣団の拡充とともに城下町が拡張し、登城口を森家の一族や家臣団が集住する殿町山麓の「大蔵」（現曲輪名称では「米蔵跡」）に設定したと考えられる^{（註3）}ため、城下町の整備をしていながら、山頂の城域の整備はされなかったのだろうか。いずれも想像の域をでないが、今回の調査の考古学的な検討により天正末年前後が美濃金山城跡にとっての大きな画期であることは明らかとなった。今後は主郭以外の曲輪を調査していくにあたり、各曲輪の関連性も含めながら考察していくことが課題となる。

また、天守と想定されるⅠ区部分に建物を支えるべき礎石が検出されなかったことは想定外のことであった。現地表面にみられるように御殿等にも多くの礎石を用いる城跡でありながら、天守と想定される部分には礎石が用いられていない。破却の際に丁寧に外された可能性も考えられるが、抜き取り痕やそれに代わる柱穴も検出されておらず、御殿部分での礎石の残りを考えるともとより礎石が無かったと考える方が自然であろう。織豊期にのみ機能した城で天守部分を調査できる城跡は少ないため、貴重な成果といえる。今後、各地の城跡の調査事例を見ていくとともに、検出された遺構で瓦を葺いた建物が建つのかどうか、美濃金山城跡の天守と想定される部分のあり方について考えていく必要がある。

（長江）

註1 東Ⅵの左近屋敷という名称は森可成に仕えていた細野左近との関連性が指摘され、城の中でも古い段階から機能していた曲輪と考えられる。

註2 Ⅰ区及びⅢ区の内向きと外向きの石垣間にあけたトレンチから裏込は石と土を用いており、土塊とともに面をつくりながら堆積している状況が確認されることから内向きと外向きの石垣は連動して構築されている可能性が高い。ただ、破却で壊されていることや積み直しの可能性もあることから確実とは言えない。

註3 『濃州徇行記』には、森家一族もしくは家臣団が居住した地域が「殿町」や「戸立」であったことが記されている。森長可は町場の整備として、魚屋町をつくり、町の移転なども行い、城下町を整備したと考えられる。

第2節 総括

国史跡美濃金山城跡の整備に伴う主郭の発掘調査は平成29年度より3ヶ年間実施してきた。遺構、遺物ともに大きな成果をあげたわけであるが、ここでは主郭東端の、天守台ではないかと考えられていた場所の調査成果の総括をおこないたい。

第1次調査では北端の石垣の構築状況を把握する目的で調査を実施したのであるが、東端部の北・東・南面から内面に面を持つ石垣が検出された。これによって主郭東端部は三方に石塁が巡る構造であったことが判明した。

調査の大きな目的のひとつにこの主郭東端部に天守が存在した可能性が高く、その痕跡を明らかにすることにあった。古くより現在の犬山城天守は美濃金山城の天守を移築したものと伝えられており、その伝承に何らかの答えを出すことも大きな目的のひとつであった。調査にとりかかってすぐに東端部の石垣内面が掘り下がることが判明し、石垣の内面から内側に面を持つ石塁が検出された。つまり主郭北端が半地下構造となる天守の存在した可能性が俄然高くなった。

このエリアは現代になって烏龍神社が建立され、地下遺構の残存状況が懸念されていたが、遺構面は破壊を受けることなく残存していることが判明した。ところが遺構面を検出したにも関わらず、礎石、掘立柱建物の痕跡は一切認められなかった。本報告では「伝天守」として復元も試みたが、決定的要素には欠けると言わざるを得ない。

総括としてここでは天守以外の構造も想定しておきたい。そもそも「伝天守台」を構成するのは外面石垣 SV4、SV5、SV7、SV8、SV9と、内面石垣 SV1、SV2、SV3である。これらの石垣はその特徴より天正期のものではなく、文禄・慶長期のものの可能性が高い。それは出土した桐文軒平瓦の年代が文禄3年（1594）以降と考えられることと一致する。おそらく現状に見る構造の美濃金山城の成立は森可成や森長可の時代のものではなく、森忠政の時代と考えられる。

ところで文禄年間の豊臣系列の城郭としては石垣、天守、瓦の存在は必要不可欠な要素ではあった。一方で文禄年間の城郭では美濃金山城のような石塁を設けた構造がみられる。例えば天正19年築城の肥前名護屋城では遊撃丸に石塁が認められるし、文禄3年頃の築城とみられる但馬竹田城でも花屋敷に石塁が築かれている。これらは土堀が構えられていたものとみられる。

さらに美濃金山城に類似する石塁として飛騨松倉城の本丸がある。松倉城については天正初年に飛騨の戦国大名三木氏によって築かれたとする説もあるが、巨石を用いた石垣や縄張り構造から天正13年（1585）に飛騨に入国した金森長近によって築かれた可能性が高い。その本丸は21m×20mの小規模なもので、あるいは天守台ともみられるものである。松倉城では令和2年から発掘調査が実施され、本丸もしくは天守台の四周に石塁の廻らされていたことは明らかになったのであるが、中心部分からは礎石、柱穴などの遺構が検出されなかった。この構造は美濃金山城「伝天守台」を考える場合重要な意味を持つ。

美濃金山城の主郭は広大で、「伝天守台」はその東端部の一画に過ぎない。ところが松倉城は極めて規模が小さく、とても美濃金山城と同等の本丸構造とは考えられない。つまり松倉城の本丸は天守台もしくはそれに相当する施設と見るべきであろう。そうであれば天守台内部に礎石が存在しないということになる。

美濃金山城の主郭からは巨大な礎石建物が検出されており、主郭御殿とみられる。石塁はこれらの主郭周囲に構えられるのではなく、東端部の三方向のみである。これを名護屋城や竹田城のように曲輪防御の石塁とは考えられない。規模からはやはり天守部分とみるのが妥当であ

ろう。

なお、地下室となる穴蔵ではなく、こうした石塁で囲まれた半地下構造となる天守台として明らかなものに丸岡城天守台がある。丸岡城天守は現存12天守のひとつで重要文化財に指定されている。その構造は独立式天守で天守台に掘立柱建物として天守が造営されたものとは評価されていた。しかし、昭和15～17年の解体修理で天守台石垣の内側から内面側に面を揃えた石垣が検出されており、天守の柱も地下で礎石に据えられていることが判明した。つまり創建段階では半地下式の天守台に礎石を配置して造営したものが、のちに半地下部分を埋めてしまって現在のような掘立柱構造の建物になったのである。

一方、この東端部の石塁で囲まれた部分が天守に相当するとしても一段高く天守台を構えるのではなく、本丸と同じレベルでの天守台となる。西端部が開放されているのは本丸御殿から直接出入りができるような構造だったからなのであろう。あるいは主郭御殿と接合していた可能性も考えられよう。そうした構造は高知城天守の形態と同一である。

いずれにせよ礎石、柱穴が検出されなかったのは大きな謎である。現在考えられるのは半地下部分が埋められている点である。これは破城による埋め戻しと考えられており、その行為は極めて念入りに行われている。この破城が単に取り壊すだけのものではなく儀礼的におこなわれた際に礎石も抜き取ったのちに封印するように埋め戻したのではないだろうか。

さらに気になる遺構としてこの伝天守台南側に構えられた枡形虎口の北端、すなわち天守台南面石垣 SV4直下で検出された礎石列 SB4の解釈である。柱間が一定せず不規則な点は文禄・慶長期の建物としては不安が残る。かつて犬山城天守は美濃金山城天守を移築したといわれていたが、その際美濃金山城天守の穴蔵としてこの枡形が想定されたことがあった。天守移築が移築前の建物をそのまま移築することはあり得ず、用材や瓦などを移築することはもはや当然のことであり、こうした説は成り立つ可能性は低い。さらに枡形内からはこの礎石建物 SB4に対応する礎石が検出されておらず、今回の発掘からも同じ規模の建物の移築の可能性の低いことが立証できたものと思う。ただ、枡形内に対応する礎石が存在しないとすると SB4はやはり「伝天守台」と対応する礎石列としか考えられない。枡形正面に廻縁のような施設が付属していたのであろう。

このように「伝天守台」では調査当初に内面方向に面を向けた石塁が検出され、半地下式の天守台であろうと見られたのであるが遺構面からは天守に伴う礎石や柱穴が検出されず、天守の存在を決定付けることは出来なかった。今後の課題としたい。

(中井)

〈参考文献〉

- 愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- 井川祥子 1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿の様相 - 中濃地域を中心として -」『美濃考古学』第2号 美濃の考古学刊行会
- 井川祥子 2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』高志書院
- 近江八幡市・近江八幡市教育委員会 2002『八幡山城遺跡秀次館跡確認調査報告書』
- 岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
- 奥本英里 2016「松坂城跡本丸石垣の発掘調査」『織豊城郭』第16号 織豊期城郭研究会
- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 小野木学 2012「東海〈美濃〉- 砂岩製宝篋印塔の分布と編年 -」『中世石塔の考古学 - 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布 -』高志書院
- 加藤理文 1994「豊臣政権下の城郭瓦 - 中部地方を中心に -」『織豊城郭』創刊号、織豊期城郭研究会
- 可見市 2005『可見市史 第一巻 通史編 考古・文化財』
- 可見市 2008『可見市史 第5巻 資料編 古代・中世・近世』
- 可見市 2010『可見市史 第2巻 通史編 古代・中世・近世』
- 可見市教育委員会 2013『金山城跡発掘調査報告書』
- 可見市教育委員会 2016『大萱古窯跡群発掘調査報告書Ⅰ』
- 可見市教育委員会・滋賀県立大学 2018『国史跡美濃金山城跡発掘調査概報Ⅰ』
- 可見市教育委員会・滋賀県立大学 2019『国史跡美濃金山城跡発掘調査概報Ⅱ』
- 兼山町史編纂委員会 1972『兼山町史』
- 木戸雅寿 1995「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第2号、織豊期城郭研究会
- 岐阜県教育委員会 2004『岐阜県中世城館跡総合報告書 第3集（可茂地区・東濃地区）』
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993『京都府遺跡調査概報』第54冊
- 黒田慶一 1995「豊臣時代の桐紋瓦について」『織豊城郭』第2号、織豊期城郭研究会
- 佐賀県立名護屋城博物館 2009『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」名護屋城跡 - 天守台 -』
- 佐賀県立名護屋城博物館 2012『名護屋城跡 - 三ノ丸 -』
- 財団法人 犬山城白帝文庫歴史文化館 2009『木曾川と犬山』犬山市教育委員会・財団法人犬山城白帝文庫
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『穴太遺跡発掘調査報告書』Ⅳ
- 滋賀県教育委員会 2009『特別史跡安土城跡発掘調査報告書Ⅱ - 主郭、搦手道の調査および総括 -』
- 下高大輔 2015「彦根城石垣普請工程解明のための基礎的作業」『織豊城郭』第15号 織豊期城郭研究会
- 下高大輔 2017「豊臣城郭の石垣変遷 - 城郭石垣変遷が示す豊臣政権 -」『織豊城郭』第17号 織豊期城郭研究会
- 遠江中世石塔研究会編 2009『東海地方における中世石塔の出現と展開 - 花崗岩製石塔と在地産石塔 -』石造物研究会 第10回研究会資料
- 中井均 2007「今、破城を再検討する」『織豊城郭』第11号 織豊期城郭研究会
- 奈良国立文化財研究所 1990『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良俊哉 2003「八幡山城遺跡 - 滋賀県近江八幡市八幡山城遺跡の調査成果 -」『日本考古学協会 2003年度 滋賀大会 研究発表資料』日本考古学協会
- 乗岡実 2007「戦国時代の備前焼 - 編年と器種分化 -」『東洋陶磁』VOL46 東洋陶磁学会
- 乗岡実 2018「岡山城跡 本丸跡・二の丸跡・三の曲輪跡」『続 織豊期城郭瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会
- 藤木久志・伊藤正義編 2001『城割りの考古学』吉川弘文館

藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

平塚正雄編 1989『濃州徇行記 濃陽志略』

御嵩町 1992『御嵩町史 通史編 上』

三宅唯美・小野木学・中畠茂・砂田晋司・竹谷充生 2011「瑞浪市の中世石塔」『瑞浪市歴史資料集』第1集 瑞浪市陶磁資料館

宮崎博司・市川浩文 2017「肥前名護屋城跡の礎石建物跡と石垣について」『織豊城郭』第17号 織豊期城郭研究会

森島康雄 1994「聚楽第と城下町の瓦」『織豊城郭』創刊号、織豊期城郭研究会

森田克行 1984「第5章考察 第2節遺物 IV屋瓦」『摂津高槻城 - 本丸跡発掘調査報告書 -』高槻市教育委員会

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会

山内伸浩 2010「美濃窯（瓷器系）」『古陶の譜 中世のやきもの－六古窯とその周辺－』

山崎信二 2000「近世瓦の研究」同成社

横山住雄 2015『中世武士選書29 斎藤道三と義龍・龍興 戦国美濃の下克上』pp.220-225

渡辺千明訳 1996『現代語訳 大通寺本 金山記全集大成』

図版1

I
区



SV1・SV2（西より）



1トレンチ a-a' 土層（南西より）



1トレンチ内 SK1検出状況（西より）



1トレンチ c-c' 土層（南東より）



3トレンチ SV1・2南東隅（西より）



2トレンチ a-a' 土層（南西より）



4トレンチ東壁土層及び平面（西より）



5トレンチ内 SV2東側（西より）



5トレンチ内 SV2西側（西より）



6トレンチ内 SV1（南西より）



6-1トレンチ内サブトレンチ（西より）



6トレンチ g-g' 土層（北より）



6-2トレンチ h-h' 土層（南東より）



6-3トレンチ i-i' 土層（北西より）



7トレンチ礫検出状況（東より）



7トレンチ a-a' 土層（北東より）

図版3

I
区



I 区西側完掘状況（東より）



8トレンチ I-I' 土層（南より）



9トレンチ a-a' 土層（東より）



I 区西側礎石出土状況（西より）



I 区東側礫層検出状況（北東より）



I 区東側整地面と SV1・SV2（西より）



I 区東側整地面と SV1・SV2（西より）



SV1南側（南西より）

I
区



SV2東側（北西より）



I 区東側瓦出土状況（南東より）



I 区 SK2半裁状況（南西より）



I 区 SK3半裁状況（北西より）

II
区



II 区完掘状況（西より）



II 区 SV3（東より）



SV3C・D 面（東より）



SV3C・D 面と岩盤（南東より）

図版5

Ⅱ
区



SV3B 面（東より）



SV3A 面、SX1検出状況（南西より）



SX2検出状況（南西より）



SB3、SX2遺物出土状況（南東より）



Ⅱ区 a-a' 土層（北西より）



10トレンチ o-o' 土層（南より）



11トレンチ p-p' 土層（南東より）



q-q' 土層（北西より）



r-r' 土層（南西より）



r-r' 土層西側（南西より）



s-s' 土層（南東より）



SK4完掘状況（北東より）



s-s' ラインより北側造成状況（北西より）



SV3裏込め検出状況（西より）



Ⅲ区完掘状況（北より）



Ⅲ区完掘状況（南西より）

図版7

Ⅲ
区



1-1トレンチ礎石1・2、a-a' 土層（南東より）



1-2トレンチ c-c' 土層（南より）



1-2トレンチ礎石6検出状況（北より）



1-2トレンチ d-d' 土層（北東より）



1-3トレンチ e-e' 土層（西より）



2トレンチ g-g' 土層（東より）

Ⅳ
区



Ⅳ区完掘状況（北東より）



Ⅳ区完掘状況（南西より）



1トレンチ a-a' 土層 (西より)



1トレンチ SK1検出、SK2・3完掘 (北西より)



1トレンチ SK1完掘状況 (北西より)



2トレンチ完掘状況 (北西より)



2トレンチ b-b' 土層北側 (東より)



2トレンチ南側拡張部分西壁土層 (東より)



2トレンチ b-b' 土層南側 (北より)



2トレンチ礎石4検出状況 (南西より)

図版9

V
区



SX3検出状況（南より）



3トレンチ a-a' 土層（北より）



4トレンチ b-b' 土層（北東より）



5・6トレンチ完掘状況（北東より）



c-c' 土層サブトレンチ2部分（西より）



SX2及び礎石5検出状況（北西より）

石
段
部
分



石段部分完掘状況（南西より）



石段部分上段（南西より）



C2-C6土層（西より）



C4東側拡張部分土層（西より）



B5-C5土層（南西より）



石段上段検出状況（南東より）



d-d' 土層（南西より）



石段西側礎石検出状況（南東より）



石段東側円礫部分検出状況（南東より）



枡形虎口（南面石垣）D地点（南西より）



I 区出土遺物 1



I 区出土遺物 2



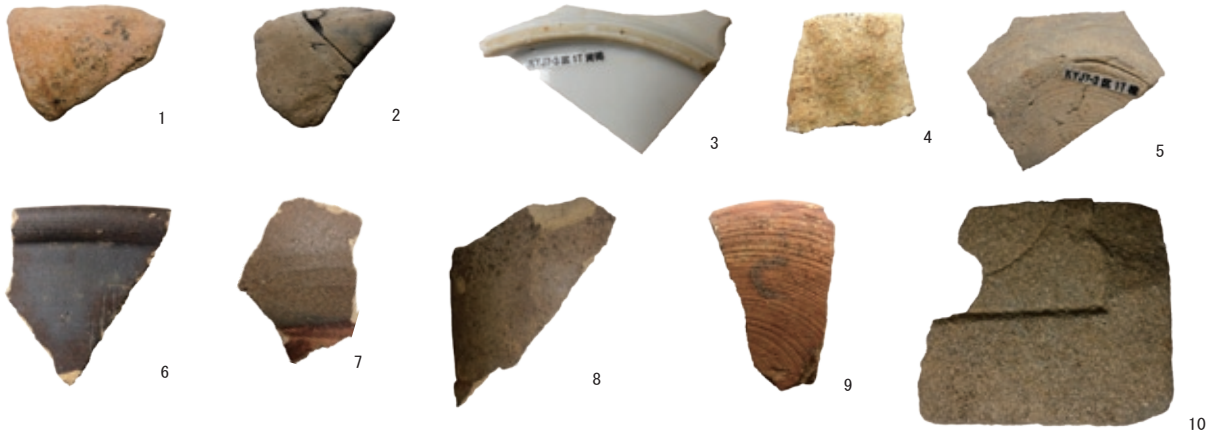
I 区出土遺物 3



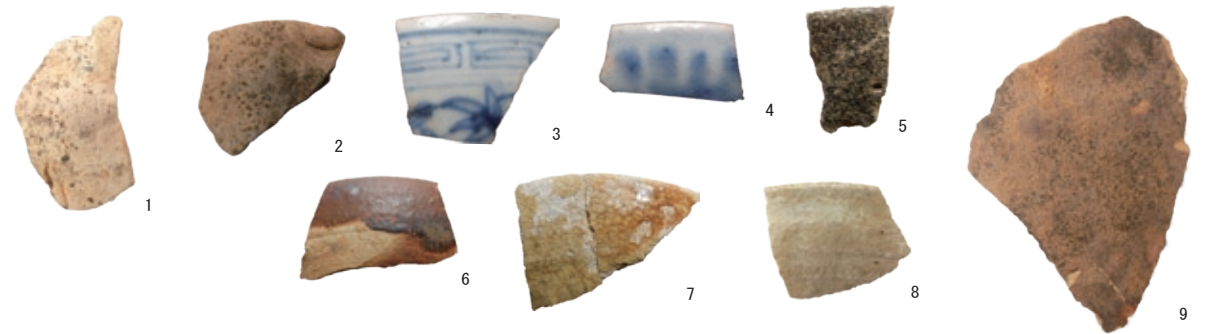
II 区出土遺物 1



Ⅱ区出土遺物2



Ⅲ区出土遺物



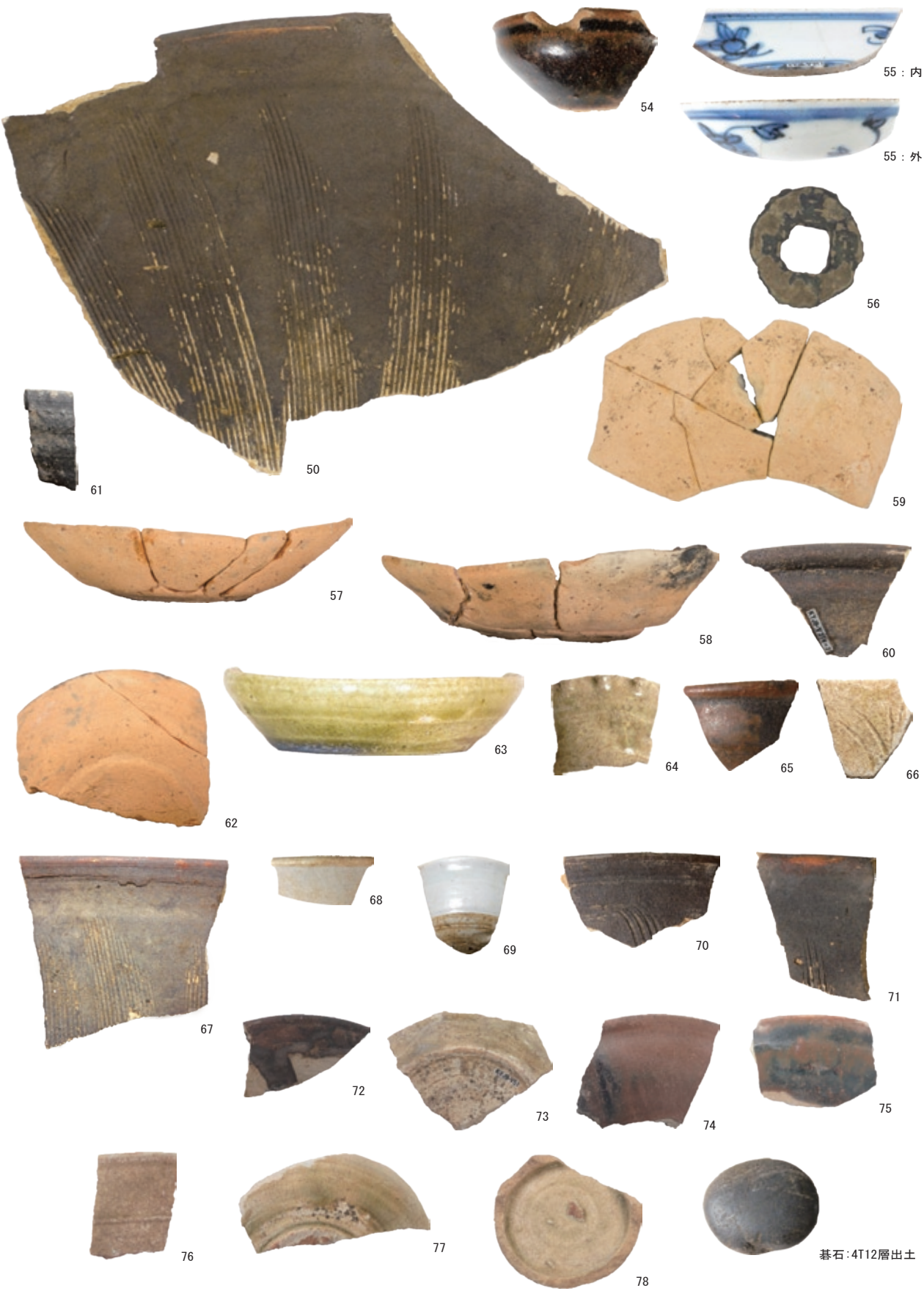
Ⅳ区出土遺物



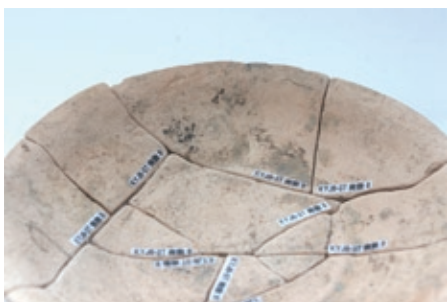
Ⅴ区出土遺物 1



V区出土遺物2



V区出土遗物3



Ⅱ区報告番号 4 内面



Ⅱ区報告番号 4 外面



V区報告番号 51 内面



V区報告番号 51 外面



V区報告番号 59 内面



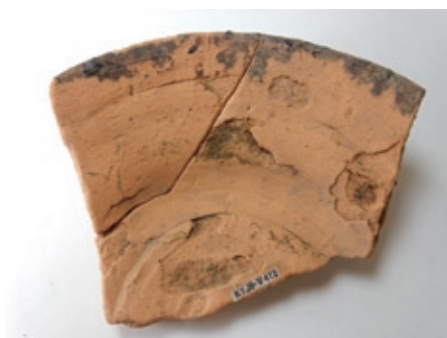
V区報告番号 59 外面



V区報告番号 48 内面



V区報告番号 48 外面



V区報告番号 62 内面



V区報告番号 62 外面

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みのかねやまじょうあとしゅかくはくつちょうさほうこくしょ						
書 名	美濃金山城跡主郭発掘調査報告書						
副 書 名							
巻 名							
シ リ ー ズ 名	可児市埋文調査報告						
シリーズ番号	58						
編 集 者 名	長江真和 中井均 村上慶介 佐藤佑樹 柴田慎平 松原草太						
編 集 機 関	可児市 文化スポーツ部 文化財課						
所 在 地	〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地						
発 行 年 月 日	西暦2021年3月31日						
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間 面 積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
み の 美濃 かねやまじょうあと 金山城跡	ぎ ふ け ん か に し か ね や ま 岐阜県可児市兼山 1418-211	21214	4477	35° 27' 23"	137° 05' 49"	第6次 (74㎡) 20170904~1027 第7次 (75㎡) 20180809~0928 第8次 (53㎡) 20190513~1115 第9次 (45㎡) 20200217~0313	遺跡の 内容確認
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
美濃金山城跡	城館跡	中世	石垣、礎石	瀬戸美濃産陶器、 かわらけ、中国陶磁、 瓦、古銭		平成29年度から行った主郭 部分の第6~9次調査の調 査成果報告。天守想定建 物の様相が明らかとなった。	

可児市埋文調査報告58

美濃金山城跡主郭発掘調査報告書

令和3年3月31日 印刷

令和3年3月31日 発行

編集・発行 可児市文化スポーツ部 文化財課

〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地

Tel 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751

印 刷 丸理印刷株式会社